

ISBN4-8163-4231-1

C0073 ¥1500E



9784816342318



1920073015000

ナツメ社 | 定価: 本体1500円 + 税

図解雑学 モーツァルトの名曲



18世紀から今日まで、多くの人びとに愛されつづけているモーツァルト。本書では、彼のたくさんの名曲のなかから20作品を厳選し、チャーミングな小品から人生の深淵をのぞくような大傑作までを、イラストや図版を用いてやさしく解説します。それぞれの聴きどころは付属のCDですぐに聴くことができ、自分の耳で実感しながら作品を理解することができるようになっています。後半では、18世紀を生きたひとりの人間としてのモーツァルトに迫ります。“神童”と言われた天才にも、その時代の人びととともに生き、笑い、泣いたエピソードが豊富にあり、モーツァルトがぐっと身近になるはず。

図解雑学



CD2枚組

モーツァルトの名曲

日本モーツァルト研究所所長
海老澤敏 編著



ナツメ社
4231



CD2枚組

図解雑学

モーツァルトの名曲

日本モーツァルト研究所所長 海老澤 敏 = 編著



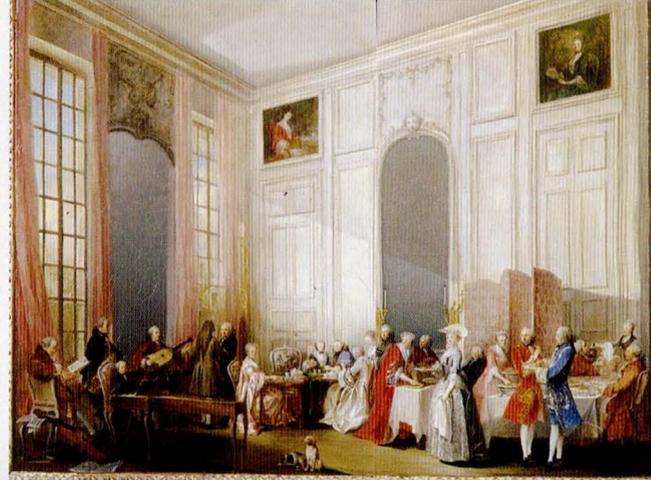
クラシックの中のクラシック、モーツァルト。8歳で交響曲を書き、12歳で本格的なオペラを書き、毒殺説やフリーメイソンなど、話題が豊富。ヒーリングや胎教やカラダや脳にいいなど、不思議なことさえ言われます。その音楽と作曲家その人の本当のところはどうか、実際に目で耳でお確かめください。

ナツメ社

絵と文章でわかりやすい!

「大礼服を着たモーツァルト」(1763年)
幼いモーツァルトの才能に感激した
女帝マリア・テレジアは大礼服を贈った。





『コンティ公宮殿のお茶会』(1766年)
西方への大旅行の途中訪れたパリのコンティ公の宮殿で開かれた茶会の様子。10歳のモーツァルトはクラヴサンを弾いている。

『父子3人の奏楽図』(1763年)
幼い頃よりモーツァルトは父から音楽の手ほどきを受け、瞬く間に吸収していった。

モーツァルトの自筆譜 (1764年)
8歳のモーツァルト自身が書いた現存する最初の作品。ト長調とハ長調の短いメヌエット。



『皇太子ヨーゼフ2世の結婚記念音楽会の風景』(1760年)
聴衆のなかに大司教シュラッテンバッハと父レオポルトのあいだに座る幼いモーツァルトの姿が描かれている。(想像図)



ザルツブルクの風景
ザルツァハ川の向こうにはモーツァルトが数多くのミサ曲を提供した教会、背後はホーエンザルツブルク城。

Prof. des Künden Bippels des Ballasts des Tuilleries
 Wie solcher auff der Seiten gegen der Gassen anzusehen
 Prop. rotundi Cacaminus in Palatie des Tuilleries.



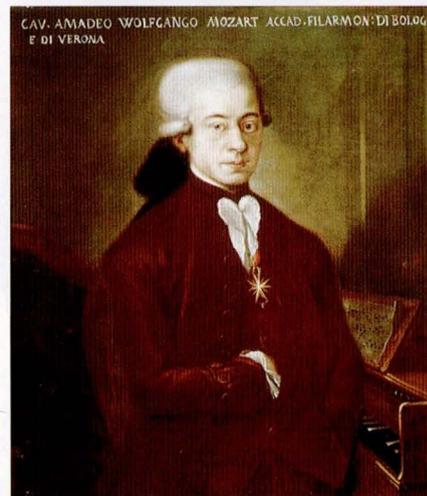
チュイルリー宮殿
 1778年6月18日、この宮殿のスイス人の間で初演された
 《バリ交響曲》は大成功をおさめた。(→p18)

『イタリアのモーツァルト』(1770年頃)
 新発見のモーツァルトの肖像画。イタリア滞
 在中の14歳のモーツァルトの若々しい姿。

『ヴェローナのモーツァルト』(1770年)
 最初のヴェローナ滞在中のモーツァルト。
 イタリア旅行は音楽的に大きな影
 響があっただけでなく栄光に満ちた旅
 行となった。



『モーツァルト一家の肖像』(1780年)
 マンハイム・パリ旅行から戻って描かれた一家の肖像画。母はパリで没したため額に入れて描かれている。



システリーナ礼拝堂内部
 1770年4月11日、ここを訪れたモーツァルト
 は秘曲《ミゼレーレ》を聴いている。(→p146)

『黄金の軍騎士勲章をつけたモーツァルト』
 (1777年)
 ローマ教皇から授与された「黄金の軍騎士勲章」
 をつけた肖像画は、マルティーニ神父に贈られ
 た。(→p146)



オペラ《魔笛》より夜の女王（1818年）
1791年9月30日に初演された《魔笛》は、ウィーンの市民たちから熱狂的な支持を得た。（→p92）



《魔笛》の小屋
ここでオペラ《魔笛》が作曲された。1950年にザルツブルクのモーツァルテウム財団裏の庭園に移された。



ドゥーシェク夫人のピアノで《ドン・ジョヴァンニ》を作曲するモーツァルト
モーツァルトはドゥーシェク夫妻の別荘で《ドン・ジョヴァンニ》を書き上げた。



「ピアノに向かうモーツァルト」（1789年頃）
ヨーゼフ・ランゲによって書かれた未完の肖像画。



《レクイエム》より《イントロイトゥス》の自筆譜
モーツァルト最後の傑作《レクイエム》は現在でも多くの
ひとに愛されている。(→p102)

Mozart

はじめに

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、おそらくは世界中でもっとも名の知られた西洋の作曲家であろう。かつて一番有名だったクラシック音楽家はベートーヴェンであった。しかし前世紀中葉に生誕 200 年祝年を迎えてから、とりわけ彼の名前はポピュラーなものとなっていった。彼の 35 歳と 10 カ月ほどの生涯は後世からは早世と捉えられつづけてきた。確かに今日の長寿社会からみればそう考えられても当然であろう。だが彼が 30 年の創作活動で書き残したおよそ 800 曲もの作品の声楽曲と器楽曲にわたる楽種のひろがり、名曲、佳曲の^{おびただ}さを知れば、そしてその量のみならず質の高さ、充実度を識れば、彼が常人のみか、多くの天才音楽家の域をはるかに超える音楽史上空前絶後、未曾有の奇蹟であったことが了解されるだろう。

時あたかも 2006 年はそのモーツァルトの生誕 250 年の祝年であった。前世紀のふたつの記念年、1956 年の生誕 200 年と 1991 年の没後 200 年のあいだに彼の全創作活動を総合し、網羅した『新モーツァルト全集』の刊行が進められ、そして完結した一方で、1980 年代前半にはアメリカ映画『アマデウス』が登場し、従来支配的であった楽聖モーツァルト像が瓦解し、人間モーツァルトの新しいイメージが人びとの心に刻みこまれたものだった。ところがこの映画がもたらしたのは新たなモーツァルト神話の誕生でもあった。

と同時にモーツァルト、ならびに彼を象徴するもうひとつの名アマデウスは商標ないし商品名となり、数々のビジネスの標的とも餌食ともなった。文化財ないし文化自体は商売、経済行為に利用される運命にある。前世紀最後の記念の年と今世紀最初の祝年はそうした面で狂騒の年と位置づけられる。マス・メディアはモーツァルトの名、そしてアマデウスを広告

塔に仕立てあげるのに狂奔した。出版界も同然であった。2006年にはおよそ50冊を越えるモーツァルト本が刊行されたが、その多くは旧態依然たる伝説、神話を垂れ流しさえしている。

そんな状況のなかで誕生した本書は、夥しいモーツァルトの作品のなかから注目すべき作品を各ジャンルにわたって厳選し、それらの名品を注意深く聴きこむことによって、モーツァルトの響きと精神とに接近し、それを読者諸兄姉自身のものでしていただくよう努めた。

モーツァルトの生誕の歩みも、また生き様も、音楽家としての技術や人間表現を学んだ度重なる旅も、また彼が出会ったさまざまな人たちや彼をとりまく当時の社会的状況や思想的背景も、彼の芸術の理解には必要不可欠の知識であり、読者諸兄姉は、むしろ作品に接近する前に、そうした部分を読まれることをお勧めしたい（本書では後半部分で扱っている）。そうした予備知識は音楽の理解の助けになることはあれ、けっしてそれを妨げることはない。

本書記述の根本は近年のモーツァルト研究の成果をできるかぎり正確忠実にとりこんだことである。そうした点で本書がモーツァルトを愛する読者諸兄姉の期待に応え、信頼されうる枕頭の本となることを願っている。

2006年9月 海老澤 敏

Part I

モーツァルトの名曲を知る ～選りすぐり20選～

●モーツァルトの交響曲を知る

交響曲第1番 変ホ長調 K16	14
交響曲第31番 二長調 K297 《パリ》	18
交響曲第40番 ト短調 K550	22
交響曲第41番 ハ長調 K551 《ジュピター》	26

◎豆知識	30
------	----

●モーツァルトのセレナードを知る

セレナード 二長調 K320 《ポストホルン》	32
セレナード ハ短調 K388 《ナハトムジーク》	36
セレナード ト長調 K525 《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》	40

◎豆知識	44
------	----



●モーツァルトの協奏曲を知る

ヴァイオリン協奏曲第5番 イ長調 K219 《トルコ風》	46
フルートとハープのための協奏曲 ハ長調 K299	50
ピアノ協奏曲 二短調 K466	54
クラリネット協奏曲 イ長調 K622	58
◎豆知識	62

●モーツァルトの室内楽／独奏曲を知る

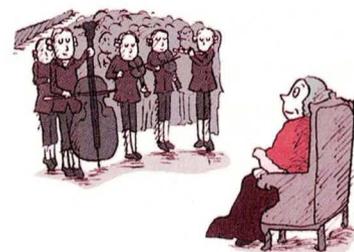
ヴァイオリン・ソナタ ホ短調 K304	64
ピアノ・ソナタ 変口長調 K333	68
弦楽四重奏曲 ハ長調 K465 《不協和音》	72
弦楽五重奏曲 ト短調 K516	76
◎豆知識	80

●モーツァルトのオペラを知る

《クレータの王イドメネーオ》 K366	84
《フィガロの結婚》 K492	88
《魔笛》 K620	92
◎豆知識	96

●モーツァルトの宗教曲を知る

《戴冠式ミサ》 ハ長調 K317	98
《レクイエム》 二短調 K626	102
◎豆知識	106



Part 2

モーツァルトの事件簿

●モーツァルトの誕生～少年時代

神に愛されし者・アマデウスの誕生 0歳～	112
旅の始まりと賞賛の日々 6歳～	114
少年オペラ作曲家の誕生 12歳～	116
イタリアでの就職活動 13歳～	118

●モーツァルトの青年時代

宮廷作曲家としての日々 16歳～	120
母の死と失恋を乗り越えて 22歳～	122
大司教と決別し自立の道へ 25歳～	124
コンスタンツェとの結婚 26歳～	126

●モーツァルトの円熟期～晩年

時代の寵児・モーツァルト 28歳～	128
モーツァルトの栄光と悲劇 31歳～	130
人生の黄昏 32歳～	132
レクイエム・最後のとき 35歳	134

Part 3

モーツァルトの冒険

モーツァルトの旅の軌跡	140
ウィーン旅行 ①	142
西方への大旅行	144
イタリア旅行	146
ウィーン旅行 ②	148
マンハイム・パリ旅行	150
ミュンヘン旅行	152
プラハ旅行 ①	154
ベルリン旅行	156
プラハ旅行 ②	158



Part 4

モーツァルトのおもひで ~タイムマシンに乗って~

- 18 世紀にタイムスリップ
 - モーツァルトをとりまく人びと -----164
 - 天才モーツァルトを育て上げた父、レーオポルト -----166
 - モーツァルトに明るさを与えた母、マリーア・アンナ -----168
 - モーツァルトと同じように音楽の才能に恵まれた姉、ナンネル -----170
 - モーツァルトが終生愛した妻、コンスタンツェ -----172
 - モーツァルトのよきライバル、サリエーリ -----174
 - モーツァルトの生涯の師友、ハイドン -----176

- 19 世紀にタイムスリップ
 - モーツァルトに影響を受けた人びと -----178
 - モーツァルトを崇拜した古典派最後の巨匠、ベートーヴェン -----180
 - モーツァルトの作品の伝道師、ブラームス -----182
 - モーツァルトの音楽とともにデビューを飾った、ショパン -----184
 - モーツァルトに憧れつづけた、チャイコフスキー -----186

付録

もっと知りたい! モーツァルト

- モーツァルトの家系 -----192
- モーツァルトの肖像 -----194
- モーツァルトの家計 -----196
- モーツァルトの死因 -----198
- モーツァルトのお墓 -----200
- モーツァルト、ふたつの全集 -----202
- ケツヘル番号ノウハウ -----204



モーツァルトの名曲 目次

column

モーツァルトの楽譜 82

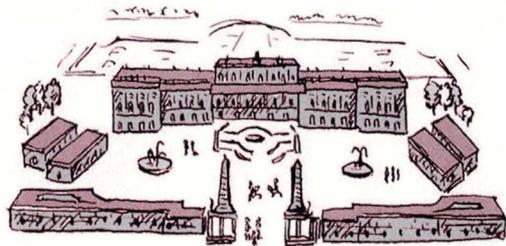
モーツァルトとフリーメイソン 108

18世紀の手紙の常識 136

18世紀の旅の常識 160

モーツァルトの恋 188

付属 CD 収録曲・演奏家リスト 206



この本の使い方

作品名

ケッヘル番号

曲の作曲(完成)された場所、年代

CD 1-9 のマークがついている部分は付属の CD で聴くことができます。

* CD にはそれぞれの作品のなかからおすすめの1曲(楽章)をカット編集して収録しています。

この本は、モーツァルトの音楽を学ぶためのガイドブックです。目次には、モーツァルトの音楽の歴史や、その音楽の魅力を伝えるためのイラストや写真を掲載しています。また、モーツァルトの音楽の魅力を伝えるためのイラストや写真を掲載しています。

この本は、モーツァルトの音楽を学ぶためのガイドブックです。目次には、モーツァルトの音楽の歴史や、その音楽の魅力を伝えるためのイラストや写真を掲載しています。また、モーツァルトの音楽の魅力を伝えるためのイラストや写真を掲載しています。

この本は、モーツァルトの音楽を学ぶためのガイドブックです。目次には、モーツァルトの音楽の歴史や、その音楽の魅力を伝えるためのイラストや写真を掲載しています。また、モーツァルトの音楽の魅力を伝えるためのイラストや写真を掲載しています。

【凡例】

ケツヘル番号

本書ではケツヘルの『モーツァルト全作品主題年代順目録』初版におけるケツヘル番号を採用し、Kで示しています。

(ケツヘル番号については204ページ参照)

楽器名

原則的に現代の楽器の名称で記しています。

脚注

本文中のゴシックの用語は、それぞれの曲の解説文の最後に説明を入れています。

(Part 1のみ)



このマークは手紙からの抜粋を示しています。

写真協力：株式会社東美、株式会社 PPS 通信社、チェコ政府観光局、ORION PRESS、ウィーン楽友協会、ザルツブルク国際モーツァルテウム財団図書館、ザルツブルク国際モーツァルテウム財団文庫、ザルツブルク・モーツァルト博物館、海老澤敏

音源提供：ナクソス・デジタル・ジャパン

口絵・本文デザイン：藤山 智子

本文イラスト：岡村 奈穂美

編集協力：株式会社アルク出版企画（荒井 由子）

編集担当：矢野 正基（ナツメ出版企画株式会社）



Part 1

モーツァルトの名曲を知る

～選りすぐり 20 選～

2世紀以上ものあいだ、人びとを魅了しつづけてきたモーツァルトの音楽。彼は生涯で 800 曲にもものぼる作品を書き、数多くの名曲を残した。そのなかから 20 曲を厳選し、ジャンルごとに紹介する。モーツァルトの音楽の真髄とは？

交響曲第1番

変ホ長調 K16

POINT
1

空前絶後8歳の神童の最初の交響曲

◎ 旅の空の下、蕾ほころぶ少年作曲家の姿

1762年、早くも5歳の終りに始められる、幼いヴォルフガング坊やの旅は、ミュンヘン、ウィーンと宮廷めぐりの旅だった。次の西方への旅でも、宮廷めぐりはドイツ各地、フランス、そしてイギリスへと一家でつづけられていく。各地で評判をとったのは、クラヴィーア（ピアノ）の鍵盤を布で覆って弾くなど、軽業めいた神童ぶりだった。ドイツのまちフランクフルトでは7歳上の少年ゲートを、フランスはパリで宮廷人や文人たちを、そうした見世物芸でびっくりさせ、楽しませもした。ヴェルサイユ宮殿に伺候して国王ルイ15世に拝謁したことも、モーツァルト一家にとって大変光栄なことだった。
(→ p114)

◎ 旅は実りゆたかな仕事場

だが、この大旅行で、モーツァルトは、もちろん父親レーオポルトのよき指導もあって、故郷ザルツブルクで早くも5歳で試みていた作曲を再開する。パリではチェンバロとヴァイオリンによるソナタ（K6～K9）を、そしてロンドンではチェロを加えた三重奏ソナタ（K10～K15）を書き、これが出版され、王女や王妃などに献呈されている。

故郷で最初につくられたのはアンダンテやアレグロ、メヌエットといった短い作品だったが、そんな小曲の形式がもう少し複雑になり、急-緩-急といったテンポのちがった楽章で組み立てられたものがソナタである。そうしたソナタの先にもっと大きな編成をもつ交響曲（シンフォニー）が登場する。モーツァルトがロンドンでなんと8歳という幼い年齢で書いた最初の交響曲がそれにはほかならない。

はじめての交響曲作曲の様子

モーツァルトは幼い頃から作曲の練習をしてきたが、早くも8歳には交響曲の作曲がおこなわれた。姉のナンネルはモーツァルトの死後、弟のはじめての交響曲作曲の様子を報告している。



作曲の練習の過程

1761年 (5歳)	アンダンテ アレグロ メヌエット
楽器：ピアノ（8小節～20小節）	
↓	
1763年 (7歳)	ソナタ
楽器：ピアノのみ、またはピアノとヴァイオリン（2楽章～4楽章）	
↓	
1764年 (8歳)	交響曲第1番
楽器：オーボエ2、ホルン2、ヴァイオリン2部、ヴィオラ、バス（3楽章）	

ロンドンで、私たちの父は死にかけの病気になる、私たちはクラヴィーアに触れることが許されませんでした。それでヴォルフガングは勉強のために、あらゆる楽器——とくにトランペットとティンパニをともなったはじめての交響曲を作曲しました。

ナンネル

モーツァルトの死の8年後に姉ナンネルはこう語っているが、交響曲第1番（K16）には、トランペットもティンパニも含まれていない。48歳の彼女の13歳の頃の記憶に間違いがあるのだろう。K16がおそらく確実に最初の交響曲であると思われる。K16は当時のオケの標準的な編成をもつ。

作曲年・地



1764年(8歳)
ロンドンにて

POINT
2

すでに個性的な輝きに煌めく響き

◎ 父親に次ぐ生涯の師、クリスティアン・バッハとの出会い

当時ロンドンではパリを凌ぐ音楽都市だった。大作曲家ヘンデルがまだ世を去ったばかりのバロック音楽の余光が消えやらぬこの楽都でも、新しい古典派時代に音楽家たちの活動はすでに始められていた。その多彩多様な音楽家の活躍のなかで、大バッハの末子ヨハン・クリスティアンは、僚友のカール・フリードリヒ・アーベルと相たずさえて〈バッハ＝アーベル・コンサート〉を催し、古典派様式の交響曲や協奏曲、さらには室内楽曲を披露し、人気を博していた。

モーツァルトは彼らから交響曲創作の刺激をつよく受けたのだった。もちろんそれ以前から父レーオポルトやその同僚たちの交響曲も知っていたし、加えてアーベルの作品を、ヴォルフガングは筆写までして勉強していた。とりわけクリスティアンの明るく晴れやかで淀みのない曲調、旋律美はモーツァルトの得がたいお手本となった。

◎ モーツァルト、少年にして我が道をゆく

モーツァルトのおそらくははじめての交響曲は、当時ロンドンで好まれていたイタリアのシンフォニア（あるいはオペラ序曲）と同様、メヌエットなしの急-緩-急の3楽章形式で書かれている。まだ後年の作品のように複雑なソナタ形式は使われていないが、その原形の状態で、まさに蕾がほころんで花弁が開き始めた初々しさが香りたつかのようだ。

それでいてこの《変ホ長調交響曲》は、すでにモーツァルトならではと思わせる旋律美と律動感にあふれている。また第2楽章アンダンテでホルンが響かせる〈ド・レ・ファ・ミ〉のいわゆる〈ジュピター音形〉は、モーツァルト最後の交響曲が到達する天上の世界を予見するかのよう^(→p28)に、あらわれるのである。

アンダンテ、アレグロ…もともと音楽の速さをあらわす用語だが曲の名称としても使われる。バッハ＝アーベル・コンサート…入場料を払えば誰でも入れる、現在の公開演奏会の先駆け。



クリスティアン・バッハの影響

「交響曲」の起こり

オペラ序曲

オペラの前に演奏される器楽曲。バロックの時代はフランス式序曲（緩-急-緩）やイタリア式序曲（急-緩-急）が好まれていた。

シンフォニア

17世紀末になるとイタリア式序曲を「シンフォニア」と呼ぶようになった。これが交響曲の原形。

交響曲

シンフォニアの急-緩-急の3楽章を用い、弦楽器の合奏にオーボエ、ホルン各2本を加えたかたちが、初期の交響曲(シンフォニア)の基礎となった。クリスティアン・バッハもこのスタイルで交響曲を作曲していた。この3楽章の交響曲はのちにメヌエットを加えた急-緩-メヌエット-急の4楽章の交響曲へ発展した。



モーツァルトはクリスティアン・バッハと親密に交流した。ロンドンではバッハがモーツァルトを際にのせ、国王と王妃の前で交互にチェンバロを弾いたというエピソードが伝えられている。

交響曲第1番

第1楽章 モルト・アレグロ

(きわめて速く、快活に) →

急

第2楽章 アンダンテ

(歩く速さで) →

緩

♩

第3楽章 プレスト

(きわめて速く) →

急

交響曲第31番

ニ長調 K297 《パリ》

POINT
1

青春の旅は交響曲完成の一里塚

◎ マンハイム・パリ旅行中の音楽体験

モーツァルトは8歳ではじめて交響曲を作曲して以来、交響曲作家として数多くの作品を書いていた。イタリアでも、ザルツブルクでも、そしてウィーンでもそれはつづけられる。イタリア風シンフォニアのほか、メヌエットをとまなう4楽章制のウィーン風の交響曲にも印象深い、密度の濃い傑作がある。

マンハイムは音楽史に名高い楽派の本拠地だった。モーツァルトはこのままで曲は書かなかったが、マンハイム楽派の交響曲作曲のノウハウを体得した。そしてはじめて訪ねたときから14年もの歳月をへだてたパリでは、すでにルイ15世が世を去って、孫のルイ16世の時代に移っており、〈コンセール・スピリチュエル〉といった公開演奏会が盛んにおこなわれ、古典派様式の交響曲や協奏曲も好まれていた。
(→ p150)

◎ 《パリ交響曲》の初演と母親の死と

モーツァルトはその演奏会の支配人ル・グロと知り合い、交響曲を1曲注文される。彼が意欲的に作曲に取り組み、この交響曲をチェイラー宮殿のスイス人の間（現存しない）で演奏させたのは1778年6月中旬のことだった。その演奏は聴衆の喝采を浴びたものの、パリまで息子に同行していた母親のマリア・アンナはこのコンサートに出席できなかった。1週間ほど前に公園で散歩した折に風邪をひき、ベッドに就いていたからだ。そして初演から2週間後に異郷の地で寂しくもこの世を去ったのだ。母親が亡くなったその晩に書かれた父親宛の手紙には、父姉への配慮から母親の死を隠しながら、この《パリ交響曲》(K297)の大成功を誇らかに語っているモーツァルトの姿がある。
(→ p122)

《パリ交響曲》の初演の様子を伝えた手紙より

リハーサルでは…

「(交響曲第31番の)練習では大変心配でした。生涯にこんな下手なものは聴いたことがなかったからです。でもいつもたくさんものを練習するので、もう時間がありませんでした。ぼくはうまくいきますようにと神様に祈りました」

そして本番

「交響曲が始まりました。ちょうど第1楽章の真んなかへんに、気に入られるに違いないとわかっているパッセージがありましたが、すべての聴衆がそれで心を奪われたのでした。実際、大変な大喝采だったのです」



『ヨーロッパ通信』

1778年6月26日号

聖体の大祝日の日のコンセール・スピリチュエルはモーツァルト氏の交響曲によって始められた。この芸術家はまことに幼い年齢の頃からクラヴサン奏者のあいだで評判となっていたが、今日ではもっとも成熟した作曲家のなかに位置づけられている。

作曲年・地



POINT
2

《パリ交響曲》は交響曲連山の分水嶺

◎《パリ交響曲》大成功の秘訣は？

モーツァルトは自作がどんなふう演奏されるものか心配でリハーサルを聴きにいったびっくりした。2回のリハはいずれもあまりにも下手糞だった。もう1度やり直してもらいたいくらいだったが別の曲の練習もあって無理だった。当時のオーケストラの実質的な指揮者だった〈コンツェルトマイスター〉の経験豊富な彼は、本番も同じような体たらくだったら、首席奏者からヴァイオリンを奪ってでも自分がやろうと決心して翌日会場に向向く。できればはさすがよかったようだ。稽古をあまりやらなくても本番はなんとかなるのが昔も今も変わらぬ楽員の習性いや特技なのだ。

モーツァルトの《パリ交響曲》は大受けだった。聴衆の大拍手喝采の原因はいったいなんだったのだろうか。

◎フランスの聴衆の好みを逆手に

〈コンセール・スピリチュエル〉のオーケストラは大編成だった。そんなオーケストラが第1楽章やフィナーレ（終楽章）で全楽器が早いテンポでしかもユニゾンの最強奏で始める出方は格好よく、パリの聴衆が待ち望んでいたものだった。モーツァルトはそれを取りこんでまず彼らに胡麻をすってこのシンフォニーを始めるのだ。〈弓の最初の一弾き〉と彼が語っている総奏のことである。

ほかの工夫もいろいろと各楽章に鑲めた。フィナーレの冒頭では、逆にパリの聴衆の趣味を逆手にとって始める。みんながこの楽章もユニゾンの総奏で始めると予想しているのに、なんとヴァイオリン2部の弱奏のかすかな音で出て、みんなが耳を翫てたところで強奏が爆発する。そこで拍手喝采が思わず入るのだった。聴衆の耳を、心を掴む達人の技でなくてなんであろうか。

コンツェルトマイスター…現在の〈コンサートマスター〉（第1ヴァイオリンの首席奏者で合奏長の）、前身。指揮者の役割が強い。ユニゾン…斉奏。複数の声部が同音で演奏すること。

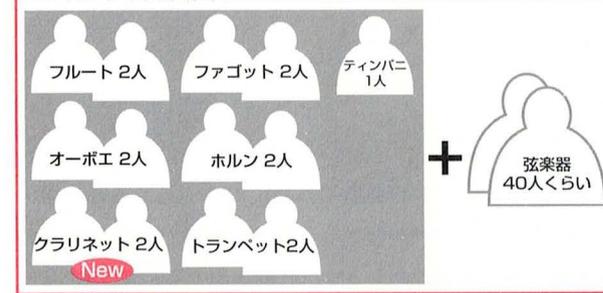
● ギョルツブルクの倍の規模のオーケストラ

ギョルツブルクでの交響曲(基本形)



ロンドン（交響曲第1番）や、オランダ、ウィーン、イタリアで作曲された交響曲も、ギョルツブルクとだいたい同じくらいの規模のオーケストラのためにつくられている。

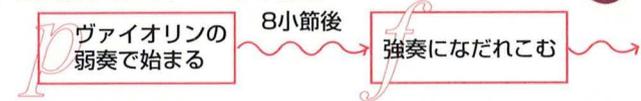
パリでの交響曲



第31番では編成の大きなオーケストラを存分に利用し、各楽器に独立したパートを与えた。

● パリの聴衆を喜ばせたシカケ

第3楽章(フィナーレ)の冒頭



ぼくはそれをヴァイオリン2本だけでpで始めました。それも8小節だけです。そのあとすぐにfになります。(期待どおり)聴衆はpのあいだはシーッシーッといっていました、それからすぐにfになりました。fになるのと拍手は同時でした。

1778年7月3日 モーツァルト

交響曲第40番

ト短調 K550

CD
1-3

POINT
1 **古典派交響曲の絶頂を窮める** きわ

◎ **個性輝く記念碑としての交響曲**

交響曲作家モーツァルトは進化し、独自の道をたどっていく。だが、その前方にはひとりの音楽家が巨人のように力づく歩みつけている姿がみえる。ほかならぬ交響曲創作の偉大な先人、ヨーゼフ・ハイドンであった。ハイドンは、数多くの同時代者の先陣を切ってこの種のジャンルを古典派の代表的器楽曲たらしめた、真の功労者であった。

モーツァルトは師と仰いだそのハイドンの影響下にありながらも、自分のユニークな創作活動を展開していく。ウィーン時代に入って、とりわけ1788年の夏のおよそ2カ月間というきわめて短い期間に書き上げたいわゆる〈三大交響曲〉は、師のハイドンをさえ遥かに超えるものであった。

◎ **〈三大交響曲〉作曲の動機と意図**

モーツァルトは6月26日に第1曲の第39番変ホ長調 (K543) を完成し、つづいて〈ト短調交響曲〉第40番 (K550) を7月25日に、最後に《ジュピター交響曲》第41番 (K551) を8月10日に仕上げている。こうした連作はほかの作曲家たちの同様な連作交響曲作曲の先例に促されて、秋にでもコンサートを催して披露したいと考えての計画であったか。それとも楽譜の刊行を視野に入れてのことだったろうか。

ただ生前に初演された可能性は大きいとしても、具体的な記録は残されていない。しかし各曲の調の選び方、形式構造の多様さ (第1曲の序奏、第2曲の短調選択、第3曲フィナーレのフーガ構造など) は、この三部作をそれぞれ異色の個性輝く連作としているのだ。

ヨーゼフ・ハイドンの交響曲とモーツァルトの交響曲

	最初の交響曲	最後の交響曲	代表作
 ハイドン (1732年～1809年)	第1番 二長調 1759年 (27歳)	第104番 二長調《ロンドン》 1795年 (63歳)	第94番 ト長調《驚愕》 1791年 (59歳) 第100番 ト長調《軍隊》 1794年 (62歳) 第101番 二長調《時計》 1794年 (62歳)
 モーツァルト (1756年～1791年)	第1番 変ホ長調 1764年 (8歳)	第41番 ハ長調《ジュピター》 1788年 (32歳)	第31番 二長調《ハリ》 1778年 (22歳) 第35番 二長調《ハーフナー》 1783年 (27歳) 〈三大交響曲〉 1788年 (32歳)

**それぞれに個性輝く
〈三大交響曲〉**

交響曲第39番
変ホ長調

冒頭に
ゆるやかな序奏をもつ
温かさに満ちた作品

交響曲第40番
ト短調

変ホ長調とハ長調に
はさまれて短調をとる、
美と悲しみが
結晶した作品

交響曲第41番
ハ長調

王者の風格をもつ
厳格で華麗な作品

作曲年・地



1788年(32歳)
ウィーンにて

短調交響曲の魔的な響きの世界

◎ 短調交響曲の鮮烈な表現性

モーツァルトの短調作品はどのジャンルでも極端に少ない。交響曲ではわずか2曲が書かれているにすぎない。《小ト短調交響曲》(第25番、K183)は映画『アマデウス』の冒頭でサリエリが自殺を図る場面に使われ、その衝撃的な響きで評判になったのが思いだされる。いずれにしても短調作品の暗い音調は後世の聴き手の魂をも震え^{ふる}上がらせている。

モーツァルトは短調をしばしば死の想念に関係づけて用いている。ニ短調(《ドン・ジョヴァンニ》K527、《レクイエム》K626)、イ短調(ピアノ・ソナタK310、ロンドK511)、そしてト短調ではほかに弦楽五重奏曲(K516)などを残している。彼がその意図を直接言葉で伝えてくれるのは稀だが、状況証拠や間接資料でそれを確認することはできる。

◎ 後世の《ト短調交響曲》の捉え方

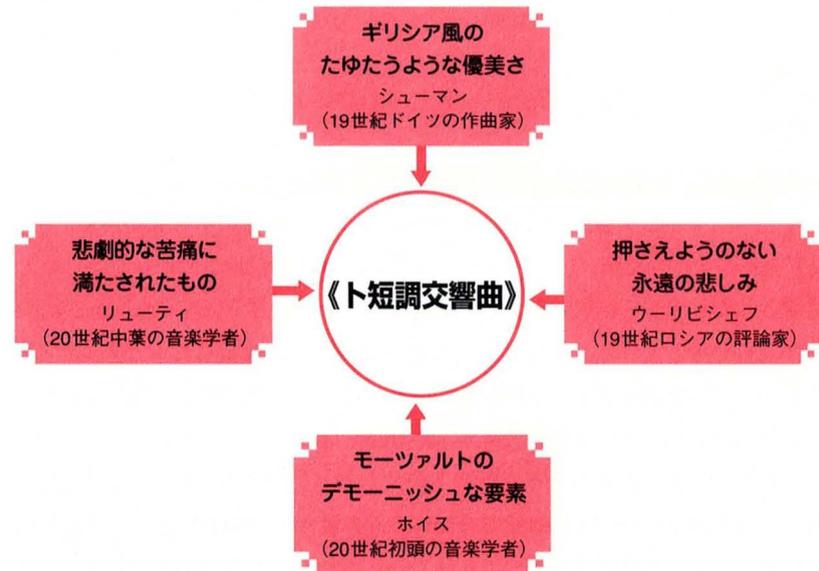
同時代の他の作曲家たちも優れた短調作品を書き残しており、とりわけハイドンにかなりの秀作があるが、なぜモーツァルトの短調作品、なかでも《ト短調交響曲》がこれほどまでに注目されるのか。

モーツァルトの没後、ロマン派の音楽家たちは、自分たちの感情過多の表現世界と引き比べ、この曲にさえく優美さや天真爛漫さを感じた者もいた(シューマンとベルリオーズ)。しかしまた、この短調交響曲は、人間の魂の奥底^{ひそ}に潜む暗い激情や魔的な性格、さらには死を、そして死の思いを表出しているものとさえ受けとめられてきた。

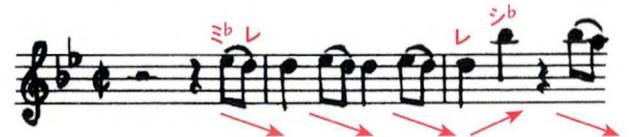
日本の文芸評論家・小林秀雄は若い頃に体験したこの交響曲のフィナーレ冒頭の響きの衝撃を語っている。

フィナーレ…ソナタや交響曲などの複数の楽章をもつ曲の最後の楽章のこと。フーガ構造…ひとつのパートにあらわれたメロディをほかのパートが追いかけるように模倣するような構造。

《ト短調交響曲》への言葉



第1楽章の〈ため息〉音型を聴く



第1楽章のテーマは曲の冒頭でヴァイオリンによって示される。ミ^b-レのため息のような音型の連続のあと、レ-シ^bと7度跳躍し、順次下行する。このロマン的な情感にあふれたテーマは古典派の交響曲としては異例。

交響曲第41番

CD
1-4

ハ長調 K551 《ジュピター》

POINT
1

宇宙の響きを私たちに伝える交響曲

◎ モーツァルト最後の交響曲に〈ジュピター〉の名

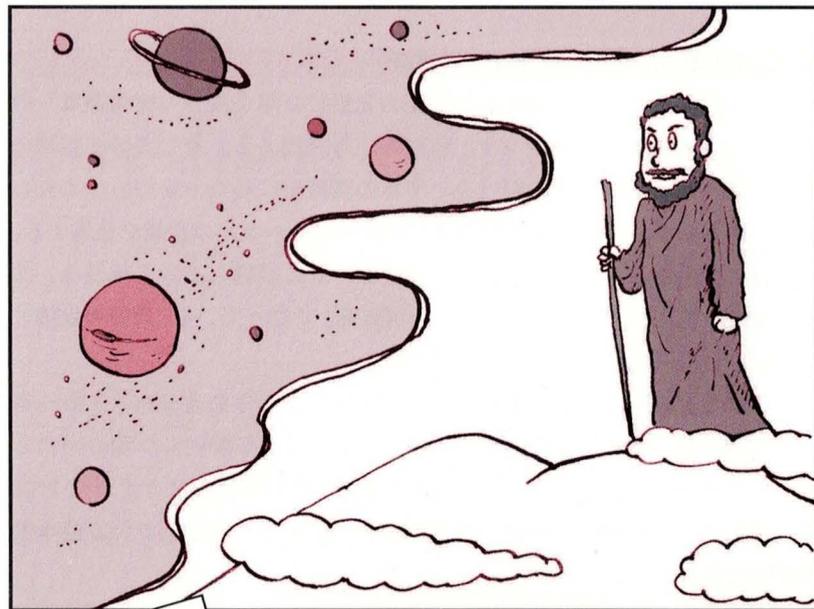
モーツァルトの交響曲にはいくつか標題がつけられている作品がある。《パリ》もそのひとつだが、《リンツ》や《プラハ》は曲が作曲されたか、はじめて演奏されたと考えられているまちの名前である。近年《ランバッハ》なる初期の作品も登場している。ほかには注文された人物の名を冠した《ハーフナー》もある。そんなニックネームのなかでひとつだけまったくちがった由来をもった交響曲がある。それが交響曲第41番ハ長調（K551）、すなわち《ジュピター交響曲》である。どれもモーツァルトが世を去ってからつけられたものだが、地名や人名がなにか散文的な感じなのに、この最後の交響曲だけは、ギリシア神話最高神ゼウスの英語名がつけられている。それには理由があるのだ。

◎ 「名は体を表す」天界の支配者ジュピターの音楽

この交響曲は作曲者の死後、19世紀のかなり早い時期から高い評価的となった。モーツァルトの末子フランツ・クサーヴァーが「器楽の最高の勝利」と父親の最後の交響曲を讃え、妻コンスタンツェの再婚相手で分厚い『モーツァルト伝』の著者ニッセンも「すべてが天上的な諧音であり、その響きは偉大で壮麗な業のように心に語りかけ、心に靈感を吹きこむ」とこの曲の印象を語っている。

こうした捉え方は、それ以前の1810年代にすでに、ドーヴァー海峡を隔てたイギリスでヨハン・ペーター・ザーロモンなる音楽家によってなされたことでもあった。彼はこの「崇高無比」な交響曲の傑作に、《ジュピター》という呼び名を与えたのである。それはこの交響曲がもはや人知の及ばぬ天空の智慧の産物であり、そればかりか天空の調和そのものと感じられたからであろう。

天上神ジュピターの音楽



交響曲第41番について

結尾にフーガをともなった彼のハ長調の大交響曲は、まさにすべての交響曲の筆頭におかれるべきものである。この種のいかなる作品にも、天才の神的なひらめきが、これほどまでに明るく、また美しく輝いていることはない。——すべては崇高無比の芸術であり、その力の前には精神は屈服し、驚異を感じる。

作曲年・地



1788年(32歳)
ウィーンにて

コンスタンツェの再婚相手ニッセンは、モーツァルトを敬愛してやまず、彼の芸術をこよなく愛していた。ニッセンは自分の特別な立場を活かして、モーツァルトの生涯と芸術についての1000ページ近くわたる分厚い伝記をまとめ上げた。

POINT
2

驚くべき緻密な構成と神的な調和が全楽章に鳴り響く

◎ 終楽章冒頭《ジュピター音形》の奇蹟

第1楽章の壮麗にして堂々たる宇宙の光景には第2楽章（緩徐楽章）の悠揚迫らぬ天体の運行がつづき、私たちの耳を捉える。そして第3楽章の天空の星々による舞踏が類例のない宇宙の舞踏会に私たちを招いてくれたあと、第4楽章フィナーレであの〈ド・レ・ファ・ミ〉の音形が登場する。この音型が絶妙なフーガ、星辰の世界のフーガに展開していく光景は、まさに古代の哲人、とりわけプラトンが『国家論』で語っている〈天体の音楽〉、〈宇宙の調和〉さながらのものであろう。

それはただ単なる比喩ではなく、かつてドイツの作曲家ヨハン・ネーポムク・ダーフィットが音楽理論学、楽曲分析論の手法を駆使して明らかにしたものであった。この〈ド・レ・ファ・ミ〉に始められるオクターヴ全12音の音列は、ただ単にこの終楽章ばかりか、全楽章を支配している根本原理なのである。

◎ 古典派交響曲の最高傑作として

こうしてモーツァルトは交響曲作曲家としての進化を、この《ジュピター交響曲》で完結させる。モーツァルトが1788年夏のさなかに、その発展をこの八長調の作品をもって終えたことはまこと象徴的である。彼は現存する最初の交響曲、8歳のときに書かれた幼いがすでに決して稚拙ではない作品のなかで用いた〈ジュピター音形〉で、32歳の円熟しきった名曲《ジュピター交響曲》を締めくくり、二度とふたたび交響曲作家としての活動に戻ることはなかった。世を去るまでなおオペラ、教会作品、歌曲、そして協奏曲、室内楽、独奏曲などで傑作の数々を書きつづけるが、その3年有余の時間を残して。

緩徐楽章…第1、4楽章にくらべて、ゆっくりとしたテンポの楽章。天体の音楽…プラトンは、宇宙の構造や天体の運行を基礎づけるものを、一種の「音楽」とみなした。

天空の調和と法則に支配された4つの楽章

第1楽章

アレグロ・ヴィヴァーチェ
(活発に速く)

第1楽章は、堂々とした全管弦楽の総奏で、八長調の主音（ド）を3度力づよく打ち鳴らして開始。あいまいなものが一切排除されたその響きは、まるでゼウスの世界を象徴するかのよう。



第2楽章

アンダンテ・カンタービレ
(ほどよくゆっくりと、歌うように)

ヴァイオリンによって奏でられる美しいメロディは、典雅で繊細。音によって天体の運動を示すかのように、緩やかに流れていく。

第3楽章

メヌエット、アレグレット
(快活にやや速く)

第1楽章に対比するような、下降する音型で始まる。途中、第4楽章の核となる〈ジュピター音型〉が登場する。

第4楽章

モルト・アレグロ (きわめて速く、快活に)

第1主題



ヴァイオリンがド・レ・ファ・ミの〈ジュピター音型〉を静かに奏して曲が始まる。この冒頭のメロディが第1主題。この主題が第4楽章全体を統一するテーマとなり、途中何度もあらわれる。最後の部分でこのテーマが追いかけてこするように（フーガ）重なり合い、響き合って展開するところはとくに圧巻。

楽しみの響きから魂や宇宙の響きへ

交響曲とは？

交響曲すなわち英語の〈シンフォニー〉は、「音が一体となって響き合う」といった意味のギリシア語から由来する。これが18世紀後半の古典派時代にオーケストラで奏されるオペラ序曲(シンフォニア〔伊〕)の名称にも使われたあと、急-緩-急のテンポの3楽章ないしメヌエット楽章を含む4楽章の楽曲を指す用語となった。

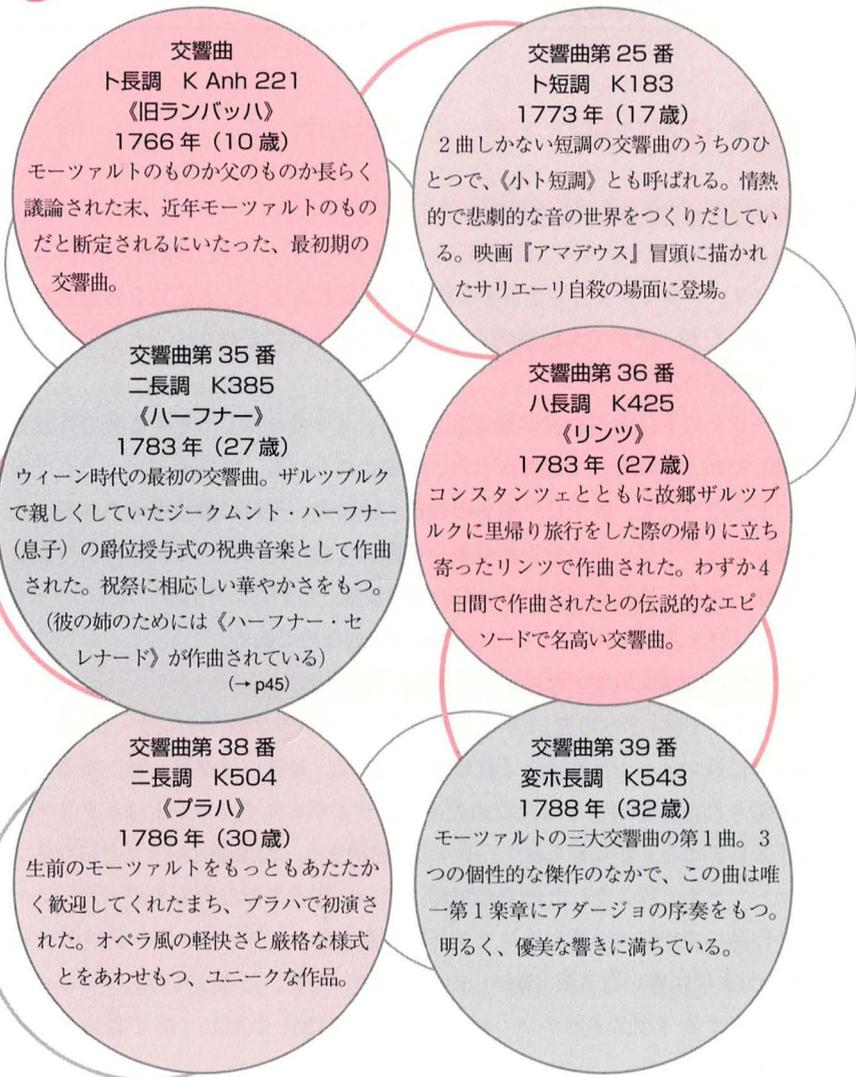
楽器編成も当初は基本的には弦5部(通奏低音楽器としてチェンバロやフォルテピアノを含む)にオーボエとホルン各2本の管楽器を加えたかたちであったが、ほかの管楽器やティンパニが加えられ、次第に大規模な編成となった。ソナタ楽章を中心とする交響曲は、こうして器楽の王者となる。そして王侯貴族を楽しませることを目的としたものから、市民たちがコンサート会場で聴けるようになりひろく普及していく。

モーツァルトの交響曲は？

モーツァルトのおよそ50曲にのぼる交響曲は、こうした古典派交響曲の進化、発展の歴史を端的にたどっている、まさに奇蹟的な実例である。
(→ p202)

第1番など最初の数曲はまだ骨格も定まらぬ発育中の交響曲だったが、その後、ウィーン風の4楽章制の曲や、イタリア風のシンフォニアの作品がつづく。10代後半の作品は早くもウィーン楽派の精鋭たちの作品を凌駕し、そして《パリ交響曲》では公開コンサートで聴衆を魅了する。さらに故郷でいっそう成熟した響きをひびかせ、ウィーン時代に入ると、古典派交響曲の円熟のさわみ、〈性格表現〉のもっとも重要な器としての交響曲の表現様式を成就する。そしてそれを突き抜けて、〈三大交響曲〉の境域、人間の魂や自然や宇宙の響きの実現にまで至るのだ。それは19世紀の交響曲発展史の雄ベートーヴェンの9曲の交響曲に先立って、その創作活動の刺激となり、模範となるものでもあった。

もっと知りたい！ モーツァルトの交響曲



セレナード 二長調

CD
1-5

K320 《ポストホルン》

POINT

1

音楽は喜びと楽しみの贈り物

◎ セレナードのまちザルツブルク

18世紀のザルツブルク。この美しい小さなカトリック教会国家の首都には、ゴシック、バロックなどさまざまな様式の教会が林立し、宗教的な雰囲気が充満していたが、それでも世俗的な楽しみにも事欠くことはなかった。音楽もまたそうだった。

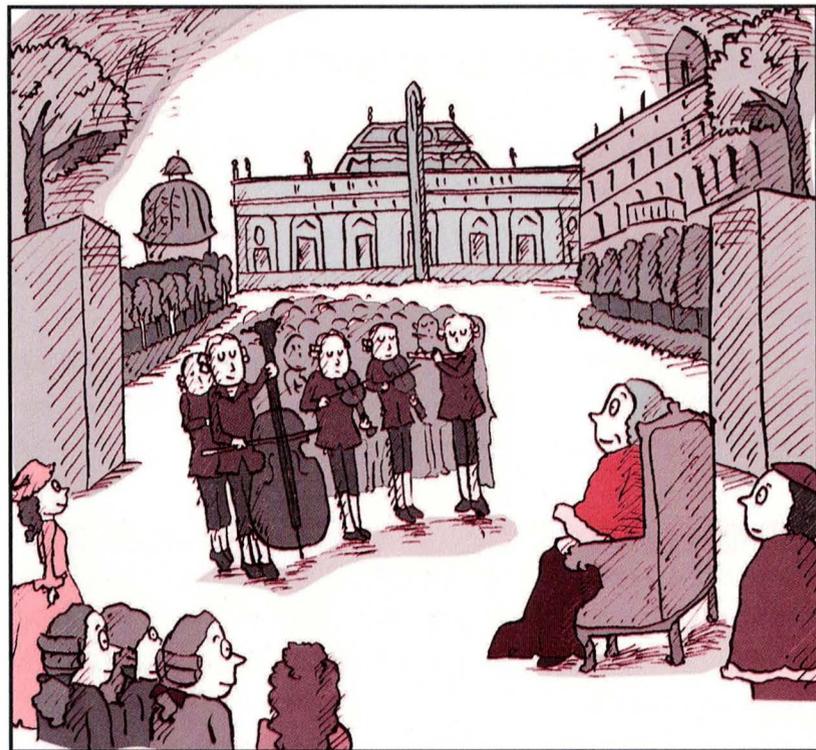
モーツァルトは大司教宮廷音楽家として、ミサ曲をはじめとする教会作品を供給したが、それだけではなかった。主君のほかにも、貴族や市民、そして親しい友人たちにも、誕生日や**霊名の祝日**、結婚式、それに爵位授与のお祝いなど機会あるごとにいろいろな器楽曲を作曲してあげたのだ。またそうした機会のほか、食事、宴会用にもいくつもの曲を調達している。それが〈セレナード〉や〈ディヴェルティメント〉といった種類の曲なのである。

◎ 〈セレナード〉、〈ディヴェルティメント〉とは？

セレナードは「夕べの曲」という意味をもつ。イタリア語でセレナータといい、同義語に近いノットゥルノは「夜の曲」の意だ。お祝いは夕暮、宵、あるいは夜に催されることが多かったためだろう。ディヴェルティメントはイタリア語の「ディヴェルティモーレ楽しませる」からきており、そうした目的をもった楽曲ということになる。

モーツァルトはこうした音楽の供給に大いに意欲を示したものだ。この種の作品のなかにカッサシオンなる名称の曲もある。モーツァルトがわずか13歳の1769年に書いた3曲（K63、K99、K100）だが、このうちのふたつは、ここで紹介する《ポストホルン・セレナード》（K320）と同じフィナーレ・ムジーク〈終了音楽〉として作曲されている。

〈終了音楽〉とは？



当時ベネディクト派大学（現ザルツブルク大学）では、毎年8月になると、教養課程を終えた学生たちのために修了式がおこなわれ、大司教や教授たちへの敬意をあらわすために音楽が演奏された。これが〈終了音楽〉と呼ばれるもので、論理学（哲学）科と物理学科のふたつの科があったため、毎年2曲必要だった。モーツァルトはまちを代表する作曲家のひとりとして、1769年（13歳）の夏以降、旅行などの特別な事情をのぞいてほぼ毎年この式のための音楽をつくっていた。

作曲年・地



POINT
2

異色のセレナード 《ポストホルン》

◎ 《終了音楽》としてのセレナード

モーツァルトがザルツブルクで最後に書いたオーケストラ用のセレナードは、1779年8月3日という日付をもつセレナード 二長調、通称《ポストホルン》である。フルート、オーボエ、ファゴット、ホルン、トランペット各2本にティンパニ、そして第2メヌエットの第2トリオにはポストホルン1本。当時のオーケストラとしてはフル編成のうえに、合計7楽章という典型的なセレナードの楽章数を持ち、前後にはふたつの行進曲二長調（K335）がつけられている。

この作品は近年の研究によって、彼が23歳の頃に試みた大学生の学期末終了記念の音楽（フィナーレ・ムジーク「終了音楽」）だとされた。学生たちは教養課程を終えて、秋から専門課程に進学する前に、8月におこなわれる修了式でこのセレナードを聴くのであった。

◎ 野外のセレナード演奏

《終了音楽》はまず離宮ミラベル宮の庭園で、大司教臨席のもとに演奏される。そのあと楽員たちは歩きながら行進曲を演奏し、ザルツァハ河の対岸、現旧市街にあるベネディクト派大学（現ザルツブルク大学）に赴き、そこでふたたび教授陣の前で演奏する。

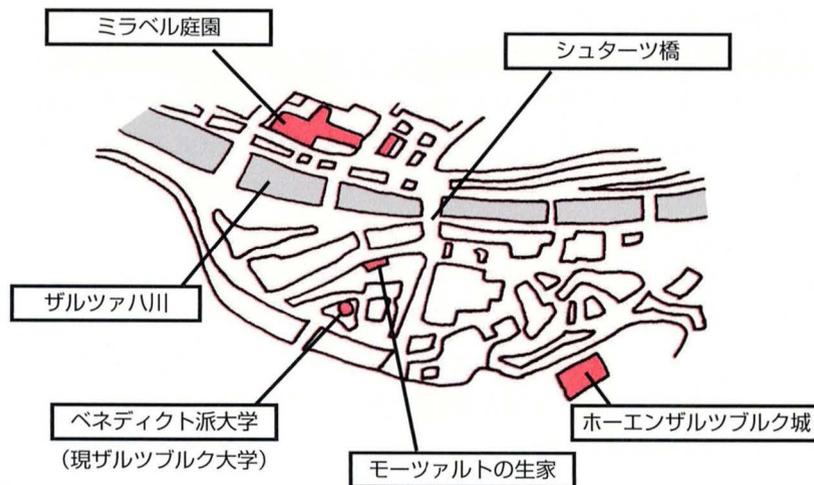
モーツァルトはこの曲で、彼がマンハイムやパリで経験し、獲得したみごとなオーケストラの表現法を披露する。第1楽章も、ふたつのメヌエット楽章も、短調の愁いを含んだ緩徐楽章も、堂々たる終楽章も、旅行以前の彼のセレナードの響きや楽曲の内包をはるかに超える。ポストホルンの響きは、学生たちの夏の休暇への旅立ちを励ますものというより、まさにモーツァルト自身の、ザルツブルクからの来るべき逃走、脱出のファンファーレであろう。

霊名の祝日…洗礼名の祝日。当時は誕生日よりもこの霊名の祝日が大事にされていた。ポストホルン…当時駅馬車や郵便馬車の出発や到着などを知らせるために使われていたラッパ。

《ポストホルン》の楽章構成



《終了音楽》の演奏地図



セレナード ハ短調

CD
1-6

K388 《ナハトムジーク》

POINT
1 セレナードを超えた《ハ短調セレナード》

◎ サリエーリの驚愕

映画『アマデウス』の冒頭近く。宮廷音楽家のサリエーリは、小男の青年がさる館の夜会で魅力的な娘に下品な字謎を使って求婚している現場を盗み見る。青年は別室で自作の演奏が始まったのに気づいて駆けつける。あとを追ったサリエーリは、その曲のアダージョ楽章を聴いて愕然とする。それは神が口移しをしたかのような超絶の美を湛えた音楽だったのだ。あんな下卑た男に神は自分が心底欲していた才能を与えたと知って、サリエーリは神への復讐を決意する。

曲はモーツァルトのセレナード変ロ長調 (K361) 通称《グラン・パルティータ》だった。人を喜ばせるための軽い音楽のはずのセレナードが、サリエーリに魂の深淵を垣間見せたのだ。

◎ ウィーンのまちでセレナードを

映画のこのシーンは純粋なフィクションだが、モーツァルトのウィーン時代のセレナードについて思いをめぐらせるきっかけを与えてくれる。モーツァルトは1781年春にウィーンに留る決意をする。ウィーンには管楽器の名手たちが集っていた。モーツァルトの楽才を高く評価していた皇帝ヨーゼフ2世も、管楽奏者を集めて〈ハルモニウムジーク〉という合奏団を組織したのだ。

モーツァルトもいくつかの管楽合奏用のセレナードを手がけている。《グラン・パルティータ》もそのひとつだが、さらに異色な曲が目につく。この《ハ短調セレナード》(K388)だ。短調のセレナードは19世紀ロマン派の時代ならいざ知らず、古典派時代にはめったにない。セレナード類はおめでたい催しや陽気で心弾む機会、またはおいしい食事を楽しむためのものだったからだ。

管楽器のセレナード



〈ハルモニウムジーク〉

1782年4月、皇帝ヨーゼフ2世が宮廷に管楽八重奏団を創設したことをきっかけに、ウィーンでは管楽合奏が急速に普及した。貴族たちはばかりでなく旅館やレストランでもこのアンサンブルをかかえるようになり、室内でも屋外でも機会あるごとに演奏され、楽しまれていた。多くの作曲家が管楽合奏用の曲をつくったが、モーツァルトもこの頃3曲の管楽セレナードを作曲している。



セレナード ト長調

CD
1-7

K525 《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》

POINT
1

最も有名なモーツァルトの名曲

◎ 名曲中の名曲《アイネ・クライネ》

日本でも世界中でも一番よく知られているモーツァルトの名曲は、おそらくセレナードト長調（K525）だろう。日本では《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》とドイツ語で呼ばれ、ときには《アイネ・クライネ》だけでも通ってしまう。今はモーツァルトの作品もかなり多くのものがポピュラリティを獲得しているが、古い世代のひとたちには、この《アイネ・クライネ》が決まってモーツァルト初体験の曲なのだ。

西洋でも同じだったのだろうか。映画『アマデウス』の冒頭近くのシーンを思いだしてみよう。自殺未遂に終わったサリエリが病院で療養中、若い神父が告解を聞きに訪ねてくる。サリエリは《アイネ・クライネ》をピアノで弾いて聴かせる。神父は言う。「知らなかった、あなたの曲だとは」

◎ 《アイネ・クライネ》は19世紀には名曲ではなかった

このシーンもまたフィクションだ。サリエリは1825年に世を去ったが、このシーンはその2年前の1823年の出来事だった。その頃、サリエリの往年の名作オペラは忘れられてしまっていたが、一方モーツァルトのこの《アイネ・クライネ》の第1楽章冒頭の有名なメロディが知られていた訳でもない。この曲の楽譜が出版されたのはサリエリの死後、1827年頃だったからである。

しかし出版によってこの曲が知れわたった訳でもない。演奏され始めたのは『旧全集』版でこの曲が刊行された1883年、つまり19世紀後半になってから（→p202）であろう。実際には20世紀に入ってやっと室内楽や弦楽オーケストラのレパートリーとして取り上げられ始め、ようやく一般のひとたちの関心の的となった。

ポピュラー度ナンバー1の名曲《アイネ・クライネ》



《アイネ・クライネ》はテレビやCMなどでも多数使われ、演奏会でもよく取り上げられる。とくに冒頭のソ・レソ・レソレソシレ～のメロディはお馴染み。映画『アマデウス』でサリエリが自分のアリアを知らないという神父に弾いて聴かせたのも、このメロディだった。

第1楽章冒頭

CD
1-7



作曲年・地



POINT 2 さよ **《小夜曲》——この名曲の謎を解く**

◎《アイネ・クライネ》の謎

この曲にはいくつもの謎が含まれている。モーツァルトはこのセレナードに1787年8月10日という日付をつけている。ザルツブルクで父親レーオポルトが亡くなったのはこの年の5月末だったが、その前後に《ト短調弦楽五重奏曲》(K516)や印象的な歌曲をいくつか書き、さらに6月14日の日付でとてつもなく滑稽な《音楽の冗談》(K522)のようなハチャメチャな曲を書いたあとの真夏の一日に、この《アイネ・クライネ》がくる。しかし、何のためにつくられたのかはわかっていない。

また彼の『全自作品目録』をみると、この曲にはふたつのメヌエットがあるが、自筆譜にはそのひとつがとり除かれた跡がある。4楽章としたのはモーツァルト自身なのだろうか。彼自身がそうすることで、古典派の典型的なソナタ楽曲としたかったのだろうか。さらに、この曲が室内楽として着想されたものか、弦楽オーケストラのためのものかも定かではない。

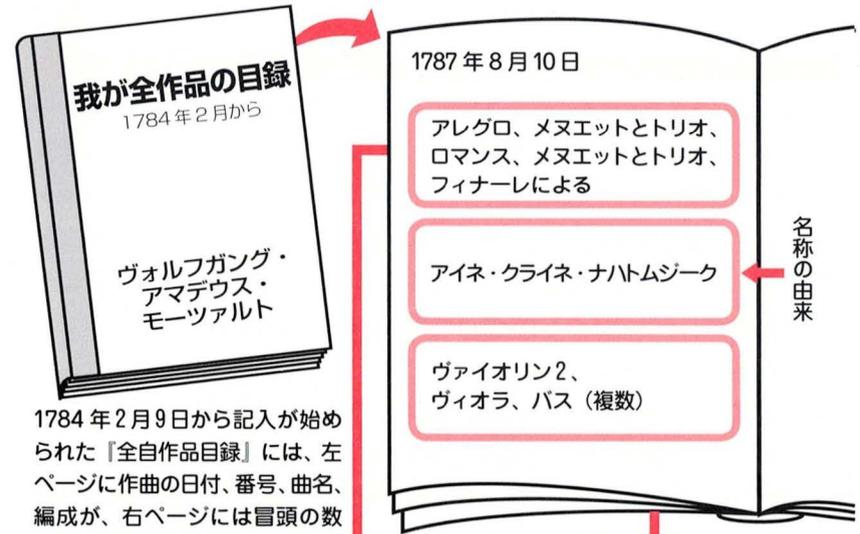
◎究極のセレナードはここでもセレナードを超える

《アイネ・クライネ》はアレグロ—アンダンテのロマンス—メヌエットとトリオ—アレグロのロンドという4楽章で構成され、弦楽だけの編成をもち、凝縮したミニアチュア(小型)の室内楽曲をかたちづいている。《ト短調弦楽五重奏曲》や《ドン・ジョヴァンニ》(K527)の年に書かれたこの曲は、形式は完全無欠で響きは円熟のきわみに達し、まったくの隙もみせない。

それはモーツァルト自身が標題をドイツ語で書き記しているように《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》(小さな夜曲)ではあるが、すでにセレナードを超えた音楽としかいいようがないユニークな作品なのである。

弦楽オーケストラ…弦楽器のみの合奏のこと。

『全自作品目録』より



1784年2月9日から記入が始められた『全自作品目録』には、左ページに作曲の日付、番号、曲名、編成が、右ページには冒頭の数小節の譜表が書きこまれている。

自筆譜からとり除かれている

- アレグロ → 第1楽章
- メヌエットとトリオ →
- ロマンス → 第2楽章
- メヌエットとトリオ → 第3楽章
- フィナーレ → 第4楽章

モーツァルトのセレナードには通常ふたつ以上のメヌエットが含まれているが、このセレナードはメヌエットがひとつで4楽章制をとる、異色のセレナードとなった。

自筆譜に書かれた編成

ヴァイオリン2、ヴィオラ、ヴィOLONチェロ(単数)、コントラバス(単数)

この曲の編成は『全自作品目録』と自筆譜とは違っており、確定されていない。このため演奏会やCDの録音では、さまざまな編成が試みられている。

祝宴の響き——セレナードの世界

セレナードとは？

モーツァルトのまちザルツブルクでは、彼が生まれ育ち、活躍した頃、セレナードやディヴェルティメント、カッサシオンといった、軽やかで聴きやすい音楽がたくさん書かれ、演奏され、聴かれ、いわば消費されていた。モーツァルトもそのような音楽の需要に応え、多くの曲を供給した。かつては社交音楽とか娯楽音楽、あるいは機会音楽と呼ばれていたジャンルのあらましについてはすでに触れたが、それではモーツァルトの時代には、この種の音楽はどのように捉えられていたのだろうか。

この時代は、一般的に言えば啓蒙主義の時代であり、すべては言葉で語り、論ぜられるという観点から、辞典なる出版物が多く出版された。そのひとつによればセレナード類は「多くは特定の性格をもたず、単なる音画であり、さまざまな特定の感情の表現よりは、むしろ耳を楽しませることが要求される」(ハインリヒ・クリストフ・コッホ著『音楽辞典』1802年)という。

セレナードと交響曲の違いは？

一方、交響曲はそれぞれの作品やその個々の楽章が、^{キャラクター}「性格」をもつものであるという。性格とは「ある事柄における固有なもの、あるいは特質をあらわすもので、それによって、その事柄が同種のほかのものと区別されるもの」(ヨハン・ゲオルク・ズルツァー著『芸術の一般理論』1771～74年)なのだ。

モーツァルトは交響曲でこの「性格表現」を実現する道をたどったばかりではない。セレナード類の作品のなかでも、とくにここで紹介した3曲で、セレナードというジャンルは、交響曲や室内楽曲の境域へと越境を果したのだった。

ただし、モーツァルトのザルツブルク時代、またウィーン時代に入ってから、のセレナード、ディヴェルティメントの作品たちの心地よい明るさ、楽しさ、祝宴、祝祭性もけっして忘れ去られてよいものではない。

もっと知りたい！ モーツァルトのセレナード

セレナード
二長調 K250
《ハーフナー・セレナード》
1776年(20歳)

モーツァルトのセレナードのなかでもっとも大きな規模をもつ。ザルツブルク市長のハーフナー家とモーツァルト家は親しくつき合っていたが、この曲は彼の娘マリー・エリーザベトの婚礼の前夜祭に演奏する音楽として作曲された。

ディヴェルティメント
二長調 K251
1776年(20歳)

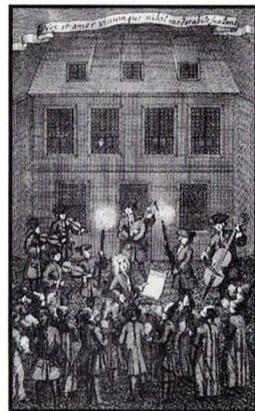
《ハーフナー・セレナード》の数日後に完成された作品。姉ナンネルへの霊名の祝日のお祝として作曲され、前日の7月25日の晩に演奏された。若々しく元気な、音楽のプレゼント。

ディヴェルティメント
二長調 K334
《ロービニヒ》
1779年(23歳)

モーツァルトのディヴェルティメント最後の大作。マンハイム・パリ旅行から帰郷してのちに書かれたこの曲には、優美で洗練された音の世界がある。

セレナード
変口長調 K361
《グラン・バルティータ》
1784年(28歳)

管楽器のセレナードの代表的な作品。〈ハルモニウムジーク〉の基本編成(オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴット各2本ずつ)にバセットホルンとホルン各2本、そしてコントラバスを加えた、13人によるアンサンブル。



セレナードを楽しむ人びと

ディヴェルティメント
へ長調 K522
《音楽の冗談》
1787年(31歳)

モーツァルト自身によってこの名がつけられた。4楽章からなり、そのどの楽章にもわざと音楽的な間違いや稚拙な表現がなされている。これは素人作曲家や下手糞な演奏家をみごとにあらわしたものだ。モーツァルトの辛口でゆかいな音楽の冗談。

ヴァイオリン協奏曲第5番

CD
1-8

イ長調 K219 《トルコ風》

POINT 1 舞台上に脚光を浴びて主役登場

◎ モーツァルトの最初の協奏曲はヴァイオリン協奏曲

父親レーオポルトの指導で、モーツァルトは幼いときからさまざまな楽曲をつくってきた。それらは、はじめはやさしく、しだいに編成や楽章構成の複雑なものになっていった。独奏曲から重奏のソナタ、そして交響曲、さらに弦楽四重奏曲といった具合だった。そのモーツァルトが書いた最初の協奏曲（コンチェルト）は、ヴァイオリンのための協奏曲だった。

従来、1775年、つまり彼が19歳のときに書いたと考えられていたヴァイオリン協奏曲第1番変ロ長調（K207）は、近年では2年前の1773年、彼が17歳のときのものとされるにいたった。モーツァルトはこの年のはじめ、1月中旬に、第3回イタリア旅行の最後にミラノで教会用モテット《踊れ、喜べ、汝幸いなる魂よ》（K165）を書いているが、これはカストラート（男性ソプラノ歌手）が独唱、しかも技巧的な歌をオーケストラの伴奏でくりひろげる声楽協奏曲だった。そのミラノの声楽協奏曲の披露のあと、帰国したモーツァルトの手から、4月に生みだされたのが第1番のヴァイオリン協奏曲だったのだ。

◎ 10歳代の協奏曲作家モーツァルト

モーツァルトは前の年の8月には新しい大司教コロレドから有給のコンツェルトマイスターに任じられていた。3度目のイタリア旅行から帰ってきて、17歳の若い楽団指揮者としての彼が、みずからヴァイオリン独奏で、作曲家としてのはじめての協奏曲を弾いたのは、彼にとっても印象的なできごとだった。そしてなんとその2年後には、古典派ヴァイオリン協奏曲の傑作《イ長調協奏曲》（ヴァイオリン協奏曲第5番、K219）が生みだされるのだ。

17歳ではじめての協奏曲、19歳で傑作協奏曲を作曲

モーツァルトの5つのヴァイオリン協奏曲

- 第1番** 1773年4月14日（17歳）
オーストリアとイタリアの伝統を踏まえた、因習的なスタイルで作曲。
- 第2番** 1775年6月14日（19歳）
内面の深さよりも表面的な美しさを特徴とするスタイル（フランスのギャラント様式）で作曲。
- 第3番** 1775年9月12日（19歳）
管楽器を効果的に活用し、音響や音色を充実させて独自のスタイルをうちだしている。
- 第4番** 1775年10月（19歳）
第1楽章の冒頭の軍隊風のリズムをもつ印象的な主題が楽章を通して一度ぎりしかあらわれないなど、構成に工夫をこらしている。
- 第5番** 1775年12月20日（19歳）
全体にこれまでのフランス的な曲想に力づよさを加えた堂々とした作品となっており、第3楽章にトルコ風のリズムを登場させるなど新鮮な変化も与えられている。

第1番から約2年ぶりに作曲した第2番のヴァイオリン協奏曲はまだ因習的なスタイルから完全に抜け切れていないが、その3カ月後に作曲された第3番は飛躍的な進歩を遂げている。さらに3カ月後に作曲された第5番は彼のヴァイオリン協奏曲の最高傑作として、また青年モーツァルトを代表する作品のひとつとして現在も広く愛される作品となった。



POINT
2

傑作ヴァイオリン協奏曲の年

◎ 早くも古典派ヴァイオリン協奏曲の最高の作品を

1775年はモーツァルトの〈ヴァイオリン協奏曲の年〉であった。とりわけ第3番ト長調 (K216)、第4番ニ長調 (K218)、そして最後の第5番イ長調 (K219)の3曲は、当時、各地で数多く試みられたこのジャンルのなかでも際立って傑出したものと評価され、今日までヴァイオリン奏者たちが必ず学ばなければならない教材としても、また世界中のコンクールの課題曲としても、珍重されている。

第3番の第1楽章が同年の1775年の4月末に作曲されたオペラ《牧人の王》(K208)の第3曲、アミンタのアリアのオーケストラの冒頭旋律を使っているのが注目されるし、第4番第1楽章の軍隊風の開始も堂々たる趣き^{おもむ}があって素晴らしい。なかでも第5番はとりわけ抜きん出ている。

◎ 魅力的な工夫が全楽章に溢れ

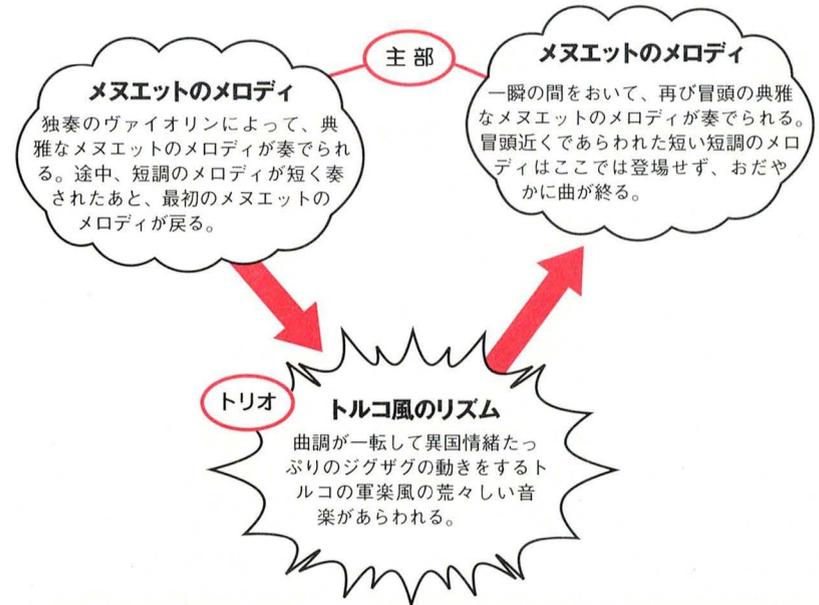
まず第1楽章の冒頭の堂々たるオーケストラの総奏による提示のあと、テンポをアダージョに落して、ヴァイオリンのソロが高音で朗々と歌い、^{きつそう} 颯爽としたアレグロのソロ主題が登場する。アダージョでシャープ記号4つ(ホ長調)のこまやかな動きを特徴とする緩徐楽章(第2楽章)のあと、〈ロンドー、テンポ・ディ・メヌエット(メヌエットのテンポで)〉がつづく。この終楽章は主部とトリオといえる短調部分が対照的で、多彩な楽章をかたちづくる。その部分はアレグロで同じ主音をもつ短調のイ短調をとり、総奏が独特の〈トルコ風〉(ジブシー風)のリズムで、大きな跳躍のスタッカート音形と半音階的進行の動きをもってまこと鮮やかな対比をもたらしている。その部分がまたメヌエット主部とも不思議な調和をみせ、1775年の〈ヴァイオリン協奏曲の年〉を締めくくる。

ロンドー…楽曲の種類のひとつ。くり返される主題のあいだにエピソードを挟む曲。トリオ…ここではメヌエットの中間部分のこと。半音階的進行…ド・ド#・レ・レ#・ミのような半音での進行。

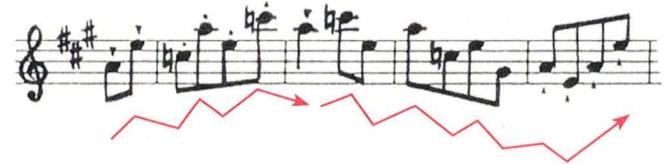
〈トルコ風〉ヴァイオリン協奏曲の聴きどころ

CD
1-8

第3楽章 〈ロンドー、テンポ・ディ・メヌエット〉



トルコ風リズムのジグザグ音型



第3楽章の形式は、古いメヌエットのかたちをとっており、第3番、第4番のような構成上の多様さはない。けれども中間部のトルコ風音楽への変化はみごとで、曲全体からの印象は強烈。早くも作曲の手法が円熟しつつあるのがわかる。

フルートとハープのための協奏曲

CD
1-9

ハ長調 K299

POINT
1
トリビュート
アマチュア音楽家への贈り物

◎ 協奏曲は誰のためのものか？

モーツァルトが協奏曲を自分が演奏するために書き始めたことは興味深い。オペラにおけるアリアと同様、器楽の世界でも、当時の作曲家たちは特定の弾き手や吹き手のために書くのが当り前のことだったが、ヴァイオリンのためには、モーツァルトはまず自分を目当てとしていたのだ。父親のレーオポルトも、息子がかかなりのヴァイオリンの弾き手であったことを手紙でその息子宛に書いている。

だがモーツァルトはふつう自分が弾かない、吹かない楽器についても、いくつもの協奏曲を残している。たとえばオーボエ、クラリネット、ホルンといった楽器については、特定の奏者フリードリヒ・ラム、アントーン・シュタードラー、ヨーゼフ・ロイトゲーブといった名手のために書いたものであった。

◎ 音楽愛好家のためにも

しかしたとえば、フルートやハープなどについては、モーツァルトはたまたま知り合った素人愛好家のために協奏曲の注文に応じて作曲している。素人といっても、当時の貴族や市民たちには^{くろうとはだし}玄人跣の音楽家が数多かったのである。マンハイムで彼が出会ったフェルディナン（ト）・ド・ジャンは医師だったがフルートの名手だったし、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世はチェロの弾き手だった。映画『アマデウス』に登場する音痴のヨーゼフ2世は虚像であって、ピアノの名手だったという。
(→ p156)

モーツァルトはそうした愛好家のために曲を提供し、そして多額の報酬を得ていたのだ。《フルートとハープのための協奏曲》はその典型的な例といえる。

協奏曲の主役はさまざま

オーボエ
ラム
《協奏交響曲》のオーボエは彼のために書かれた。

ヴァイオリン
モーツァルト自身
(もしくはザルツブルク宮廷楽団のヴァイオリン奏者のため)

ピアノ
モーツァルト自身
(もしくは姉ナンネル、弟子たちのため)
ピアノ協奏曲はウィーン時代には自作自演の演奏会をおこなうために重要なものだった。

クラリネット
シュタードラー
協奏曲としては異色の深い内容を湛えた《クラリネット協奏曲》は、彼のために書かれた。

ホルン
ロイトゲーブ
モーツァルトの気のおけない友人のホルン奏者で、《ホルン協奏曲》は彼のために書かれた。

フルートとハープ
ド・ギーヌ父娘
《フルートとハープのための協奏曲》はこの父娘のために作曲された。アマチュア演奏家のために作曲した代表作。

オーケストラ

管楽器のための協奏曲は、作曲の依頼があった作品か、親しい友人や特定の演奏家のために作曲されたもので、作曲時期や作品の内容はさまざま。アマチュア音楽家の依頼によって書かれた《フルートとハープのための協奏曲》は、演奏者の技量にあわせて親しみやすい作品となっている。楽譜は消失してしまったが、曲の最後のカデンツァ（本来は独奏者が即興で技巧を披露するために挿入される）を、モーツァルト自身がこの父娘のために書いた。

作曲年・地

1778年(22歳)パリにて

POINT
2

パリのサロン音楽

◎ マンハイム・パリ旅行が生んだ名曲コンチェルト

マンハイム・パリ旅行はモーツァルトの新しい就職口探しの旅であった。だが、彼にふさわしいポストはどこにもなかった。マンハイムでも、わずかにアマチュアのフルート吹きのための曲の依頼が舞いこんだにすぎなかった。次の滞在地パリでは交響曲を作曲、公開演奏会で発表し喝采を得たが、管のための《協奏交響曲》(サンフォニー・コンセルタント)は没にされる不運であった。

そんな不運の彼に協奏曲を作曲するチャンスが訪れた。独奏楽器はフルートとハーブだった。注文主はモーツァルトが令嬢のレッスンに通っていた伯爵(のちに公爵)のアドリアン＝ルイ・ボニエール・ド・スアストル・ド・ギースで、彼はフルートが趣味の外交官だった。令嬢はハーブを巧みに弾いたため、この組合せで偶然に作曲された、きわめて珍しい編成の協奏曲となった。

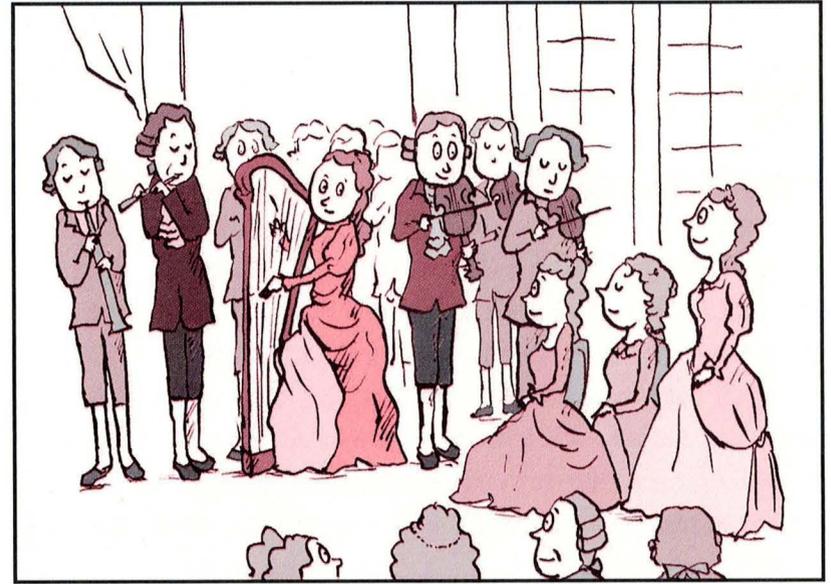
◎ 優美な響きはサロンの響き

このフルートとハーブの協奏曲は、ハ長調という一番基礎的な調をとって、軽やかに晴れやかに鳴り響き、職業音楽家の巨匠的な技巧の披露からはなはだ遠い世界の優美な響きに満ちあふれている。とりわけハーブは当時貴族たちの城館でしばしば催される夜会でのコンサートで、貴族の夫人や令嬢たちが小曲を客人に弾いて聴かせたものだった。

モーツァルトのこの協奏曲はその令嬢のハーブに、当時のまだいささか純朴な響きのフルート(いわゆるトラヴェルソ)を父親が加え、貴族の城館の大広間で、小編成のオケによって紹介されたのだったろう。アマチュア音楽家の、贅沢なサロンの楽しみの音楽が、モーツァルトによってつくられるとき、それはすでに2世紀をはるかに越えた現在の私たちの心にも沁み入るのだ。

サロン…客室、応接間の意。転じてフランスで芸術家、文学者、上流婦人が会話や音楽などを楽しんだ優雅な集まり。

優雅なサロンの音楽会



《フルートとハーブのための協奏曲》の聴きどころ



- フランスのサロンの優雅な響き**
 当時フランスの上流階級で愛好されていたふたつの楽器のために書かれたこの協奏曲は、モーツァルトの作品のなかでもっともギャラントなスタイルのもの。
- フルートとハーブのかけあい** 
 とくに第2楽章ではオーケストラは弦楽器のみになり、フルートとハーブの美しい音色がよりいっそう強調される。
- 万華鏡のように変わっていく旋律**
 アマチュアの演奏家のために書かれているためか、この曲には意外な転調や手のこんだ構成はなく、代わりに新しい楽想をたくさん登場させて、曲全体に変化をつけるよう工夫がこらされている。

ピアノ協奏曲 二短調

CD
1-10

K466

POINT
1

ウィーンはピアノの国

◎ ピアノを武器として

モーツァルトは最初のクラヴィーア（以下ピアノ）協奏曲二長調（K175）を、自分がその弾き手となることを考えて作曲した。そしてこの曲は、彼のウィーン時代にも好みのレパートリーとなった。彼はザルツブルク時代にいくつかの協奏曲をこの楽器のために書いているが、多くはまちの貴族の奥方や令嬢、あるいは自分と姉ナンネルの演奏や共演を目標としてしている。《変ホ長調協奏曲》（K271）のようにフランス人女性ピアノ奏者ヴィクトワール・ジュナミ（かつてはくジュノム）として知られていた）のために作曲した逸品もある。

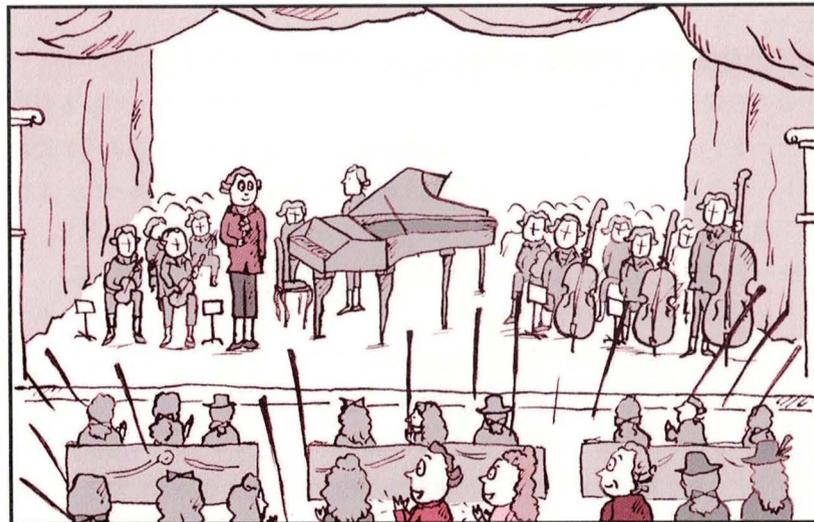
彼は1781年春、ウィーンに定住し、フリーな音楽家として活動を始める。そしてピアノの協奏曲を書き、コンサートでそれらを弾きまくるのだ。

◎ 古典派協奏曲の宝庫をかたちづくる

1782年から最後の年1791年の10年間に、彼は17曲のピアノ協奏曲を作曲し、ウィーンにおける演奏活動の中心演目とした。後半期の8曲は、そのすべてがユニークな個性に輝いていて、後世の聴き手の耳を捉えて離すことがない。その第1曲は、ほかならぬ《二短調協奏曲》（第20番、K466）なのだ。

ピアノ協奏曲は、もともと社交的なジャンルだった。名手が貴族の邸や劇場その他の演奏会場でオーケストラを相手に名技を披露する音楽で、明るい派手やかな性格が特徴の曲が通例であった。モーツァルトも編曲を入れて合計30曲の作品のうち、短調作品はこの二短調のものと、《ハ短調協奏曲》（K491）のわずか2曲を作曲したにすぎない。ちなみにほかの楽器のための短調協奏曲は皆無なのだ。

《二短調協奏曲》初演の様子



《二短調協奏曲》の初演は大成功に終わった。観客には皇帝ヨーゼフ2世もおり、コンサートが終わると「ブラボー、モーツァルト!」と叫んだという。ウィーン時代のモーツァルトにとって、ピアノ協奏曲を作曲しそれをメインにしたコンサートをおこなうことは音楽家としての地位を固め、生計を立てていくための重要な手段だった。

ウィーン時代の傑作ピアノ協奏曲

- 1785年 二短調 K466
- 1785年 八長調 K467
- 1785年 変ホ長調 K482
- 1786年 イ長調 K488
- 1786年 ハ短調 K491
- 1786年 八長調 K503
- 1788年 二長調《戴冠式》 K537
- 1791年 変ロ長調 K595

1785年の《二短調協奏曲》以降の作品は、現在でもコンサートでたびたび取り上げられている。

作曲年・地



1785年(29歳)
ウィーンにて

POINT
2

舞台上悲劇の主人公を演じる

◎《二短調協奏曲》の特異性とは？

この短調協奏曲が1785年2月11日にウィーン市のメーラグラーベなる会場でモーツァルトが催した四旬節の**予約演奏会**で演奏されたとき、ちょうど父親のレーオポルトがザルツブルクから息子を訪ねて着いたところであった。父親は早速このコンサートに立ち会い、娘のナンネルに報告の手紙を書き送り、コンサートも素晴しかったし、この新作協奏曲も「素晴らしい」と語っている。

大忙しのモーツァルトは初演の前にフィナーレのロンドーを試奏してみることもちゃんとできないほどだった。聴衆の反応はどうだったのだろうか？ レーオポルトにとっても、息子のこの協奏曲がおよそはじめての短調協奏曲であったこと、そして一般に父レーオポルトが常識的に考えていたはずの協奏曲の音調とはまったく異なっていて、その無気味なほど暗く烈しい響きに驚きはしなかったのであろうか。

◎ここでもまた聴き手をその音調が戦慄させる

協奏曲は独奏者を主人公とする、言葉なきドラマである。脇役が雰囲気をしつらえると、主役が颯爽と登場し、独白を語り、あるいは周囲の脇役と会話を交わし、劇は進行していく。そのドラマは普通は明るく、いささかの揉（も）めごとがあっても結局はめでたしめでたしの大団円となる。

だが、この協奏曲、いやドラマはちがうのだ。それは正真正銘の悲劇である。モーツァルトはこの悲劇の協奏曲で、協奏曲に割り振られた役割、目的を放棄し、人間の魂のドラマ、それも痛切な体験を語る器とする。私たちはここでも、セレナードで聴いたあの体験をもう一度我がものとする。セレナードがセレナードを超えたように、ウィーンの地で、協奏曲は協奏曲を超越するのだ。

予約演奏会…新作を披露するために貴族たちに「予約名簿」というものを回し、ある程度の観客が集まれば開催されるというシステムの演奏会のこと。

協奏曲が協奏曲を超える

協奏曲の一般的な性格

独奏者がメインの
フレーズやカデンツァ

単純で明快な構造

華やかで社交的な
雰囲気同じような編成と
構造をもっていても……

モーツァルトの《二短調協奏曲》

聴きどころ

- ・第1楽章 緊張感に満ちた陰鬱な出だし
- ・第2楽章 変口長調の穏やかなフレーズから突然短調の嵐のような音型が出現するところ
- ・第3楽章 軽快さがなく、交響曲のようながっちりとしたつくり

CD
1-10

「協奏曲」というかたちをもちながらも、単に「聴衆を楽しませる肩の凝らない作品」という性格を飛び越えて、激しい感情表現の場となっている。

交響曲の性格

構成美

管と弦の調和

オーケストラの
豊かな響き

モーツァルトの愛用したピアノ



モーツァルトが愛用したピアノ。モーツァルトは演奏会の度ごとにこのピアノを会場まで運びだして使用していた。このピアノを使っの演奏活動は《二短調協奏曲》の作曲・初演された1785年にもっとも活発におこなわれた。現在はザルツブルクの家か住家に展示されている。

クラリネット協奏曲

イ長調 K622

POINT 1 クラリネット讃歌

◎ ウィーン時代の管楽協奏曲

モーツァルトはウィーン時代に入って、自分のために、そしてまた自分の弟子たちのために協奏曲を、それもピアノ協奏曲を作曲しつづける。だがその彼には、ウィーンでも、親しい間柄の管楽器奏者がいるのだった。ひとりはずルツブルク以来の旧友で、ハイドンと同一歳のヨーゼフ・ロイトゲープ。このホルンの名手との交際から、4曲の協奏曲ほかの作品が生みだされた。彼とのつき合いは楽譜や演奏にからむ面白可笑しい挿話を生んでいる。(→ p63)

そしてもうひとりがクラリネット奏者アントーン・シュタードラーであった。当時、クラリネットはまだ新参者の木管楽器だったが、モーツァルトはずルツブルクにはなかったこの楽器に早くから関心を示し、イタリアやパリなどでこの楽器を入れた作品を試みている。

◎ フリーメイソンの盟友アントーン・シュタードラー

彼はモーツァルトのウィーン時代後半に親しい関係にあり、フリーメイソンの仲間でもあった。彼はプラハに赴き、とりわけ1791年の9月初旬におこなわれた祝典オペラ《ティート帝の慈悲》の2曲のアリア（第1幕第9曲セストのアリアと第2幕第23曲、ヴィテリリアのアリア）で、美しいクラリネットとバセットホルンのオブリガートの旋律を演奏している。

そのシュタードラーはモーツァルトからクラリネット五重奏曲イ長調（K581）を書いてもらっているほか、最後の年1791年の10月はじめ、やがてモーツァルトの死が近づいてきている頃、もう1曲の名作協奏曲を進呈させるのだ。それがクラリネット協奏曲イ長調（K622）にほかならない。

モーツァルトとクラリネット

1771年にクラリネットを用いてはじめて作曲して以来、モーツァルトはこの新興の楽器に大きな関心を寄せていた。彼はシュタードラーと出会ってからはクラリネットを用いたさまざまな曲を試み、なかでもクラリネット協奏曲とクラリネット五重奏曲は、古典派時代のクラリネットを用いた楽曲の最高傑作ともなった。



18世紀のクラリネット奏者

1771年（15歳） イタリア旅行中に作曲したディヴェルティメント変ホ長調（K113）ではじめてクラリネットを用いる。

1777年（21歳） マンハイムを旅行中この地のオーケストラでクラリネットが交響曲で使われたときのみごとな効果を知る。

1784年（28歳） シュタードラーの演奏会のために《グラン・パルティータ》を作曲する。

1789年（33歳） シュタードラーのためにクラリネット五重奏曲を作曲する。

1791年（35歳） プラハへの旅行中モーツァルトの指揮で《ティート帝の慈悲》が初演された際、シュタードラーは友情出演で第1幕第9曲のアリアと第2幕第23曲のアリアでオブリガートを演奏する。

1791年（35歳） 完成された最後の協奏曲となるクラリネット協奏曲を作曲する。



シュタードラー

モーツァルトより3歳年上のシュタードラーは、ウィーン宮廷楽団に仕える当時並ぶ者のないクラリネットの名手だった。モーツァルトはシュタードラーの優れた演奏技術に大きな刺激を受けた。



1791年（35歳）
ウィーンにて

POINT
2

〈白鳥の歌〉クラリネット協奏曲

◎ モーツァルト終焉の響き

このクラリネット協奏曲の響きを聴くと、多くのひとがそれがモーツァルトの最後の年の響きだと納得してしまうという不思議な体験をさせられる。そしてその響きは、彼がこの年1791年の1月はじめに書いた最後のピアノのための協奏曲、すなわち《変ロ長調協奏曲》(K595)の響きともけって無縁のものではないと感じさせられるのも事実だろう。

だが、近年の自筆譜研究は、これらふたつの協奏曲の冒頭楽章が、1791年というモーツァルトの没年ではなく、幾年も前に着想されていたとの捉え方を提示している。モーツァルトがこれらの協奏曲を完成したのは確かに1791年であったことは事実としても、そこに湛えられた情趣は、モーツァルトが早くも1787年、すなわち父親レーオポルトの死の年、そして《ト短調弦楽五重奏曲》(K516)、さらには別れや死について歌ったいくつかの歌曲、そして死の匂いに満ちた不思議なオペラ《ドン・ジョヴァンニ》(K527)を書いた年あたりから変わらぬ思いであったのだろうか。

◎ 〈哀しさ〉の境地へ

モーツァルトはこうして最後の年の最後の協奏曲を、この本来は社交的な楽曲、ジャンルだった音楽を、個人の魂の、個人の内奥の思いの表白の器としたのであった。それは《二短調ピアノ協奏曲》の表現領域をさらに超えて、モーツァルトの器楽曲の究極的な境地を示してくれる。

フリーメイソンの盟友であったシュタードラーが、こうした最後の年にモーツァルトが愛用した楽器、その瑞々しい音色のクラリネットうつつで不滅の讃歌を捧げたことを、私たち後世人も大いに多とすべきであろう。

オブリガート…主旋律と競うように奏される、旋律的な伴奏のこと。助奏。

モーツァルト最後の傑作協奏曲

第1楽章

管弦楽の穏やかで優しい第1主題が印象的。モーツァルトのほとんどの交響曲を超える359小節という長大な構造をもつ。

第2楽章

静かな弦の伴奏にのって、クラリネットの主旋律が死を予感するかのような諦観にも似た表情をみせる。一切の過剰が排除された、簡潔で味わい深い響き。

第3楽章

第2楽章の沈んだ雰囲気から一転し、軽やかなメロディがクラリネットによって奏でられる。しかしどことはなしに影が漂っている。

クラリネットの真価をみごとにあらわして作曲

18世紀のクラリネット

18世紀初頭に発明されたクラリネットは、ほぼ均一な音色をもつオーボエに対して、低音、中音、高音のそれぞれの音域で音色が変わり、豊かな表現が可能。モーツァルトのクラリネット協奏曲では、とくに最低音近くの音域を十分に鳴り響かせ、高音域との鮮やかな対比がみごとに表現されている。

18世紀のバセットホルン

1770年頃に発明されたクラリネットの仲間、バセットホルンは、普通のクラリネットより5度低い音域をもっている。モーツァルトはこのくすんだ柔らかい音色をもつ楽器をクラリネットとともに好んで用いた。クラリネット協奏曲の第1楽章は、はじめこのバセットホルンのために書かれた。



「難しすぎず易しすぎない中間のもの」

協奏曲とは？

父レーオポルトの若き友人トランペット奏者シャハトナーが伝える4歳のモーツァルトのエピソードがある。勤めの帰りにモーツァルト家に寄ると、彼がなにやら五線紙にいたずら書きをしている。父親がそれを取り上げてみてもわからない。息子に訊くと、ピアノ協奏曲を書いているという。

ふたりでよく見ると、まさに協奏曲だった。こんなもの難しすぎて誰にも演奏できないじゃないかという、「だからこれは協奏曲なの」との答えが返ってきた。実際、レーオポルトが息子に協奏曲を書かせたのはほかのジャンルの試みよりあとのことであった。

ピアノ協奏曲の極意

そのモーツァルトが、ウィーンに移って最初に書いた3曲のピアノ協奏曲（イ長調 K414、ヘ長調 K413、ハ長調 K415）について語っている印象的な言葉がある。「これらの協奏曲は、難しすぎるものと易しすぎるものとのちょうど中間のもので——とても豪華絢爛としていて——耳に快く響きます。自然で、空虚なものに墮することはありません——確かにここに——通人だけが満足を得ることができますが、——それでも——通人でなくても、なぜかはわからなくとも、それに満足するはずのものなのです」

このモーツァルトの証言は、ただ単に上記のピアノ協奏曲にだけ妥当するものではなく、彼のすべての協奏作品に共通する言葉と考えることができる。

幼年時の神童の直観を超えて、各楽器の名手たち、あるいはいくつかの楽器の愛好家たち、そして弟子たち、しかしとりわけモーツァルトのみずからの演奏体験を凝縮して、彼が書き上げた40曲もの協奏曲は、そうした古典派時代の協奏曲の真髄を伝えている貴重な作品群をかたちづくっている。

もっと知りたい！ モーツァルトの協奏曲

ファゴット協奏曲
変ロ長調 K191
1774年（18歳）

現存する唯一のファゴットのための協奏曲。青年らしい明るさとはつつとした雰囲気を持ち、ファゴットの特性がみごとに織りこまれている。

フルート協奏曲
ト長調 K313
1778年（22歳）

マンハイム・パリ旅行中に会ったヴェンドリングという名フルート奏者を想定して書かれた。高度なテクニックが要求される。

協奏交響曲
変ホ長調 K364
1779年（23歳）

ヴァイオリンとヴィオラというふたつの独奏楽器をもつ協奏曲。独奏ヴァイオリンとヴィオラだけでなく、管楽器も積極的に活用されている。深い憂いを秘めた第2楽章は印象的。

ホルン協奏曲
二長調 K412
1791年（35歳）

この曲は近年の自筆譜の科学的な検証によって4曲あるホルン協奏曲のうち最後の作品と判明した。仲のよいホルン奏者ロイトゲープのために書かれ「さあいけ、ロバ君!」「ちょっとひと息」「だめなブタ公め!」などと、無邪気ないたずら書きが書きこまれている。

ピアノ協奏曲
ハ長調 K467
1785年（29歳）

1785年の人気絶頂の頃に作曲されたピアノ協奏曲のひとつ。前作 K466 とは対照的に、ハキハキとした行進曲風の第1楽章、甘く優しい第2楽章、陽気で軽快な第3楽章と、社交的な雰囲気に満たされた作品。

ピアノ協奏曲
変ロ長調 K595
1791年（35歳）

モーツァルトは生涯に30曲ほどのピアノ協奏曲を作曲したが、その最後を飾るのがこの曲。穏やかでのびのびとした雰囲気にも包まれて、透明で素直な、澄みきった音楽の世界が広がっている。

ヴァイオリン・ソナタ ホ短調

CD
2-2

K304

POINT 1 親密な心の世界、そして響きの世界

◎ ヴァイオリンの名手モーツァルト

モーツァルトの最初期のソナタはクラヴィーア（ピアノ）独奏用でもあり、またヴァイオリンがこの鍵盤楽器に寄り添い対話を交しながら進む、いわゆる助奏の楽器の役割を果す二重奏ソナタのかたちも同時にとるものだった。それがさらにチェロを加えた三重奏ソナタにもなった。

幼い頃のそうした二重奏ソナタは、モーツァルトが成人してから試みた曲では、次第にヴァイオリンの比重が大きくなり、やがてふたつの楽器は対等のパートナーとなっていく。ふたりの対話や掛け合いにもうひとつ楽器が加わると親しい者同士の会話がなされる。室内楽はこうして団らんだんらんの場となる。

それは弦楽器だけのアンサンブルでも同様だった。そうして弦楽の、とりわけ四重奏曲や五重奏曲が生みだされる。モーツァルトはピアノばかりか弦の名手でもあったから、こうした触れ合いも楽しんだのだ。

◎ モーツァルトのヴァイオリン・ソナタの分布

彼は最初期のソナタ 10 数曲のあと、10 年以上ものあいだ、この種の作品を手がけなかった。彼がふたたび、というか新たに挑戦するのはマンハイム・パリ旅行の途次である。音楽の豊かなドイツとフランスの両都市で、彼は一気にこの二重奏ソナタで佳品を生みだしていった。そのなかでも名高い曲が《ホ短調ヴァイオリン・ソナタ》(K304) なのだ。

そのあと、彼はウィーンに定住してからも同僚のために、あるいはイタリア人女性の名手のために、あるいは初心者のためにと、折に触れてこのジャンルの作品を書き綴るのである。

〈ヴァイオリン・ソナタ〉までの流れ

1763 年 (7 歳)

ヴァイオリンの伴奏でも演奏されるクラヴサンのためのソナタ
(→ p115 上)



独立したクラヴサン(ピアノの前身)のソナタにとり外しができるヴァイオリンのパート(オブリガート)を添えたもの。この頃はヴァイオリンよりもピアノの方が完全に優位だった。

1778 年 (22 歳)

《ホ短調ヴァイオリン・ソナタ》



モーツァルト自身が「クラヴィーアとヴァイオリンの二重奏曲」と呼ぶこのソナタは、ピアノに主導性がおかれてはいるが、ヴァイオリンの役割がぐっと重くなってきており、ふたつの楽器が互いに支え合って曲をかたちづけている。

その後…

1781 年に作曲された 4 曲のヴァイオリン・ソナタではヴァイオリンの役割は徐々に大きくなり、ふたつの楽器の密接な関係が押し進められる。そして最後の 3 曲のソナタ (K454、K481、K526) では、ピアノとヴァイオリンは対等の役割をもつようになる。

モーツァルトとヴァイオリン



モーツァルトは幼い頃、ヴァイオリンの演奏法をほんのわずかのあいだに会得したと伝えられている。父レーオポルトの友人シャハトナーは、レーオポルトと友人と三重奏曲を弾いたとき、幼いモーツァルトが第 2 ヴァイオリンのパートを習ったこともないのにみごとに弾いたと語っている。

幼少の頃に愛用したヴァイオリン。現在はザルツブルクのモーツァルトの生家に保存されている。

作曲年・地

1778 年 (22 歳)
パリにて



POINT
2

作曲家の心を写しだすヴァイオリン・ソナタ

◎ マンハイムとパリの憂愁の響き

このジャンルでもモーツァルトは短調作品をほとんど書くことがなかった。ソナタの楽章に短調楽章を挟むことはあれ、そしてそれがまことに美しい愁いをあらわにすることはあれ、彼が残した短調の作品はわずか1曲のみである。それが《ホ短調ヴァイオリン・ソナタ》(K304)である。

この曲は、2楽章制のものでふたつの楽章がいずれもホ短調で書かれ、最初に激烈なアレグロ楽章が、つづいてテンポ・ディ・メヌエット(メヌエットのテンポで)の緩徐にして憂愁に閉ざされた楽章がつづく。この曲は、自筆譜上に「ソナタ第4番、パリにて」とあるため、長らくパリで初夏に書かれたものと考えられてきた。それは何故だろうか？

◎ 母親マリーア・アンナの死と先立つマンハイムの憂愁と

この曲は1778年7月3日のパリでの母親の死と結びつけられてきた。《イ短調ピアノ・ソナタ》(K310)も同じように母親の死と関係づけられている。だが《ホ短調ヴァイオリン・ソナタ》の第1楽章は近年の五線紙研究によって、モーツァルトがマンハイム滞在中に書き始めていたことが明らかとなった。つまりこの曲の第1楽章の愁いに満ちたヴァイオリンの上昇し下降する旋律は、数カ月後に訪れた母親の死に触発されたものではない。

その未完の曲を携えてモーツァルトはパリに旅立つ。そしてその地、コンセル・スピリチュエルでの《パリ交響曲》の大成功と母親の死の悲しみが交錯する異郷の都で、この曲のフィナーレを書き上げたのだ。しかしそのモーツァルトの心のなかにはもうひとつ確実な思いが渦巻いていた。それこそマンハイムの若き歌姫アロイジア・ヴェーバーへのやるせない憧れであったのだ。

二重奏ソナタ…ふたつの楽器によって合奏されるソナタ。



1778年のモーツァルト

- 1778年
(22歳)
- 1月 アロイジアと出会い、恋に落ちる
 - 3月 母とふたりでパリに向かう
 - 4月 《フルートとハーブのための協奏曲》作曲
 - 6月 《パリ協奏曲》が初演され、大好評を得る
 - 7月 母マリーア・アンナ死去
 - 11月 アロイジアに会いにマンハイムへ行くが
ヴェーバー家はミュンヘンに移っていた
 - 12月 ミュンヘンでアロイジアに再会するが失恋

アロイジア・
ヴェーバー

母マリーア・アンナ

悲しみに満ちた響きの《ホ短調ヴァイオリン・ソナタ》は、従来は母の死と関連づけられ、パリで夏のはじめに作曲されたと考えられていた。しかし五線紙の研究でこの曲はすでにマンハイムで作曲が始められていたことがわかった。



悲しみの響き 《ホ短調ヴァイオリン・ソナタ》

第1楽章

CD
2-2

異常な緊張感を漂わせた冒頭の第1主題は、ヴァイオリンとピアノのユニゾンで始まる。突然ピアノで和音が連打されて第2主題が登場し、強弱の対比が示される。途中展開部ではさらに緊張感を増している。

第2楽章

第1楽章につづき、憂鬱な雰囲気漂わせたメロディで開始。このあとに、「幸福の幻影」ともいえるフレーズがあらわれるが、最後は第1楽章の激しさが戻って曲を閉じる。

ピアノ・ソナタ 変口長調

CD
2-3

K333

POINT
1

里帰りの旅の帰路に咲いた一輪の花

◎ 作曲年代の謎

《変口長調ピアノ・ソナタ》(K333)のケツヘル番号に注目してみよう。ケツヘルを通し番号ではこの曲は名高いトルコ行進曲つきの《イ長調ピアノ・ソナタ》(K331)ほか4曲が連続した番号をもっていて、いずれも1779年にザルツブルクで書かれたとされていた。ところがそれが20世紀のはじめにフランスの研究者によってこれらの曲が1778年か、あるいは最後のこの曲は少し遅く、それでもパリ滞在中に作曲されたものと訂正され、私たちは長いことそれを信じてきた。

しかし第2次世界大戦後の筆跡研究与五線紙の研究で、これらの曲は、実は1783年にウィーンで作曲され、最後のこの《変口長調ピアノ・ソナタ》だけはこの年の夏、モーツァルト夫妻がザルツブルクに里帰りし、ウィーンへ帰ってくる途中のリンツでつくられたものほとんど確定されるにいたったのだ。

◎ モーツァルトがウィーンで知ったピアノ楽器

このように作品の作曲時期についても、後世の思惑が紛れこむ。私たちは作曲家本人よりも後世の自分たちの思いを大事にしがちになるのに十分注意しよう。モーツァルトはマンハイム・パリ旅行の折、父親レーオポルトの生れ故郷アウクスブルクで、シュタインというピアノ製作者のフォルテピアノを知り、マンハイムやパリで素敵なソナタ(K309、K311、K310)を書いている。

今度はウィーンに移ってから、この楽都で識った製作者ヴァルターの楽器を自分でも注文して手に入れ、それに習熟して、彼はこれからソナタやその他の小曲の傑作を書いていく。自分用にも、また弟子たちのためにも。

モーツァルトとピアノ



ピアノはモーツァルトにとって、とくに重要な楽器だった。幼い頃からピアノによって音楽の勉強を始め、成人してからもピアノの独奏曲やピアノ協奏曲を作曲し、演奏しつづける。彼が表現したいものはピアノによってもっとも適確に表現できたのだろう。

作曲年代が大きく揺れた4曲のピアノ・ソナタの研究

1862年、ケツヘルにより1779年にザルツブルクで作曲されたと推定される。

20世紀に入り、研究者ド・サン＝フォアにより、最初の3曲が1778年の夏頃パリで、最後の1曲(K333)もパリ滞在中(1778年9月まで)に作曲されたと訂正される。

1970年代の筆跡研究でこれらの4曲は早くても1780年代の夏のものであると指摘され、1980年代の自筆譜の紙の種類と透かし模様の研究では、さらに3年後の1783年以降につくられたものと推定。K333の自筆譜がリンツに近いシュタイヤーで製造された五線紙であることが判明し、この曲が1783年11月のリンツ滞在中に作曲されたと判定された。

作曲年代の推定が変わると、そのときにモーツァルトがどんな状況にあったか、何が作曲のきっかけになったのか、という推論が大きく変わってくる。《変口長調ピアノ・ソナタ》が1783年に作曲されたということは、モーツァルトがザルツブルクからウィーンへ移住し、精力的に作曲・演奏活動をおこなっているなかで書かれたことになる。またウィーンで愛用したピアノの音を念頭に作曲されたということになる。

作曲年・地



POINT
2

ピアノの音ですべてを描く

◎ 最初の〈ウィーン・ソナタ〉の多彩な世界

1783年にモーツァルトが手がけた最初の作品たちのなかで、一番名高いのは、やはり《イ長調ピアノ・ソナタ》(K331)だろう。最後は急速なロンド楽章で、オリエンタル、東洋風のいわゆる《トルコ行進曲》だ。この曲がつけられた1783年の100年前、神聖ローマ帝国軍が、首都ウィーンを包囲したオスマン・トルコ帝国軍に完勝した祝年を祝うにふさわしい響きを高らかに鳴り響かせる。

それに先立つ優雅なメヌエット楽章は当時のウィーンの雰囲気私たちに伝えてくれるし、その前には附点つきリズムのシチリアーナ舞曲の主題をまことに多様な変奏で次々と変容させていく音の魔術師モーツァルトのみごとな手品さえみられる。ソナタ形式の楽章を欠いた、音の祭典、究極のソナタである。

◎ ピアノの魔術師のもうひとつの仕掛け

これとまた対照的なソナタが《変ロ長調ピアノ・ソナタ》(K333)である。今度は徹底してのソナタ形式の祭典だ。流麗なメロディにあふれる第1楽章は生き生きとしたリズムに支えられ、強弱のコントラストや切分音の使用など、次から次へとくりだされる技は聴く者の耳を捉えて放さない。

第2楽章は歌うような(カンタービレ)美しい楽章だが、まるでオペラでプリマ・ドンナが歌うアリアのようだ。そしてフィナーレのロンドもソナタ風に調理されている。もうひとつ魔術師の仕掛けを暗示しておこう。第1楽章で右手がオクターヴで2分音符を弾く2小節で、左手が8分音符で短2度—短2度—長2度—短2度と音形を添える。3番目はモーツァルトさんの間違いだろうか? このトリックには日本の有名な作曲家氏も引っかけたことがある。モーツァルトの罠ではあった。

モーツァルトの仕掛けたトリックとは?

第1楽章 **CD**
2-3

なめらかに歌うような第1主題でスタート



落ちついた第2主題で雰囲気が少し変わり……



強弱の対比された細かい動きが2回くり返されると、



問題のトリックの音型が登場

うっかりすると聴きのがしてしまいそうなくらいこっそりと、トリックが仕込まれている。よく聴くと3回目の長2度の音型のところは「おや」と思わせられる。この3番目は書き間違いといわれたこともあったが、後半でも違う音で同じ音型が出てくるので、意図的な仕掛け。

※長2度はド-レ、レ-ミ、ソ-ラなどの全音の音程。短2度は長2度の半分、ド-ド#、ミ-ファ、シ-ドなどの半音の音程のこと。

弦楽四重奏曲 ハ長調

CD
2-4

K465 《不協和音》

POINT 1 アンサンブルの醍醐味のなかに

◎ 正鵠を射たゲーテの言葉

モーツァルトの同時代人の文豪ゲーテは言った。「4人の甘いも酸っぱいも噛み分けたひとたちがお互いに会話を交わし合っているのが聞こえる」それがこの文豪が捉えた弦楽四重奏の印象なのだ。第1ヴァイオリンが音頭をとり、第2ヴァイオリンが多くの場合、3度とか6度とかオクターヴとかでその第1ヴァイオリンを慎ましやかに支えて同調を示し、ヴィオラがふたつのヴァイオリンに賛意をあらわしたりいく分異論を挟むことがあれ、チェロがどっしりと構えて全体に落ちつきを与える余裕を示してくれ、それが聴く者に納得と喜びをもたらしてくれる。これが古典派が考案し、開拓し、そして完成した室内楽の王者、弦楽四重奏曲のジャンルなのだ。

そしてそれは古典派の雄ヨーゼフ・ハイドンが果した業績であった。

◎ モーツァルトも先輩の先業を追う

モーツァルトが弦楽四重奏曲の分野に手を染めたのは14歳、最初のイタリア旅行の途中だった。そして4度目のミラノ滞在中、彼は6曲の連作を書いている。軽やかな3楽章の《ミラノ四重奏曲》だった。17歳の少年作曲家はその後、3度目のウィーン旅行で、ハイドンの四重奏曲を知った。およそメヌエットをとまなう4楽章制の6曲の作品群《ウィーン四重奏曲》は、堅実なつくり方、短調作品の試みなど、やがて師となり友となった大作曲家に肉迫するだろう予感を聴く者に与えたのではなかったか。だが、その時期が訪れたのは、10年近くも歳月が流れ、ウィーンに移り住んだあとであった。ここでも6曲の連作が書かれ、その最後には《不協和音四重奏曲》(K465)がおかれるのだ。

モーツァルトと弦楽四重奏曲



モーツァルトとハイドン

ハイドンの弦楽四重奏曲

ハイドンは1781年、全6曲の《ロシア四重奏曲》を作曲し、翌年出版した。この作品によって音楽史上の古典派様式が完成されたといわれている。ハイドンは全部で80曲にもぼる弦楽四重奏曲を作曲した。

モーツァルトの弦楽四重奏曲

ハイドンの《ロシア四重奏曲》に深い感銘を受けて1785年1月14日までに6曲の弦楽四重奏曲(《ハイドン四重奏曲》)が作曲される。ハイドンの作品がきっかけとなって作曲されたこれらの作品には、模倣と感じられる点はなく、モーツァルトの個性が確立されている。

弦楽四重奏の編成



この編成は、最も調和した表現力に富む組み合わせといわれる。はじめはディヴェルティメントと同じような構成だったが、ハイドンによってソナタ形式をもつ4楽章制の緻密な弦楽四重奏曲のかたちが確立された。

作曲年・地



1785年(28歳)
ウィーンにて

POINT 2 音楽史の記念碑として

◎ ハイドンの掣みに倣い、師を超える

モーツァルトが1781年にウィーンに定住し、活発な音楽活動を開始した直後、ハイドンは6曲の《ロシア四重奏曲》(作品33)を作曲し、出版した。それはモーツァルトには、大きな刺激となり、励ましとなった。

彼は第1曲(K387)を1782年の大晦日に、そして最後の第6曲、いわゆる《不協和音四重奏曲》を1785年1月14日に作曲し終えている。2年を超える歳月はモーツァルトの通常の創作のスピードからはむしろ異様に長いともいえるだろう。

完成した6曲の弦楽四重奏曲はすぐさま、ハイドンの前で、ちょうどウィーンを訪ねていた父親レーオポルトも立ち会って演奏されたばかりではない。9月には有名なハイドンへの献辞をともなって出版もされている。いずれも傑作揃いだが、なかでも連作を閉じる《不協和音》は、その代表作品といえるだろう。

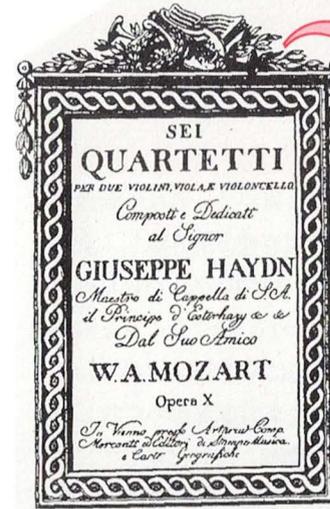
◎ ささまざまな工夫はこの作品に深みと、そして謎をもたらす

この曲は冒頭にアダージョの序奏をおいているが、同時代の作曲家からその不協和な進行に、初歩的なミスをおいているとの批判、否、非難さえ加えられたものであった。だがこの混沌の先に、第1楽章主部のアレグロの光の清朗な世界がある。つづく緩徐楽章も、メヌエット楽章も、そしてフィナーレも完璧なできばえそのもので、ハイドンが父親レーオポルトに語った若き僚友への賛辞は、巨匠ハイドンが自分を超越る存在に感激し、脱帽した様子を生き生きと伝えている。

モーツァルトの弦楽四重奏曲の創作活動はさらにつづけられる。《プロイセン王四重奏曲》の3曲は、また別の世界を象徴的なかたちで私たちに開示してくれるのだ。

ハイドンへ献呈されたモーツァルトの弦楽四重奏曲

第1ヴァイオリンのパート譜のタイトルページに印刷されたハイドンへの献辞



《ハイドン四重奏曲》の初版の表紙

我が親しき友ハイドンに

「——高名な御人にして、わが最愛の友よ——
彼ら(《ハイドン四重奏曲》)があなたのご寵愛にふさわしからぬものでなきよう望ましめるものであります。それゆえ、ご寛大にも進んで彼らをお引きとりください。そして、彼らの父親とも、導き手とも、また友人ともなってください! 今後は彼らに対する私の権利をおゆずりし、それゆえ、父親の偏愛の眼が、私に隠したこともあろう欠陥をおおらかにご注意くださいるよう——そしてあなたの寛大な友情を保ちつづけてくださいますように、お願いいたします」

あなたのこの上なく誠実な友

1785年9月1日
W. A. モーツァルト

“不協和な”響きとは？

モーツァルトの《ハイドン四重奏曲》のなかで、序奏をもつのはこの《不協和音》のみ。冒頭から解決されない不協和音の渾沌たる響きをくり広げるこの序奏の部分は、和声学の理論上では間違っただけのものであるため、議論的となった。

第1楽章冒頭

弦楽五重奏曲 ト短調

K516

POINT
1

親密な響き、弦楽五重奏曲の世界

◎ 弦楽五重奏曲の稀少さ

古典派の室内楽でもっとも人気があったジャンルは何か？ それは弦楽四重奏曲であった。娯乐的な音楽のジャンルから弦楽四重奏曲を引き離し、全力を投入して作曲すべきものとしたのは、ヨーゼフ・ハイドンであった。彼はこのジャンルを室内楽の最高峰として位置づけ、それにふさわしい形でたくさんの作品を手がけ、しかも一步一步、形式的にも、また内容的にも充実させていった。

モーツァルトもそれに追隨して、勝るとも劣らぬ弦楽四重奏曲の成熟した姿を私たちの前で展開してみせてくれる。弦楽五重奏曲は、これに反して、多くの作曲家が忌避したのでなくても、少なくとも、さほど数の上で多くの作品を残したとはいいがたい。モーツァルトにして然りである。

◎ 弦楽五重奏とは？

弦楽四重奏は4人の大人の対話、会話として捉えられる。五重奏曲にはこれに何が加えられるのか。事実、5人の編成は、作曲家によってまちまちであった。この種の作品を多く書いたのはルイージ・ボッケリーニなる人物だった。彼の五重奏曲は通常チェロがもうひとり加わっての奏楽であり、作品である。一方モーツァルトのこの種の作品には、チェロではなくヴィオラが加わった。

中声部が充実することで、なにか合奏全体に潤いが出てくる。モーツァルトがはじめてこの弦楽五重奏曲を試みたのは、17歳 1773年のことではあった。その後モーツァルトはまず弦楽四重奏曲で技を磨いたあと、五重奏曲の世界に挑戦する。短調の傑作《ト短調五重奏曲》(K516)を含む一連の作品で彼が選んだ編成はより親密な響きのヴィオラ2本の方だった。

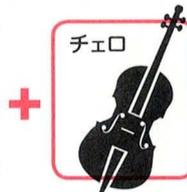


モーツァルトの弦楽五重奏曲

弦楽五重奏曲のジャンルは、ハイドンは「誰も注文しなかったため」作曲していないし、ベートーヴェンも初期の習作2曲しか残していない。一方モーツァルトは1773年から死の年までに全部で6曲の弦楽五重奏曲を作曲。弦楽四重奏曲に比べて数は少ないが、重厚でスケールの大きな室内楽の響きの世界をつくりだし、このジャンルを最高の古典派室内楽曲にまで高めた。

ボッケリーニの弦楽五重奏曲

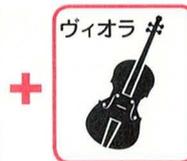
第1ヴァイオリン 第2ヴァイオリン ヴィオラ チェロ



ボッケリーニは125曲もの弦楽五重奏曲を作曲して、このジャンルの先駆者となる。弦楽四重奏にチェロを加えた編成を用い、低音をしっかりと厚みをだすことに成功。

モーツァルトの弦楽五重奏曲

第1ヴァイオリン 第2ヴァイオリン ヴィオラ チェロ



モーツァルトはミハエル・ハイドンと同じく、弦楽四重奏にヴィオラを加えた編成で作曲。内声部がふくらみ、ヴィオラとチェロが解放されてメロディも担当できるようになる。弦楽四重奏のまとまり感、緊張感を保ちながら、協奏曲風の自由さが加えられる。

	弦楽四重奏曲	弦楽五重奏曲	作曲年・地
ハイドン (1732年～1809年)	83曲	0曲	<p>1787年(31歳) ウィーンにて</p>
モーツァルト (1756年～1791年)	23曲	6曲	
ベートーヴェン (1770年～1827年)	16曲	2曲	

POINT
2

〈死の五重奏曲〉

◎ 父親の死の前後に傑作を書く

モーツァルトがふたつの傑作五重奏曲を書き上げたのは、ウィーン期も後半に入ってからのことであった。1787年4月4日、モーツァルトは父親の病の報を得て手紙を書く。そこにはすでに父親の死への予感があらわであった。4月中旬に書かれた《ハ長調五重奏曲》(K515)は重厚な響きで早くもモーツァルトがこのジャンルをおのれの思念の担い手とし、その表現を意図していることを物語っている。

モーツァルトがこの作品を手がけた頃、彼はすでに名作オペラ《ドン・ジョヴァンニ》(K527)の作曲を始めていた。このオペラは騎士長の死をもって始められ、そして主人公の死をもって終りを告げる。モーツァルトはここでも父親の死を先どりするのだ。

◎ そして〈死の五重奏曲〉がくる

父親の死を感じとりつつ、モーツァルトは《ト短調五重奏曲》を作曲する。5月16日であった。それは日本の文芸評論家小林秀雄が、フランスのカトリック詩人アンリ・ゲオンの言葉を敷衍しつつ「悲しさは疾走する」と捉えたものであった。そのゲオンは、しかし、この五重奏曲を〈死の五重奏曲〉と呼び、父親の死と関係づける。死の想念が稀代の弦楽五重奏曲の印象深い響き、この世での生者の死者を悼む思いである〈悲しさ〉を生みだすのだ。

この〈死の五重奏曲〉のフィナーレは長調となって飛び立っていく。それはまた第1楽章と同じようにアレグロで疾走する。それは肉体を離れた死者の魂のように歩み去る。この世から解放されて、爽やかに、この世の親しい人たちから別れて、晴れやかにではないが爽やかに久遠の国へと。

小林秀雄…『モオツァルト』(『創元 第1号』所収、1946年)は、日本のモーツァルト批評に大きな影響を与えた著作となった。



八長調とト短調のあざやかな対比

《ト短調弦楽五重奏曲》は、約1か月前に完成された《ハ長調弦楽五重奏曲》と並んでモーツァルトの室内楽中、最高傑作とみなされている。このペアは、1788年に作曲された交響曲第40番〈ト短調交響曲〉と第41番《ジュピター交響曲》と同じ調性の対比と完成度の高さをもっており、曲の雰囲気も似ている。

《ハ長調弦楽五重奏曲》

全器楽作品中、最大の規模(1149小節)をもつ。研究者アインシュタインは「誇らかで、王者のようで、宿命をはらんでいる」と表現した。《ジュピター》と同じように、かづよく密度の濃い作品。

《ジュピター交響曲》

ギリシア神話の最高神ゼウスの呼び名がびったりとあてはまる古典派交響曲の最高傑作。王者としての堂々とした輝かしい響きと、堅固で緻密な構成をもつ。

ハ長調

《ト短調弦楽五重奏曲》 CD 2-5

曲全体にモーツァルトの救いのない激情がうずまく。最後の楽章(第4楽章)ではト長調に転調するが、ベートーヴェンの曲のように、苦悩の末に歓喜を勝ちとるのはまったく違い、叶えられない願いのような切ない響きが秘められている。この転調をアインシュタインは「慰めなき長調」と表現した。

《ト短調交響曲》

美しさと悲しさの融け合った響きに満たされているが、その内には逃れられない宿命といった情趣が秘められている。〈ため息〉音型の半音階的なメロディのつくり方が印象的。パトスにあふれたト短調とつよく結びついている。

ト短調

心の世界を写しだすふたつの花園

ピアノ独奏曲の花園

モーツァルトにとってピアノ（チェンバロとピアノフォルテ）は生涯もっとも重要な楽器だったことはすでにくり返し述べてきた。独奏曲にはソナタがあり、変奏曲があり、あるいは幻想曲やロンドその他の小曲がある。

さらに連弾曲（4手のための）2台のピアノのための作品がある。いずれも、モーツァルト当時のピアノ、いわゆるフォルテピアノは5オクターヴ、61鍵の小型のフリーゲル（グランド型）の鍵盤楽器で、足ペダルがなく、膝ペダルがついていた。それは現代のピアノ（88鍵）とは比較にならぬほど軽量であり、響きも軽やかなものだった。

ピアノを伴う室内楽には、なおヴァイオリンとの二重奏ソナタ、チェロを含む三重奏ソナタ、さらに弦や管をとまなう四重奏曲や五重奏曲も残されている。こうしたピアノを含む室内楽でも、近年しだいに当時の楽器（オリジナル楽器）による演奏が増えてきている。18世紀の響きへの憧れ、郷愁といえようか。

弦楽器、管楽器、そして管弦混合の室内楽の花園

モーツァルトは管の名手たち、そして弦の名手のためにも室内楽曲を多数書いている。いずれもすぐれた曲が多いのもモーツァルトならではである。もっとも楽器数が多いのはセレナードの項でも触れた《13楽器のためのセレナード》（《グラン・パルティータ》）（K361）だが、とりわけウィーン時代には友人の管の名手たちのために三重奏曲や二重奏曲など小曲をかなりたくさん書いており、クラリネット、バセットホルン、あるいはホルンなどの知られざる佳品も多い。弦の室内楽にもモーツァルトがザルツブルクに里帰りした折に病気のミヒャエル・ハイドンに代わって大司教のために調達した2曲の《ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲》（K423、K424）あるいは晩年の力作弦楽三重奏曲《ディヴェルティメント変ホ長調》（K563）のような編成の作品も残されている。



もっと知りたい！ モーツァルトの室内楽／独奏曲

2台のピアノのためのソナタ
二長調 K448
1781年（25歳）

父に宛てた手紙によると、この曲は優れたピアノの弟子ヨゼフ・アウエルンハンマーとふたりで弾くために作曲された。弟子との競演という機会に作曲された珍しい1曲。

ピアノ・ソナタ第15番
八長調 K545
1788年（32歳）

ソナチネ・アルバムにもおさめられているので、習ったことがあるというひとも多いだろう。モーツァルト自身も「初心者のための小ピアノ・ソナタ」として書き上げた、単純だが愛らしい小品。

ヴァイオリンとヴィオラのための二重奏曲
ト長調 K423
1783年（27歳）

高度な演奏技巧が要求され、しっかりした形式と渋い味わいをもつ作品。この二重奏曲は病気のミヒャエル・ハイドンの代わりにモーツァルトが2曲書いたうちのひとつだが、ミヒャエルはこれらの曲を高く評価し、そのスコアを生涯大切に保管した。

オーボエ四重奏曲
ヘ長調 K370
1781年（25歳）

名オーボエ奏者フリードリヒ・ラムのために作曲された。協奏曲のソロのように、オーボエが華麗に鳴り響き、協奏曲と室内楽の精神とのみごとな結合をみせている。

ディヴェルティメント
変ホ長調 K563
1788年（32歳）

モーツァルト唯一の本格的な弦楽三重奏曲。経済的に窮しながらも傑作を生みだしていく時期に書かれたこの曲は、フリーメイソンの盟友で晩年のモーツァルトを支えた友人のプフバルクに献呈された。



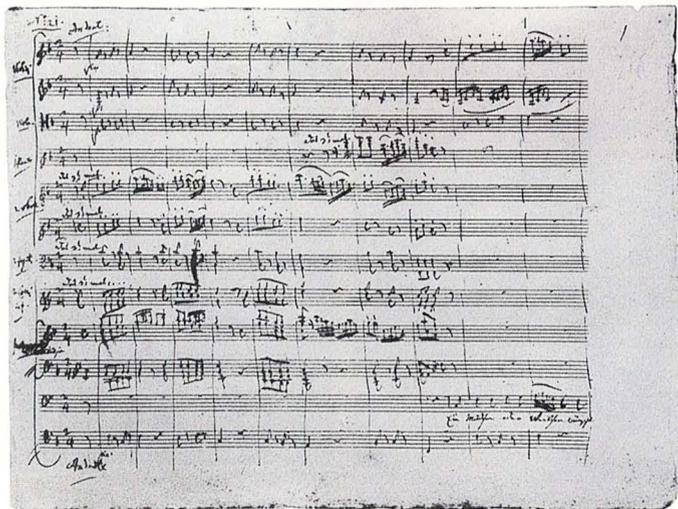
弦楽四重奏曲を演奏する人たち
（18世紀のオーストリア）

モーツァルトの楽譜

自筆譜に秘められた作曲家モーツァルトの姿

モーツァルトの自筆譜は美しいことで知られている。大体において訂正の跡はきわめて少なく、一気に書かれたかのようにまったく修正のないものも少なくない。筆跡もきれいでわかりやすく、流れるように書かれている。しかし、なかにはかなり訂正されているものもあり、また数多くのスケッチや断片、未完のままの自筆譜もあって、苦勞の末に完成された作品もある。

モーツァルトの自筆譜は、時期によって縦長と横長があり、大きさも異なっているが、当時の紙は手漉きで厚く、また透かしがあるのが特徴である。こうした用紙の形態や透かしの種類から、作曲年代の推定も可能になる。また、当時は楽譜を書く度にインクを自分で調合したため、インクの濃淡が生じ、作品がどのように書き進められていったかも推測できる。さらに、年齢とともに変

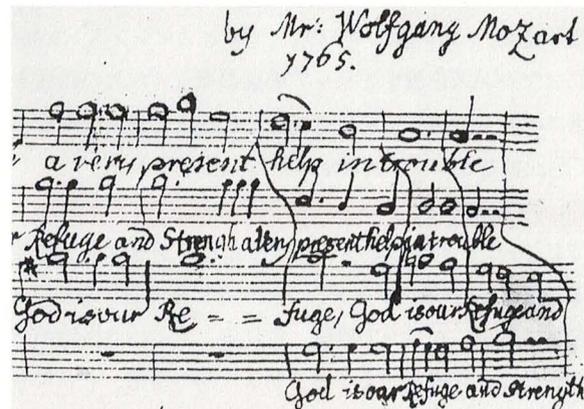


《魔笛》の第2幕パヴェーノのアリアの自筆譜

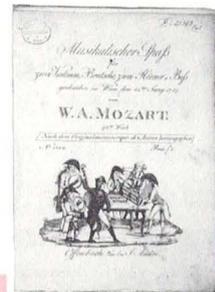
わる筆跡からも作曲年代の推定が可能なのだ。このように、自筆譜は、作品の誕生に関わるさまざまな情報を伝えるもっとも重要な資料といえる。

印刷譜にも情報がいっぱい

自筆譜のほかにも、モーツァルトの音楽が書き記された楽譜には、自筆譜を写譜家が書き写した筆写譜と、印刷譜がある。まだ印刷譜の普及率は低く、演奏などの実用には筆写譜が使われるのが普通であった。自筆総譜からつくられた筆写パート譜など、筆写譜には演奏のときの書きこみなどがあり、自筆譜にはない重要な情報を与えてくれるものもある。また、モーツァルト存命中に出版された初版譜は、彼自身の献辞をとまなうこともあり、作曲の経緯などを知る重要な資料となっている。さらに、当時の印刷譜の表紙には、作品の内容を暗示する版画の挿絵が描かれていることも多く、それもまた興味深い。



モーツァルトが9歳の頃に作曲したモテット
《神は我らの避け所》(K20)の自筆譜



《音楽の冗談》の初版パート譜の表紙

《クレータの王イドメネーオ》

K366

POINT
1

人間感情の描き手モーツァルト

◎ 11歳にして少年の死にゆく様を描く

モーツァルトが極端な人間感情の爆発である怒りを扱った最初のアリアを書いたのは、なんと8歳から9歳にかけての頃であった。大旅行中ロンドンでのできごとだった。その彼が、この西方への旅行から帰郷した翌年、1767年に挑戦したのが劇音楽の分野だった。宗教的ジングシュピール《第一戒律の責務》(K35)を、当時ザルツブルクで活躍していたふたりの作曲家ミヒャエル・ハイドンとアードルガッサーと共作し、その第1部を仕上げる。先輩たちの作曲になる第2部と第3部は失われたが、残された少年の第1部は序曲のほかに8曲からなり、すでに後年の大劇音楽家の片鱗を垣間見せてくれる。

だが同じ年に作曲した学校劇、ラテン語オペラの《アポロとヒヤシンス》(K38)はアポロへの嫉妬ゆえにヒヤシンスを殺すギリシア神話のゼフィロスの物語を扱い、ヒヤシンスが父王エパルスの腕のなかで息絶える有様まで描いてみせるのだ。こんな幼児にして巨匠的なオペラ作曲家がほかにいるだろうか。

◎ モーツァルトのオペラの多様な世界

モーツァルトは、すでに10代で当時のオペラのほとんどのジャンルオペラ・セリア オペラ・ブッフア(宗教劇、学校劇、悲歌劇、喜歌劇、祝典劇、ジングシュピール)を作曲するという奇蹟を実現する。その題材は聖書、ギリシア神話、古代史、あるいは当時の市井せいの話題と豊富だが、物語のなかに登場するさまざまな人間的情绪、それにもとづく行為、行動を音楽的な表現にもたらしめている。そして新しい悲歌劇的表現はモーツァルトがザルツブルクからウィーンに移るきっかけとなったオペラ・セリア《クレータの王イドメネーオ》(K366)によって頂点にもたらされるのだ。

オペラの種類

 オペラの種類	 モーツァルトの作品
 オペラ・セリア オペラ・ブッフアに対する語で、「悲歌劇」と訳される。神話や伝説的な英雄、古典的な悲劇などを題材にしたオペラ。	《ポントの王ミトリダーテ》(1770年) 《ルーチョ・シッラ》(1772年) 《牧人の王》(1775年) 《クレータの王イドメネーオ》(1781年) 《ティート帝の慈悲》(1791年)
 オペラ・ブッフア 「喜歌劇」と訳される。もともとは「ふざけたオペラ」の意味で、オペラ・セリアの幕間の短い喜劇が独立したもの。18世紀のイタリア・オペラに典型的な喜劇的オペラ。	《みてくれの馬鹿娘》(1768年) 《偽りの女庭師》(1775年) 《フィガロの結婚》(1786年) 《ドン・ジョヴァンニ》(1787年) 《コシ・ファン・トゥッテ》(1790年)
 ジングシュピール 「歌芝居」と訳される。18世紀半ば頃からのドイツ固有の民衆的なオペラ。喜劇的な内容でドイツ語で進行する。地のせりふが音楽のあいだに挟まれてストーリーが展開されるのが特徴。	《バステアンとバステイエンヌ》(1768年) 《後宮からの奪還》(1782年) 《魔笛》(1791年)

作曲年・地



1781年(24歳)
ミュンヘンにて

POINT
2

そして傑作オペラの森

◎ 娯楽消費財を超えて作曲される個性輝やく芸術としてのオペラ

オペラ史はユニークな展開、発展をモーツァルトそのひとの名で果したものだ。その第1作ともいべき作品が、オペラ・セリア《クレータの王イドメネーオ》である。それはザルツブルクの隣国バイエルン選帝侯領の首府ミュンヘンで1781年の謝肉祭の折に上演されたもので、モーツァルトは前年の11月に同地に着き、ザルツブルクに在住するヴァレスコ師なる神父に台本を依頼し、ミュンヘンに移ってから父レーオポルトを介して、さまざまな注文をつけながら作曲をつづけている。

マンハイムとミュンヘンでの旧知の老テノール歌手アントーン・ラーフをタイトル・ロールのイドメネーオに配し、オペラに不慣れな教会歌手ヴィンチェンツォ・ダル・プラートを息子イダマンテ役として、この悲歌劇は宮廷劇場、いわゆるレジデンツテアターで1月末に上演されている。

◎ オペラ・セリアを超える畢生の大作悲歌劇《イドメネーオ》

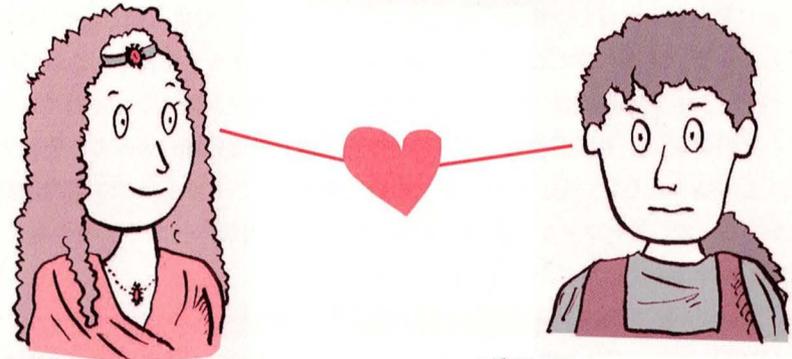
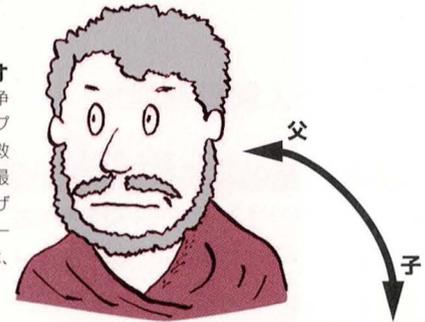
バロック時代に栄えた悲歌劇、オペラ・セリアは1780年代に入るあたりで、すでに危殆きたいひんに瀕していた。大先達のグルックがその瀕死の悲歌劇に活を入れていたが、モーツァルトの《イドメネーオ》はグルックと異なって、定型的な番号オペラ、叙唱や詠唱や重唱による劇の進行、そしてオーケストラや合唱の充実した使用を通して、このジャンルの究極的完成を実現したものであった。その緊張した劇的展開、それぞれのアリアや重唱の表現の密度は、オペラがただ単なる慰楽を目指す機会的なジャンルであることをやめて、一回的、およそ無二の芸術作品であるという新しいオペラの在り方を端的に打ちだしている。

番号オペラ…それぞれの歌唱の曲の並び順に番号がつけられている伝統的なイタリア・オペラの形式のこと。叙唱…レチタティーヴォ。語る調子で歌われる。詠唱…アリア。独唱で歌われる。

《イドメネーオ》はどんなオペラ？

主な登場人物

イドメネーオ
クレータ国の王。トロイア戦争からの帰途嵐に遭うが海神ネプチューンに誓いを立てることで救われる。その誓いとは上陸して最初に出会った者をいけにえに捧げるというもの。しかしイドメネーオが上陸して最初に出会うのは、息子イダマンテだった。

**イーリア**

トロイアの王女。クレータで捕虜となっている。イダマンテがいけにえになると知ると彼を愛する彼女は身代わりになると申し出る。この愛が示されると、突然神託の声が響きわたり、イダマンテは王位につきイーリアはその妃になるよう宣言される。

イダマンテ

イドメネーオの息子。敵国の王女イーリアと恋人同志。突然ふりかかった不幸に翻弄され、みずからがいけにえになる覚悟を決めるが、イーリアとの愛によって神に助けられ、最後は王位につく。

聴きどころ

序曲…海の嵐と悲劇的なストーリーを暗示するような厳粛で激しい音楽

CD
2-6

第2幕イドメネーオのアリア…「私の胸のなかにも海があり、荒れ狂っている」と、息子を捧げなければならない苦悩を歌うアリア etc

《フィガロの結婚》

CD
2-7

K492

POINT
1

新しい人間喜劇誕生

コンメーディア・ディヴィーナ コンメーディア・ウマーナ

◎く 神 曲 から く人間喜劇へ

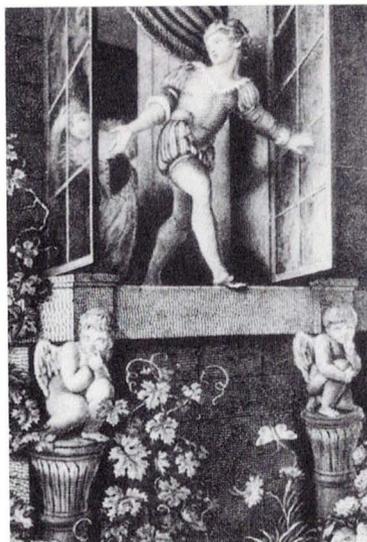
悲歌劇《イドメネオ》では神々の苦悩や喜びが描かれる。父親イドメネオが海神ポセイドンとの誓約に苦しみ、息子イダマンテはその誓約を守ろうと敢然と死に立ち向かい、救済はその志をよとした神からもたらされる——。しかし喜劇にはこうした神が登場することはない。すべては人間自身の判断、そして決意、決断にゆだねられる。モーツァルトがウィーンで作曲した最初のオペラはドイツ語喜歌劇(ジングシュピール)の《後宮からの奪還》(K384)であった。この歌劇は、人間感情のさまざまな様態をみごとな音楽によって、委細を尽くして描きだしている。ウィーンでの最初のオペラ、しかもドイツ語の作品ということで、モーツァルトはいくつかのアリアでの表現の仕方やその根拠を、父親レーオポルトに宛てた手紙で詳しく説明している。

◎イタリア語傑作喜歌劇《フィガロ》見参

《後宮》はヨーゼフ2世が推し進めてきた宮廷劇場でのドイツ語オペラ上演活動の最後の出し物だった。その後宮廷劇場はふたたびイタリア語オペラの上演、イタリア人作曲家の活躍の場となる。いきおい、モーツァルトの出番はなかなか回ってこなかった。しかし彼は準備を怠らず、イタリア語台本を100本もとり寄せたり故郷のヴァレスコ師に新作を依頼したり、機会を窺っていた。

その彼の前に立ちあらわれたのが、イタリア人詩人ロレンツォ・ダ・ポンテで、彼はイタリア人作曲家たちのあいだでひっぱりだこだったが、モーツァルトのために、作曲家がみつけたフランス喜劇詩人ボーマルシェの原作『フィガロの結婚』のオペラ化を引き受けてくれたのだ。

《フィガロ》の舞台スケッチ



アルマヴィーヴァ伯爵婦人の部屋から逃げるケルビーノ



伯爵婦人に変装したスザンナが言い寄るフィガロを平手打ちする

イタリアの人気台本作家ダ・ポンテ



ダ・ポンテ

イタリアの詩人、台本作家。ヨーゼフ2世の宮廷詩人としてイタリア語オペラの台本を提供し、成功をおさめた。モーツァルトとは1783年に出会ったが、以来お互いの生涯で欠かせない重要な存在となる。モーツァルトの3つのオペラ、《フィガロの結婚》《ドン・ジョヴァンニ》《コシ・ファン・トゥッテ》の台本はダ・ポンテの代表作ともなった。

作曲年・地



1786年(30歳)
ウィーンにて

POINT
2

きたい
ダ・ポンテ=モーツァルト、稀代の共同制作

◎《フィガロ》のユニークな原作

ボーマルシェとの出会いはオペラ史を飾る貴重な出会いだった。時あたかもフランスでは体制批判、貴族批判の嵐が近づきつつあった。フランス国王ルイ 16 世に末妹マリー・アントワネットを嫁がせた皇帝ヨーゼフ 2 世も、革命思想に通じる作品の上演に神経質だった。そうした障害を乗り越えて、このオペラは 1786 年 5 月 1 日に上演され、モーツァルトはようやくウィーンでのイタリア語オペラの宮廷劇場（ブルク劇場）でのデビューを果たしたのだ。

ボーマルシェの原作は 3 部作、『フィガロの結婚』はその第 2 作に当たり、前作『セビリヤの理髪師』でアルマヴィーヴァ伯爵が市民の娘ロジーナと結ばれるのに骨を折った理髪師兼外科医のフィガロが、今度は伯爵の浮気をこらしめるという筋書きではある。

◎ 現世の愛のさまざまな様態を歌う

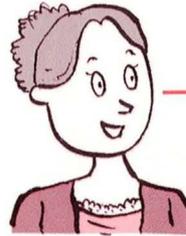
現世の愛ははかなく、永続性に乏しい。伯爵は夫人ロジーナの心を踏みじりに、フィガロの婚約者スザンナを誘惑する。小姓ケルビーノは女性たちに心をときめかし、とりわけ伯爵夫人に恋こがれてやまない。伯爵夫人は夫の愛が失われたのを嘆き、愛の悲しみを切々と歌う。フィガロが実の息子とは露知らず、マルチェリーナは貸金と引き換えに彼を結婚の相手として、息子を追いつめる。

狂おしい一日の流れのなかで、数々の思い、愛、憧れ、憎しみ、悲しみ、そして喜びが交錯するが、そのそれぞれがモーツァルトの音楽によって、この上なく美しく、感動的に、描かれ、歌われていく。

こうしてこのオペラは音楽によって打ち立てられた、悲しいまでに高く、そして奥深い愛の記念碑となったのだ。

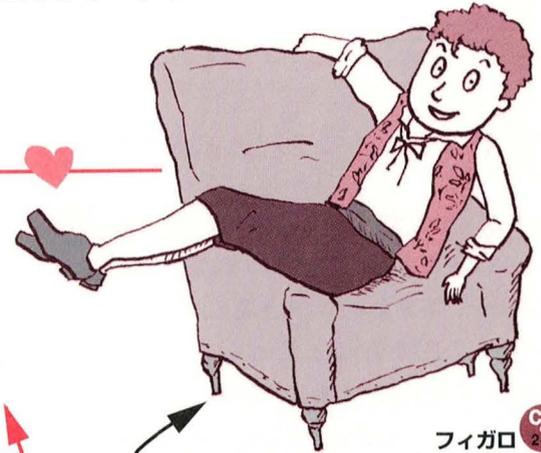
《フィガロ》はどんなオペラ？

主な登場人物



スザンナ

アルマヴィーヴァ伯爵家の小間使いでフィガロの婚約者。明るく可愛らしい。好色な伯爵に狙われるが、機転をきかせてフィガロたちと一緒に伯爵をこらしめる。



フィガロ

アルマヴィーヴァ伯爵の従僕。婚約者のスザンナに気のある伯爵が一度は廃止された〈初夜権〉を復活させようとしているのに気づき、その計画を阻止すべく知恵をしぼる。第 1 幕終りでケルビーノに向かって「もう飛ぶまいぞ、この蝶々」と歌うアリアは、快活で機敏なフィガロの性格をあらわしている。



アルマヴィーヴァ伯爵夫人

本名はロジーナ。伯爵からの熱いプロポーズで結婚したのに、夫の心は自分から離れてしまったことを憂えている。第 3 幕のアリアで「楽しい思い出はどこへ」と切ない思いを歌い上げる。



アルマヴィーヴァ伯爵

『セビリヤの理髪師』ではロジーナ（アルマヴィーヴァ伯爵夫人）に首っただけで熱烈な恋の末に結ばれたが、倦怠期に入り小間使いのスザンナを狙っている。



ケルビーノ

伯爵家の小姓。女性に興味をもつ思春期の男の子。伯爵夫人に恋をしている。第 2 幕では「恋とはどんなものかしら」と伯爵夫人への憧れを愛らしく歌う。

雇い主

夫婦

CD
2-7

《魔笛》

CD
2-8

K620

POINT 1 とき **お伽オペラとメイスン・オペラの合体**

◎《ダ・ボンテ・オペラ》を超えて

モーツァルトの《フィガロの結婚》によってイタリア語オペラは因習的な歌劇の枠を、限界を一気に乗り越え、以後のオペラの模範となる〈レパートリー・オペラ〉の最初の作品となった。〈レパートリー・オペラ〉とは、オペラが特定の時期、ひとたちのために、祝祭や祝典や、特別な機会や目的のために書かれ、上演されたあとはそのままお蔵入りするか捨てられ、忘れ去られる消費財であることをやめて、初演のあとも、別の劇場でも取り上げられ、時代を越えてくり返し上演がつけられていくオペラで、また多くの劇場がいつでも舞台にかけられるように用意している作品のことである。

これはつづく《ドン・ジョヴァンニ》、《コシ・ファン・トゥッテ》でも同様で、時代、時期によって、また国による趣向のちがいで、人気に差異があれ、恒常的に舞台を飾りつけてきたものであった。

◎ 民衆の好みに合うドイツ語オペラの究極の姿

18世紀の後半、ドイツの地では民衆たちが自国語で理解でき、また楽しめるドイツ語によるオペラが次第に盛んになっていった。ウィーンではそうした民衆的なオペラ、いわゆる〈ジングシュピール〉(歌芝居)が、郊外の劇場で上演されていた。

そのひとつがウィーン市城外南の方向にあったヴィーデン劇場である。モーツァルトはこのヴィーデン劇場を本拠地として活躍していた興行師、俳優、そして歌手のエマーヌエル・シカネーダーの申し出によって《魔笛》(K620)を作曲したのだ。

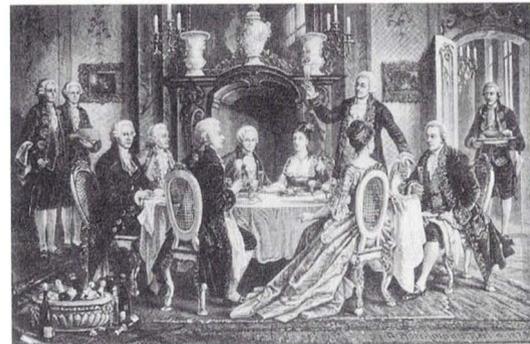
モーツァルトの多才な友人シカネーダー



初演でパパゲーノに扮するシカネーダー。多才で俳優、歌手、台本作家という多くの顔をもった劇場興行主。1780年に一座を率いてザルツブルクを訪れた際にモーツァルトと出会い、その後親しく交流をつづけた。モーツァルトのフリーリメイスンの盟友でもあり《魔笛》の作曲はシカネーダーの依頼による。台本はシカネーダー自身が書き、初演のパパゲーノ役を歌った。



《魔笛》の表紙



シカネーダー邸でのモーツァルト



1791年(35歳)
ウィーンにて

POINT
2

東洋の王子の冒険、そして秘密の儀式の世界

◎ 真面目な筋とコメディが混在する不思議なオペラ

登場するのは日本の狩衣を身に着けた王子。夜の女王に見込まれて、悪魔に誘拐された姫を救出に向かう王子は、その悪魔ならぬ高僧の導きで、大地、沈黙、火と水の試練に打ち勝ち、その美しい女性と結ばれるという物語。彼に従う鳥刺し男は滑稽な失敗をくり返しながらも、似合いの娘とめでたく結婚できるという面白可笑しい喜劇的な要素も加わり、一見メチャクチャな筋の首尾一貫性を欠いた作品と思われてきた。

◎ フリーメイソンの儀式と思想と

このドイツ語オペラには、当時盛んだった御伽噺による歌芝居（ジングシュピール）とモーツァルトがウィーン時代に帰依したフリーメイソン結社の儀式の音楽的表現の両方が混在し、融合しているという特徴がある。序曲から劇の本体にまでさまざまなフリーメイソン結社の象徴（たとえば**3の数**）が音楽的表現にもたらされている。夜の女王によって担われる夜や闇、ザラストロによってあらわされる昼と光の対立は、後者の勝利によって解決をみるものの、モーツァルトは王子タミーノや女王の娘パミーナにだけ照明を与えるのではなく、また鳥刺しパパゲーノとその相手役のパパゲーナに親近感を覚えさせる陽気な姿を描くばかりでなく、対立的な存在である夜の女王の姿にも、またムーア人の召使モノスタートスの存在にも同情心をもって印象的な音による彫像を刻んでいる。

近年、このオペラの御伽噺の側面とメイソンの側面が対立的な関係にあるのではなく、両者が不思議な統一、融合を実現しているとの解釈が立ちあわられている。両者の神秘的な側面は矛盾なしに両立するのだ。

3の数…序曲の途中で3和音の連打があったり、登場人物の僧侶、侍女、奴隷、童子がすべて3人で登場したりと、《魔笛》には「3」という数字がしばしば使われている。

《魔笛》はどんなオペラ？

主な登場人物

パミーナ

夜の女王の娘。ザラストロにさらわれている。城内に忍びこんだパパゲーノにより、まだ見ぬ青年（タミーノ）が自分を愛し助けに向かってくれていると聞き、心をときめかせる。

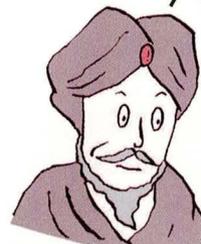


娘

誘拐

タミーノ

王子。夜の女王の娘パミーナの絵姿の美しさに一目惚れし、「なんと美しい絵姿」とアリアを歌う。パミーナを助けるための厳しい試練を乗り越え、最後には彼女と結ばれる。



ザラストロ

エジプトの高僧。前半では、夜の女王の娘パミーナを誘拐した悪者として登場するが、実はそれは若者たちの試練のための行為であることが明らかになり、夜の女王の立場との鮮やかな逆転をみせる。



母

夜の女王

CD
2-8

前半は娘をさらわれて悲嘆にくれる母として登場。後半では実はザラストロの邪魔をしようとする悪者であったことが明かされ、最後は大陽の閃光で滅ぼされてしまう。第2幕で「地獄の復讐がわが心に煮えかえる」とザラストロへの復讐を誓うアリアは有名。

パパゲーノ

パパゲーノの魔法の鈴によってあらわれるが、パパゲーノとふたりで「パ、パ、パ」と楽しい二重唱を歌う。



パパゲーノ

個性的で親しみのあるキャラクターの鳥刺し。恋人と出会うことを夢みてタミーノとともに旅に出る。最後には可愛い恋人を得る。

夜だち

モーツァルトのオペラの射程

モーツァルトのオペラの奇蹟的展開

すでに述べたようにモーツァルトは生涯の前半にあって、故郷ザルツブルクでばかりか、ウィーンでも、ドイツ各地でも、パリやロンドンでも、さまざまなオペラに触れ、そしてオペラ発祥の地イタリアでそのオペラ創作の歴史を早くも完結するかに思える。そしてその先にザルツブルク期を締めくくるようなオペラ・ブッフアの傑作《偽の女庭師》(K196)があり、そして《イドメネーオ》がくる。しかし、ウィーン時代の傑作オペラを締めくくるのは、オペラ・セリアに属する祝典劇の《ティート帝の慈悲》(K621)なのであった。近年このオペラにも照明が当てられてきているのは、おそらくこの作品がギリシア古典古代の劇音楽の近代的復活をみごと成し遂げているためではなかろうか。

現在のモーツァルト・オペラ演出の誤謬を批判する

現在、とりわけヨーロッパを席捲しているのはこの作曲家の劇作品に対する根拠に乏しい読み換えの流行であろう。彼のオペラは上演をもって完結する舞台芸術である。だが、モーツァルトのオペラの台本と音楽とは永続性をもった不変の文化財であろう。そうした原典(テキスト)を尊重しないで、いたずらな変更が演出面で際立って目につく今日この頃である。

原典の深く真摯な解説と正鵠を射た解釈は、いたずらに奇をてらう演出とは別物であり、異質なものであろう。ちなみに〈モーツァルト生誕 250 祝年〉の 2006 年にはザルツブルクの夏の音楽祭で彼の全音楽劇作品が取り上げられたが、その多くはまったく笑止千万な演出を観客に押しつけているのが実態といえよう。

人間の行為と感情の機微に触れたモーツァルトの劇作品の表現世界を、優れた歌手や指揮者とともに感動的に提示してくれる真摯な演出家の登場に期待しよう。

もっと知りたい！ モーツァルトのオペラ



《戴冠式ミサ》

ハ長調 K317

POINT 1 みやい **美しい響きで神の宮居を飾る**

◎ 教会音楽家モーツァルトは多作

モーツァルトはカトリック教会音楽家であった。この事実は、彼の死後忘れられるか、少なくとも軽視されていく。だが、モーツァルトはドイツの教会国家であったザルツブルク大司教領の生まれであったし、父親はその大司教に仕える音楽家として、数々の教会作品を書き残している。その息子モーツァルトは父親の指導のもと、わずか9歳のときロンドンでモテットを書き、その大旅行の帰途、パリでは《キリエ》を作曲している。

ザルツブルクで、彼は数々のミサ曲、そのほかの教会作品を生みだしていく。大司教の司式でとりおこなわれるミサ曲やそのミサ曲を構成する個々の楽章、リクニエ ヴェスベレ連祷や晩課そしてオラトリオほかの宗教劇など、およそ50曲を越える。なかでも名高いのが《戴冠式ミサ》(K317)である。

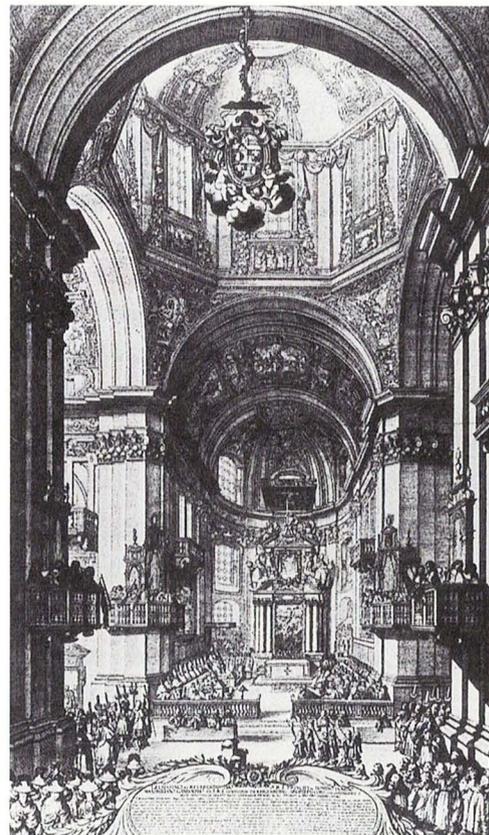
◎ 教会音楽家モーツァルトへの誤解の数々

モーツァルトの教会作品は、死後いくつもの誤解に曝されてきた。彼のミサ曲は世俗的な音楽と変りなく、宗教性に乏しいという。これは古典派の教会作品に与えられた19世紀の一般的な評価でもあった。彼は大司教のもとを離れると教会作品を書かなくなる。これは信仰心の欠如を示すものという。

確かにモーツァルトはウィーン時代に入るとわずか2曲の未完のミサ曲と小曲のモテット1曲しか残してはいない。だが、当時一般に職業的な教会音楽家にこそ典礼用の作品の作曲がゆだねられ、フリーな音楽家モーツァルトに教会用のミサ曲の作曲がゆだねられる可能性はなかった。モーツァルトの教会作品はそうした制約や条件のなかでみごとに仕上りをみせている。

ミサ曲とは？

ミサ曲とは、ローマ・カトリック教会の典礼（ミサ）にともなう声楽曲のこと。ミサの典礼文には教会暦によって変わる固有文と、毎回必ず用いられる通常文とがある。ミサ曲は通常文のなかの以下の5つのテキストをもとに作曲される。



ザルツブルク大聖堂の内部。1680年頃。ザルツブルク時代のモーツァルトはこの大聖堂でのミサのために、ミサ曲やそのほかの教会作品を数多く作曲した。《戴冠式ミサ》もここで初演されている。

ミサ曲の構成

キリエ（あわれみの讃歌）

グロリア（栄光の讃歌）

クレド（信仰宣言）

サンクトゥス／
ベネディクトゥス
（感謝の讃歌）

アニュス・デイ
（平和の讃歌）

5つのテキストに
作曲されるのが基本

モーツァルトのミサ曲の代表作品《戴冠式ミサ》は上記の基本通りに作曲されているが、当時ザルツブルクでは大司教の命により典礼音楽にかかる時間は45分以内におさめなければならなかったため、モーツァルトのミサ曲のほとんどは表面的には短い略式のミサ（ミサ・プレヴィス）のかたちをとっている。

作曲年・地



POINT
2

《戴冠式ミサ》の美しさ

◎《戴冠式ミサ》の名称には誤解も

この曲は1779年に書かれ、長いこと《戴冠ミサ》と訳され、呼ばれてきた。郊外のマリア・プライン巡礼教会の聖母子像が《戴冠のマリア》と呼ばれ、この教会で初演されたと信じられてきたからである。

近年、《戴冠式》の名称はこの曲が後年レーオポルト2世の神聖ローマ皇帝としての戴冠式ないしボヘミア王としての戴冠式で用いられたためと修正されている。そして初演は大聖堂でおこなわれたものと考えられる。

◎宗教性と世俗性の超越さえ響きのなかに

《戴冠式ミサ》は八長調の堂々とした響きを響かせ、次の年1780年に書かれたもう1曲の《ハ長調ミサ》(K337)とともにザルツブルク期のミサの代表作となっている。

その響きは古典派のいわゆるホモフォニックな様式を中心にいたるところに美しい旋律を配し、またその旋律がモーツァルトのオペラのアリアや重唱曲の艶やかさをあらわしていることから19世紀の評者からは教会音楽史上もっとも墮落し、世俗化された実例とまで語られている。その例としてとりわけこの曲の《アニュス・デイ》(世の罪を贖^{あがな}い給う神の小羊)が挙げられ、この楽章の主旋律が《フィガロの結婚》の伯爵夫人のアリア(第3幕20曲)の旋律と酷似していることから、それがモーツァルトの教会作品の世俗性の証拠とさえ論じられたことがあった。だが最初にミサ曲の美しくも超絶した感動的なキリストの許しの旋律があり、それが後年のオペラでは伯爵夫人の悲しさあふれる許しの音楽となるというモーツァルトの音楽の特性こそ私たちは讃嘆し、絶讃すべきではなからうか。

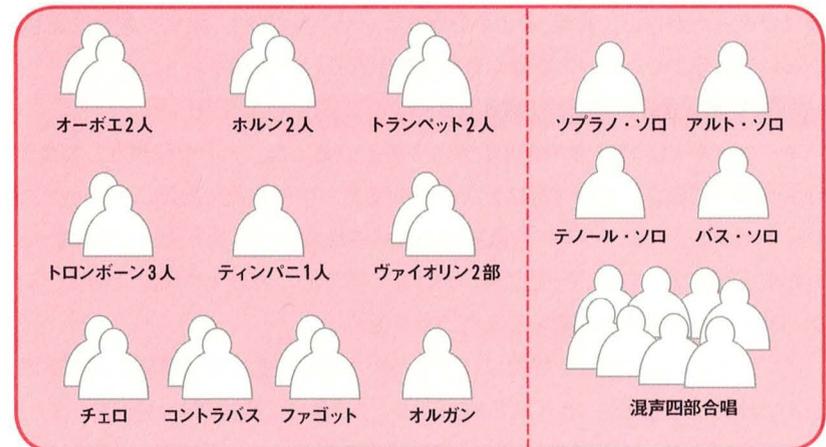
オラトリオ…宗教的な音楽劇のこと。ホモフォニック…ひとつの声部が主旋律となり、ほかの声部が和声的に伴奏をつけるような形式のこと。

《アニュス・デイ》の歌詞の意味は？

CD
2-9

<i>Agnus Dei</i>	アニュス・デイ (平和の讃歌)
<i>Agnus Dei</i> <i>qui tollis peccata mundi;</i> <i>miserere nobis.</i>	神の小羊 世の罪を許したもう主よ、 我らをあわれみたまえ。
<i>Agnus Dei</i> <i>qui tollis peccata mundi;</i> <i>dona nobis pacem.</i>	神の小羊 世の罪を許したもう主よ、 我らに平安を与えたまえ。

大きな編成の《戴冠式ミサ》



《戴冠式ミサ》は、この曲以前に作曲されていたミサ曲に比べてかなり大きな規模をもつ。ミサ曲の時間は短くしなければいけないという規制があるなかで、このミサ曲は、豊かなオーケストラの響きと美しいメロディの歌声が混じり合った、至福の世界をつくりだしている。

《レクイエム》

CD
2-10

二短調 K626

POINT
1

《二短調レクイエム》の未完了

◎ウィーン時代の教会作品の少なさ

ザルツブルク時代の教会作品の豊富さに比べて、モーツァルトはウィーンに定住して以来、この分野での作曲の筆を絶ったかにみえる。彼は1783年のザルツブルクへの帰郷時に、聖ペテロ大修道院に、未完のままほかの部分に旧作ミサ曲から補って《ハ短調ミサ》(K427)を奉納しているが、最後の年に小モテット《アヴェ・ヴェルム》(K618)を作曲しているだけで、ほかに教会作品は見当たらないことも確かである。

しかし、これは、既述のように、彼がウィーンでこの種の音楽を作曲する立場になかったからだ。当時、およそいかなるジャンルの曲も、注文や命令により、あるいは自分でコンサートを催すために書かれるのが慣例であった。

◎《レクイエム》の作曲を依頼される

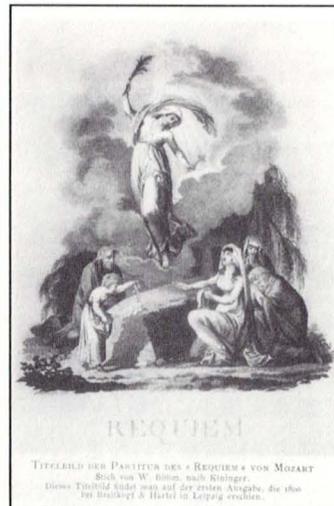
モーツァルトは1791年の後半、かなり多忙であった。大きな仕事としてはシカネーダーに頼まれての《魔笛》の仕事があり、その作曲の合間にプラハでのレーオポルト2世のボヘミア王戴冠式のための祝典オペラ《ティート帝の慈悲》の作曲上演が入ったが、その上、思いがけなく死者のためのミサ曲、いわゆる《レクイエム》の作曲依頼が舞いこんだためである。

《レクイエム》作曲は、実際にはプラハから戻り、そして《魔笛》の初演が済んでから、すなわち10月はじめからおこなわれた。《魔笛》は評判となり、上演がつづくが、11月後半に入り、彼は体調を崩し、ベッドに就いて下旬にはふたたび起き上がることができなくなった。こうして翌12月5日、ついに死が訪れるが、《レクイエム》はそのまま未完で残されることになる。

死者のためのミサ曲、《レクイエム》

モーツァルトの《レクイエム》

- I イントロイトゥス (入祭唱)
- II キリエ (あわれみの讃歌)
- III セクエンツィア (続唱)
 - 1 ディエス・イレ (怒りの日)
 - 2 トゥーバ・ミールム (奇しきラッパの響き)
 - 3 レックス・トレメンデ (恐るべき大王よ)
 - 4 レコルダレ (思い出したまえ)
 - 5 コンフターティス (呪われた者)
 - 6 ラクリモサ (涙の日)
- IV オッフェルトリウム (奉献唱)
 - 1 ドミネ・イエス (主イエス・キリスト)
 - 2 ホスティアス (讃美のいけにえと祈り)
- V サンクトゥス (感謝の讃歌)
- VI ベネディクトゥス (感謝の讃歌)
- VII アニウス・デイ (平和の讃歌)
- VIII コムニオ (聖体拝領唱)



モーツァルトの《レクイエム》の初版の表紙

作曲年・地



1791年(35歳)
ウィーンにて

モーツァルトが書くことのできたのは、上記のうち《イントロイトゥス》全部、《キリエ》《セクエンツィア》《オッフェルトリウム》の声と低音の部分のみ(《ラクリモサ》は8小節で中断)であった。

POINT
2

《レクイエム》、死後の運命

◎《レクイエム伝説》の200年

モーツァルトの未完の《レクイエム》は、彼の死後、助手のフランツ・クサーヴァー・ジュースマイヤーの手で翌1792年に完成され、依頼主のフランツ・フォン・ヴァルゼック＝シュトゥパハ伯爵に手渡された。コンスタンツェが筆写させた総譜は19世紀に入ったところで出版され、ジュースマイヤーの補筆の拙劣さが批判の対象となった。その後もこの作品がモーツァルトののではないとの疑義が提起された。このモーツァルトの〈白鳥の歌〉は19世紀には教会のほか公開の演奏会で取り上げられるほとんど唯一の教会作品となった。

20世紀後半には新しい補筆の試みもいくつかおこなわれ、ジュースマイヤーの拙劣な補筆部分の修正や、モーツァルトが残したアーメン・フーガの断片などを使って〈怒りの日〉の最終部分を補う試みもおこなわれている。

◎《レクイエム》未完性の意味

モーツァルトの最後の作品が《レクイエム》で、しかもそれが完結されず、助手の手によって補筆完成されたことは、彼の生涯の在り方、そしてこの《レクイエム》のレクイエム性を端的に物語っている。〈レクイエム〉とは死者の魂が煉獄れんごくにあって苦しみに耐え、天国へと導かれることを願う生者の切なる希求ききゅうを歌い、音化する特別なミサ曲である。モーツァルトは生者としてこの《レクイエム》を書き始め、そしてそれを歌い終えずして、死者となり、その祈り、切なる生者の願いを助手の補筆に託したのであった。

このような〈レクイエム〉はミサ史上、そして音楽史上、まさに唯一の実例であろう。こうして、モーツァルトはおのれのレクイエムを他者、自分の死を悼む生者の行為によって完結させたのである。

アーメン・フーガ…《セクエンティア》終結部分〈アーメン〉のために書かれたと思われるフーガの断片（18小節）の自筆譜。1961年に発見された。



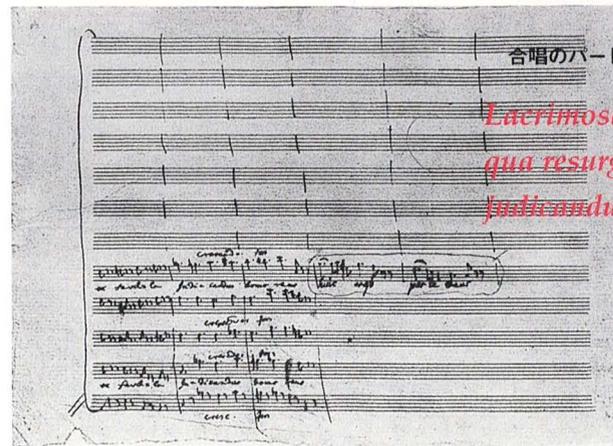
モーツァルトの《ラクリモサ》の自筆譜



残された2枚の自筆譜



弦によって2小節間の序奏が奏されると、美しく悲しい〈ラクリモサ〉の合唱が始まる。合唱のパートには〈ラクリモサ〉の歌詞が書きこまれている。この曲の8小節目で、モーツァルトは筆をおいた。



合唱のパートに書きこまれた歌詞

*Lacrimosa dies illa,
qua resurget ex favilla
judicandus homo reus:*

その日こそ涙の日、
罪ある者が
裁きを受けるために
灰のなかから
よみがえる日。

モーツァルトの死生観は響きの只中にただなか

モーツァルト、死生観を語る

モーツァルトは生涯およそ 400 通におよぶ手紙を残した。そこには死について語る印象的な手紙がいくつか見出される。なかでも重要なのは 1778 年 7 月 3 日付の父親レーオポルトに宛てた手紙と、1787 年 4 月 4 日付の同じく父親宛ての最後の手紙であろう。2 通の手紙のなかで、彼はくり返し私たちの運命を左右し、私たち人間が全幅の信頼、帰依を表明すべき神の摂理について語っている。
(→p131)

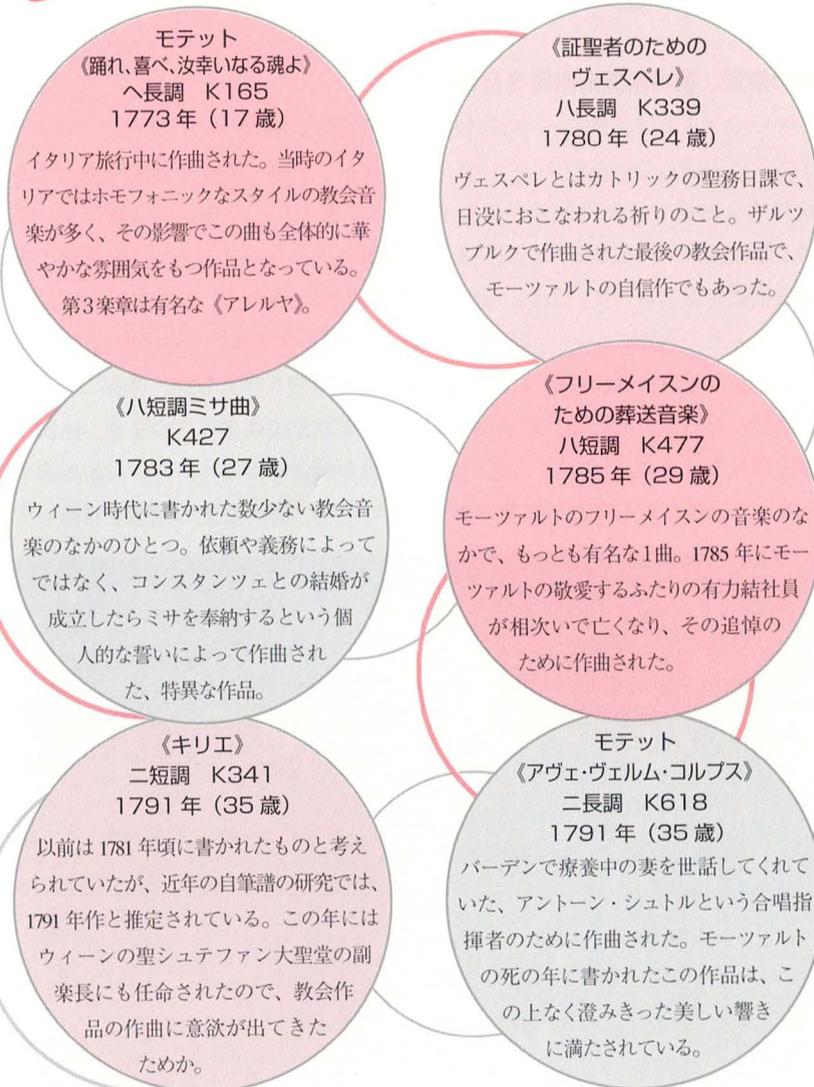
後世はしばしばモーツァルトの宗教性、カトリック性について疑問を投げかけてきた。だが、そのほとんどがこの問題をめぐっては自分自身の宗教観ないし反宗教観をモーツァルトのひとと音楽とに投影し、おのれの思想、あるいは信仰を語っているにすぎない。この問題は、そうではなくモーツァルトにとって信仰とはなんなのかを、まさにモーツァルトに則して追究すべきものであろう。

モーツァルトにおけるカトリック性とフリーメイソン思想

モーツァルトはある意味では啓蒙されたカトリック者であった。彼の手紙に散見される信仰や思想は、私たちのそれに従ってではなく、彼自身のものとして考究すべきであることはすでに述べたが、モーツァルトがウィーン時代に加盟したフリーメイソン結社の問題も、18 世紀に誕生し、彼の時代のウィーンで盛んであったこの結社の実態と、当人の結社思想への共鳴の実相とに照らして受けとめるべきであらう。

モーツァルトの時代以降、フリーメイソン結社の活動は、以後の政治・経済そのほかの活動の変貌ともなって変質してきていることを勘案しつつ、モーツァルトのフリーメイソン音楽と教会作品の関係についても、確実にフリーメイソンだったアルフレート・アインシュタインの解釈、すなわちカトリック信仰よりメイソン思想を重視する捉え方を含めて、もう一度検討をおこなうべきであらう。

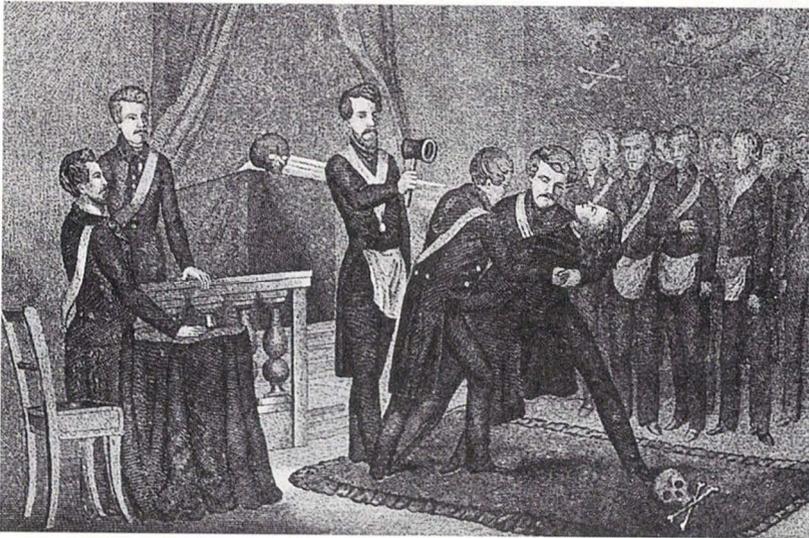
もっと知りたい！ モーツァルトの宗教曲



モーツァルトとフリーメイソン

魂の殿堂、智の殿堂の建設を目指して

モーツァルトは、ウィーンに移住して4年目の1784年12月14日、フリーメイソンに入団した。このフリーメイソンは自由・平等・博愛を基本理念とする精神的な組織で、18世紀はじめにイギリスで誕生し、啓蒙思想と結びついて瞬く間に欧米中に広まった。現在も各界の著名人などを会員として世界中で活発な活動をおこなっているが、その実態は明らかにされず、秘密結社と呼ばれている。その起源については諸説あるが、「フリーメイソン（自由な石工）」という名から考えれば、起源は、租税免除などの特権を与えられ、自由に諸都市を遍歴した石工^{メイソン}たちの組合にあると考えるのが自然であろう。つまり、秘密の参入儀礼や「徒弟」「職人」「親方」という位階制度をつくり、合い言葉や暗号を使って活動した石工たちにあやかり、魂の殿堂、智の殿堂の建設を目指して



誕生したのが精神的なフリーメイソンであると考えられるのだ。

フリーメイソンのエリートでもあったモーツァルト

モーツァルトが入会した頃、オーストリアのフリーメイソン結社はちょうど全盛期にあった。当時ウィーンには8つの分団(ロッジ)があったが、彼は「善行」という分団に入団した。活動に積極的だった彼は、翌年、ちょうどウィーンにきた父も、敬愛していたヨーゼフ・ハイドンもこの結社に入団させている。モーツァルト自身は、入団からおよそ4カ月という異例の速さで「親方」にまで昇進する。また《結社員の旅》(K466)や《フリーメイソンのための葬送音楽》(K477)など、この結社のための作品を集中的に書いている。しかし、その年の暮にヨーゼフ2世が「フリーメイソン勅令」を發布し、勢力の抑制を図ったため、ウィーン^{おとぎばなし}の分団はふたつに統合され、次第に活動が衰退していった。

フリーメイソンの思想を音楽で表現

モーツァルトは「新・戴冠した希望」分団で活動をつづけたが、フリーメイソンのための作品は、彼の生涯最後の年に集中して書かれている。その代表傑作が《魔笛》である。このオペラは、御伽噺的な要素やコミカルな要素を入

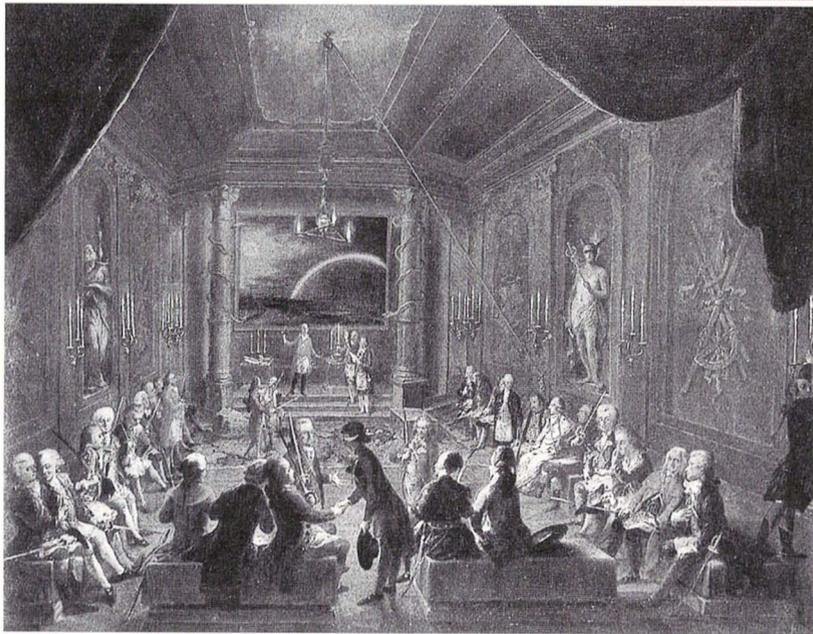
←フリーメイソンの「親方」への昇任式の様子。19世紀半ばに製作された銅版画。フリーメイソンの、沈黙の試練、死の試練という世界は、モーツァルトの《魔笛》のなかにもあらわれている。



1807年にウィーンでつくられたモーツァルトの肖像。まわりにはフリーメイソンを象徴するもの(頭の上の光、スフィンクス、ライオン)が描かれている。

れ、フリーメイソンの参入儀礼や思想を、試練を経て愛を成就させる男女の愛の物語というかたちで象徴的にあらわしている。モーツァルトは、このオペラで、衰退の傾向にあったフリーメイソンの思想を讃え、復活を願ったのではないだろうか。モーツァルトは、ザルツブルク時代からフリーメイソンの人びとと関わりをもち、《歓喜に寄す》(K53) や《おお、聖なる絆よ》(K148) などの作品を書いている。しかし、彼がとりわけ晩年にフリーメイソンに深く傾倒したのは、当時の貴族社会の矛盾を強く感じ、未来に自由・平等・博愛の社会が実現することを切に願っていたからに違いない。

フリーメイソンの集会の様子



Part 2

モーツァルトの事件簿

「神童」といわれた幼少期から、30代半ばにウィーンで没するまで、モーツァルトはいくつもの奇跡をおこしつづけ、数えきれないエピソードを残した。しかし、その天才も私たちと同じように笑い、泣き、喜び、悲しみながら、人生を駆け抜けたひとりの人間だった。

神に愛されし者・アマデウスの誕生 0歳～

◎ 聖人にあやかってつけられた名前

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは、1756年1月27日午後8時、ザルツブルクのゲトライデガッセ9番地に、父レーオポルト・モーツァルトと母マリア・アンナ・旧姓ペルトウルの末子として誕生した。

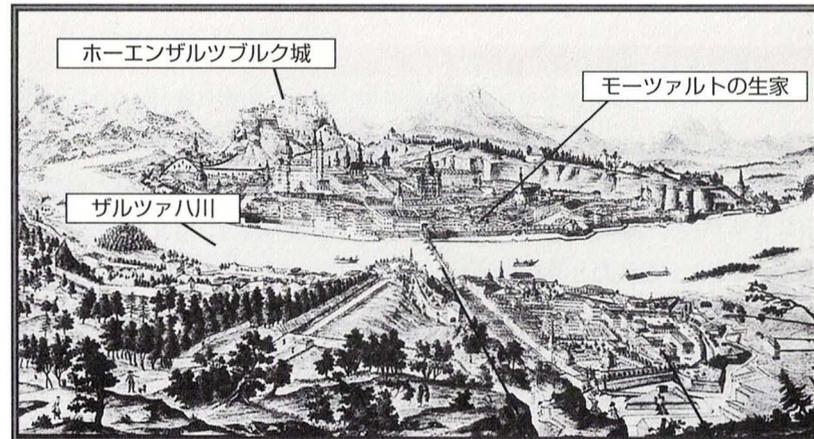
洗礼名は「ヨハネス・クリュustomス・ヴォルフガングス・テオフィルス・モーツァルト」。ヨハネス・クリュustomスは「金の口のヨハネ」という意味で、モーツァルトが生まれた日は、説教上手だった聖人ヨハネの祝日であった。ヴォルフガングスとは「狼とともにゆく者」という意味だが、病気を癒したことで有名な聖ヴォルフガングにちなみ、病気になっても死なないようにという願いがこめられていた。テオフィルスはギリシア語で「神に愛される者」の意。これをラテン語でいかえるとお馴染みの「アマデウス」となるのである。

◎ 神童モーツァルトの奇跡のエピソード

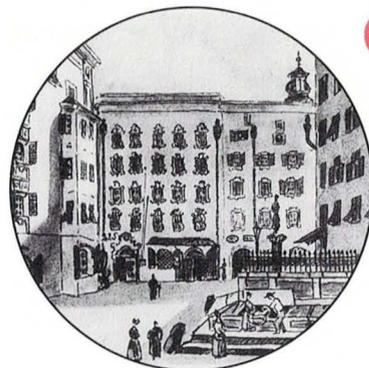
父レーオポルトは、ザルツブルク宮廷楽団のヴァイオリン奏者であったが、モーツァルトが生まれた年には名著『ヴァイオリン教程』を刊行しており、優れた音楽教育者でもあった。その父レーオポルトのもと、モーツァルトは4歳でチェンバロを弾き始め、5歳で即興的に小品を作曲。父が五線譜に書き残した譜面からは、幼いモーツァルトのたぐいまれな才能のひらめきをみてとることができる。

彼はまた、幼い頃から並外れた鋭い聴覚をもっていた。ある日、父の同僚のシャハトナーがモーツァルト家に遊びにいくと、モーツァルトが「おじさんのヴァイオリン、ほくがこの前弾いたままだったら、ほくのより8分の1音くらい低いね」という。確かめてみると、それは本当だった。このような彼の才能の片鱗を示すエピソードの数々は、現在まで飽くことなく語り継がれている。

モーツァルトを生んだまち・ザルツブルグ



18世紀のザルツブルク。オーストリアに属するこのまちは、この頃ローマ教皇によって任命された大司教が支配するカトリック教会の直轄統治領でもあった。今では「モーツァルトの聖地」ともいわれ、モーツァルト研究の本拠地となっている。
(→口絵II・III)



ゲトライデガッセ9番地のモーツァルトの生家。ハーフナウアーの持ち家の4階で、モーツァルトは誕生した。

幼いモーツァルトのエピソード

モーツァルト家に遊びにいくと、ヴォルフガング坊やは一日に何度も「おじさん、ほくが好き？」と尋ねてきた。冗談で「嫌いだよ」というと、目に涙を浮かべていたよ。とっても愛らしい子どもだったよ。

シャハトナー

旅の始まりと賞賛の日々 6歳～

◎ 神童の旅は、なぜ必要だったのか

父レーオポルトは敬虔なカトリック信者で、神からの贈り物であるモーツァルトの才能を世に知らしめることは神の意思であり、それを実行することが自分の使命だと信じていた。息子の音楽の才能を十二分に開花させるためにも、当時音楽が盛んであった国々、また都市という都市へ赴き、さまざまな経験を積ませることが必要だと考えた。

旅へ出ると父レーオポルトは、モーツァルトの神童ぶりを家主のハーゲナウアーへと詳細に書き送り、その手紙をザルツブルクの人びとに広く回覧させるように指示したのであった。

◎ 宮廷での御前演奏

父の計画通り、モーツァルトと4歳半年上の姉ナンネル（同じく音楽の才能に恵まれていた）の御前演奏や音楽会は、各国で大評判となった。

その宣伝役となったのがフランスのオルレアン公爵秘書のグリム男爵。彼は1753年から『文芸通信』という当時の文化や芸術の動向を知らせる秘密の時事通信を担当し、ドイツ各地や、その他北欧の啓蒙君主たちに送っていた。

グリム男爵は、『文芸通信』に書いている。世にも可愛らしいふたりの子どもがパリへやってきたこと、11歳の姉は華麗にクラヴサン（チェンバロ）を弾き、6歳の弟は小さな手で非常に難しい曲をいとも簡単に演奏すること、弟はまた、1時間も楽譜なしに演奏しつづけたり、鍵盤を布で隠しその上から同じ速さで正確に演奏したり、はじめての曲なのにさまざまなヴァリエーションで伴奏をつけることができたことなど……。

おかげで神童の噂は広まり、モーツァルト一家はルイ15世に謁見するという栄誉を授かることもできた。元旦にはヴェルサイユ宮の夜食会に招待され、これらは一家にとって輝かしい思い出となった。

ハーゲナウアーへ宛てたレーオポルトの手紙

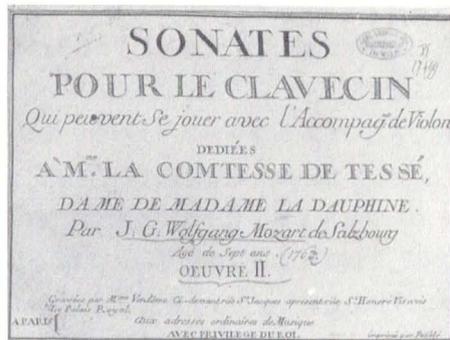
モーツァルトのはじめての楽譜出版の報告

今、ヴォルフガング氏の4曲のソナタが版刻中です。表紙にこれが「7歳の童子の作品」だと書いてあったとき、これらのソナタが世間でひきおこすだろう大騒ぎをご想像ください。あなたに申し上げられることは、神様が日々新たな奇跡をこの子におこなってくださっていることです。

1764年2月1日

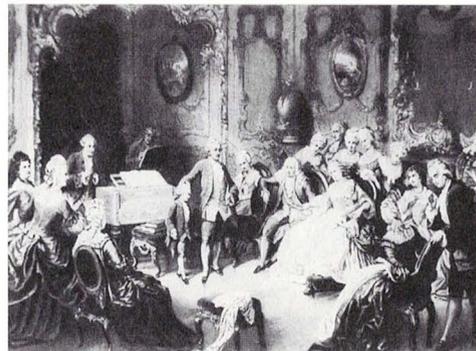
レーオポルト

7歳（実際は8歳）の息子がはじめて自作の楽譜を出版するという報告。誇らし気な父の姿がみえる。



1764年にパリで出版されたモーツァルト初の出版作品の表紙。「ヴァイオリンの伴奏つきで演奏できるクラヴサンのためのソナタ。7歳のJ・G・ヴォルフガング・モーツァルト、ザルツブルク出身、により、テッセ伯爵夫人に捧ぐ。作品II」と書いてある。

シェーンブルン宮殿への伺候の報告



女帝マリア・テレジアの宮殿でヨーゼフ大公に紹介されるモーツァルト

私たちは女帝陛下をはじめとして、この上ないご好意によって迎えられました。ヴォルフガングは女帝陛下のお膝に飛びのり、お首に抱きついて、気のすむまでキスをしたのです。

1762年10月16日

レーオポルト

少年オペラ作曲家の誕生 12歳～

◎ モーツァルトの名マネージャー・父の決断

ザルツブルク大司教シュラッテンバッハのもとでの宮廷音楽家という職務があるにもかかわらず、父レーオポルトは度重なる旅行で休暇を重ね、家族とともに2度もウィーンに旅していた。モーツァルト親子の最大のパトロンで理解者でもあったシュラッテンバッハも、彼らがなかなか帰らないことに業を煮やし、父レーオポルトの給料を一時的に差し止めざるをえないほどであった。

モーツァルト親子はそれでも帰郷せず、なんとかウィーンに残り、できれば定住して活躍する道を求めたいと、活動をつづけるのであった。そんな折、オーストリアの女帝マリア・テレジアの長男・皇帝ヨーゼフ2世からの薦めもあり、父はモーツァルトに本格的なイタリア・オペラを書かせてみようと思決心する。オペラ・ブッフア（喜歌劇）を書き、宮廷劇場の舞台にかけることは、当時音楽家として成功する近道だった。

◎ 本格的なオペラ作家としてデビュー

当時のウィーンの劇場の興行権は、アッフリジヨなる人物に委ねられていた。父レーオポルトは、このアッフリジヨと100ドゥカーテンの報酬でモーツァルトがオペラを作曲し指揮するという約束をとりつけた。

しかし、復活祭での上演を目論んだモーツァルトのオペラ・ブッフア《ラ・フィンタ・センプリチェ（みてくれの馬鹿娘）》は、ウィーンの作曲家の嫉妬によって度重なる妨害を受け、結局、同地では上演できなかったのである。わずか12歳の少年は、もうこの頃からほかの作曲家に才能を妬まれる存在となっていたのだ。怒った父は、皇帝ヨーゼフ2世に直訴するが、皇帝にも上演の権限はなく、結局訴えは認められなかったのである。

しかし、このオペラは次の年にザルツブルクで初演され、モーツァルトは本格的なオペラ作家としてのデビューを飾ったのである。

モーツァルトに好意的だったヨーゼフ2世



オーストリア皇帝のヨーゼフ2世は、マリア・テレジアの長男として1741年に誕生した。モーツァルトにオペラを依頼したほか、彼の演奏をたびたび聴きにいっている。1787年には、モーツァルトを宮廷作曲家に任命している。



マリア・テレジア

父の怒りは爆発「事件供述書」を書く

12歳の息子の書いたオペラ《ラ・フィンタ・センプリチェ》が妨害によって上演できないことに怒った父は、1768年9月21日、皇帝ヨーゼフ2世に拝謁し、劇場興行主アッフリジヨに対する訴状を手渡した。そこにはレーオポルトからみた事件の全貌が書かれていた。

事件供述書

多くの貴族の方が息子の非凡な才能に得心なさいました。もし12歳の子どもがオペラを書いて自ら指揮をしたとなれば、古今を問わず、このうえなく驚嘆すべきことになったはずです。しかしこのオペラは数週間前に完成され、写譜も始められていたのに息子に対する迫害が始まったのです。—アッフリジヨは「舞台向きではない」ということを理由にこのオペラの上演を断ってきました。これがオペラを1曲書くという大変な努力や時間、そして出費に対して息子に与えられた報酬なのでしょくか？嫉妬深く、名誉を傷つけることをいとわぬ輩が、愚にもつかず、矛盾ばかりの噂話を広げ、神が非凡な才能をお与えになり、ほかの諸国民も驚嘆し、鼓舞激励した純真無垢な者の活動を阻み、不幸にしようとしているのです。



イタリアでの就職活動 13歳～

◎ 無給の宮廷音楽家

2度目のウィーン旅行からザルツブルクにもどったモーツァルト少年に、大司教シュラッテンバッハは、無給ではあったが宮廷コンツェルトマイスターの称号を与えた。大司教は音楽への造詣も深く、優秀な若き音楽家を海外に留学させるなど、ザルツブルクの宮廷楽団のレベルアップを図っていた。

父レーオポルトは、この頃すでにモーツァルトをオペラの本場イタリアへ連れていこうと考え、着々と計画を進めており、大司教はモーツァルト親子の初のイタリア旅行に、無給でも宮廷音楽家という肩書きが大いに役立つだろうと考えたのである。

◎ オペラの本場イタリアへ

モーツァルト親子は、1769年の12月13日にザルツブルクを出発し1年3カ月をかけてイタリア各地をめぐる。行く先々で多くの人びとから歓迎を受け、本場のオペラを心ゆくまで堪能し、彼の音楽に重大な影響を与えたマルティーニ神父に教えを受け、さらにオペラの作曲を依頼された。そして非常に大きな収穫を得て、ザルツブルクに帰った。しかし、ザルツブルクでは宮廷コンツェルトマイスターに任命されてはいても実入りはない。父レーオポルトは、オペラの上演がたらモーツァルトになんとか早く就職口を探そうと、女帝から皇子のフェルディナント大公の婚儀用の祝典オペラの作曲を頼まれていたのを利用して、半年後には再度イタリアへの旅行を決行したのであった。

2度目のイタリアで作曲・初演されたオペラ《アルバのアスカーニョ》は大成功。フェルディナントは若きモーツァルトを宮廷音楽家に登用しようと考え、母の女帝マリア・テレジアに相談する。しかしその返事は「無用な人間を養わないように」との厳しいものだった。就職は暗礁に乗り上げた。それでもイタリアの旅はモーツァルトにとってきわめて貴重な音楽修行となったのである。

憧れのイタリアへ

ザルツブルクに残った母と姉に宛てた手紙からは、少年モーツァルトがイタリア旅行に大はしゃぎだった様子がわかる。



最愛のママへ

ぼくの心はとっても楽しくって、すっかり有頂天です。この旅行はとっても愉快だし、馬車のなかはとってもあたたかいし、それにぼくたちの御者は愛想のいい男で、道がちょっとでもよくなると、思いきり馬車を走らせてくれます。

1769年12月14日

モーツァルト

『ヴェローナ新聞』

1770年1月9日

この少年は、去る金曜日にアッカデーミア・フィラルモニカのホールのひとつで、紳士淑女を前に熟達した素晴らしい芸術的才能を示して聴衆を嘩然とさせた。彼ははじめに自分で作曲したシンフォニアを披露し、数曲の素晴らしい演奏をおこなった。難しい試みを与えられても、勇気をもってそのすべてを克服し音楽愛好家たちの賛嘆を得たのである。

憧れの地イタリアではモーツァルトはあたたかく迎えられた。

イタリア式に改名

1770年、この旅行中にモーツァルトのサインは「ヴォルフガング・アマデーオ」とイタリア風になり、以後、アマデウス、アマデーオ、アマデーを好んで用いるようになった。

《洗礼名》

ヨハネス・クリュソストムス・ヴォルフガングス・

ギリシア語

デオ・フィリス・モーツァルト

アマデウス

ラテン語

アマデーオ

イタリア語

アマデー

フランス語

モーツァルトのサイン

Wolfgang Amadeus Mozart

宮廷作曲家としての日々 16歳～

◎ ザルツブルク宮廷楽団のコンツェルトマイスター

モーツァルト親子が2度目のイタリア旅行から帰省した次の日、1771年12月16日、最大の理解者であった大司教シュラッテンバッハが世を去ってしまう。

新君主・大司教には、グルクの領主で司教だったコロレド伯爵が就任。大司教コロレドは、財政や政治、教会改革に積極的に取り組んだ、典型的な専制君主であった。のちに彼はモーツァルトと決定的に仲たがいをすることになるが、それはモーツァルトが真の音楽家となるためにザルツブルクを飛び立つきっかけともなった。

モーツァルトは16歳になると、大司教コロレドにより年俸150フローリンの宮廷コンツェルトマイスターに任命される。同じ年にミラノで上演されたオペラ《ルーチョ・シッラ》の作曲契約料は130フローリン。それと比べて宮廷コンツェルトマイスターの年俸に、モーツァルト親子が満足できるはずもなかった。

◎ 平穏だが単調な日々

旅から旅へと刺激に満ち充実した少年時代を送ってきたモーツァルトにとって、この時期は宮廷音楽家としての職務を果たすためにザルツブルクに閉じこめられた退屈な日々でもあった。宮廷や貴族の宴会や娯楽のために、セレナードやディヴェルティメントなどの機会音楽を、また教会のためにミサ曲を、職務として作曲しつづけることになったのである。

しかしモーツァルトは大司教コロレドの留守中に、ウィーンとミュンヘンへの短い旅に出ることができた。この旅でも彼は、創作上の大変重要な収穫を得ており、若々しい響きの交響曲やピアノ・ソナタ、あるいはオペラなどの傑作を書き上げている。

閉鎖的な小都市ザルツブルクに留まっていながらも、モーツァルトの音楽は、確実に成熟していくのであった。

宮廷や教会のための作曲の仕事



ザルツブルク宮廷音楽家の仕事

- 食事、宴、祝い事のための曲をつくる
- 祝典などの行事のために曲をつくる
- 教会でおこなわれるミサのための曲をつくる
- コンツェルトマイスターとして楽団をまとめる
- オルガンの演奏をする

など

ザルツブルク大聖堂
モーツァルトはザルツブルクの教会音楽家として、たくさんのミサ曲を作曲した。

ザルツブルク宮廷音楽家としての日々

マルティーニ神父様

目下のところ私は室内用と宮廷用の音楽を書くことを楽しんでいます。それにここにはふたりのまことに優れた対位法作家、ミヒャエル・ハイドンとアードウルフ・ガッサー氏がいます。私の父は大司教聖堂の楽長ですが、彼が私の思うままに教会用の作品を作曲する機会を与えてくれます。

1776年9月4日 モーツァルト



ヨーゼフ・ハイドンの弟、ミヒャエル・ハイドン

モーツァルトはボローニャで出会ったマルティーニ神父に宛てて、ザルツブルクでの日々について報告している。そこにはザルツブルク宮廷楽団の同僚ミヒャエル・ハイドンについても触れられている。

母の死と失恋を乗り越えて 22歳～

◎ ザルツブルク脱出を試みるが……

活躍の場が限られていたザルツブルクという小さなまちで、大司教コロレドは財政削減のため宮廷音楽の活動を制約し始めていた。このままでは音楽家としての将来はないと考えたモーツァルトは、足かけ3年にわたる就職探しの旅に出発する。父は息子をなんとか立派な職に就けようと必死であったが、大司教の手前ザルツブルクに留まらねばならず、今回は母マリア・アンナとのふたり旅となった。

意気揚々とザルツブルクを後にした21歳の青年作曲家は、さっそく最初の目的地、ミュンヘンでの就職活動を開始するが、大司教と仲が悪いという噂はすでに広まっており、あえなく失敗。父親から手紙で叱咤激励を受けながら、つづくマンハイムやパリでも活動をおこなうが、思うような職はなかなか見つけられなかった。

◎ 悲傷の旅

さらに厳しい試練がモーツァルトを待ち受けていた。最愛の母マリア・アンナが、パリで体調をくずし、とうとう不慮の死をとげてしまう。やるせない気持ちを慰めてもらおうと、マンハイムで恋に落ちた歌手の卵アロイジアのもとに手紙を書き、また帰途彼女を訪ねもしたが、歌手を夢見ていた少女は、すでにプリマドンナとして成功しており、無職のモーツァルトを相手になどするはずもない。母を亡くした淋しさと、失恋の悲しきでボロボロになったモーツァルトは、仕方なくザルツブルクへ帰省。不満を抱えながらもザルツブルクで再び働き始めることになった。

しかし悲劇つづきのこの旅は、モーツァルトをひとりの人間として大きく成長させることとなった。またマンハイムやパリでは音楽的に多大な影響を受け、彼の音楽にはより一層の深みと輝きが増えらるることになったのである。



母の死を知らせた手紙

モーツァルトが母を亡くした日に書いた2通の手紙には、父と姉を思いやる優しさがあらわれている。

大好きなお父さん

とてもいやな悲しいことをお知らせしなければなりません。お母さんの具合がとても悪いのです。——ぼくはもう長いあいだ怖れと望みのあいだにいますが、すべて神様の御心におまかせしました。そしてお父さんもお姉さんもそうしてほしいのです。何事も、ぼくたちのために最善をはからってください。神様のおぼしめしからです。

1778年7月3日 モーツァルト

プリンガー神父様

最良の友よ！ あなたひとりだけに

友よ、ぼくといっしょに悲しんでください。今日はぼくの生涯でいちばん悲しい日でした。ぼくはこれを夜中の2時に書いていますが、どうしてもあなたにいわなくてはならない。ぼくの母、ぼくの愛する母さんはもういないのです！ 神様が彼女をお召しになったのです。

あなたの友情にうたえただけで、ただひとつお願いしたいのは、かわいそうな父がこの悲しい知らせを受けとる心構えができるようにしてほしいということです。ぼくは同じ便で父にも手紙を書きましたが、でも重体だということだけでした。

——最良の友よ、どうか父を支えてやってください。最悪のことを聞いても、あまりに悲しく、つらく受けとらないようにしてください。姉のこともまた心からよろしく願います。どうかすぐにふたりのところへ行ってください。母が亡くなったことは仰らず、ただ受けとめる準備をしてやってください。

1778年7月3日 モーツァルト

大司教と決別し自立の道へ 25歳～

◎ 自由への憧れ

再び故郷のザルツブルクで宮廷音楽家としての職務をこなすモーツァルトであったが、彼の心はすでにこのまちにはなかった。大司教との縁を断ち切って、もっと自由な音楽家として活躍することを夢見ていた。

そんな折、バイエルン選帝侯からオペラ作曲の機会が与えられる。この時期ザルツブルクでの創作活動はやや滞りをみせていたが、そのなかにあつてこのチャンスはモーツァルトの創作意欲を掻き立てた。こうして作曲された《クレータの王イドメネーオ》は、ミュンヘンで初演され大成功をおさめたのである。

◎ ウィーン定住を決意

しかしミュンヘンでの幸せも束の間、ウィーンに滞在していた大司教コロレードより「至急来るように」との厳命が下る。しかたなくモーツァルトはウィーンへ向かい、大司教の伯父の屋敷に召使たちとともに逗留することになった。ウィーンでは貴族の屋敷への出入りも自由だというのに、大司教にとって音楽家は召使と同様。モーツァルトは自分への扱いに憤慨した。

ふたりの溝はますます深まり、とうとう感情をむきだしにした大喧嘩となつてしまう。大司教に罵られたモーツァルトは「僕もあなたに用はない」といい放ち、ついに解雇となつてしまった。驚いた父レーオポルトは、アルコ伯爵に仲裁に入ってもらうように頼むが、モーツァルトは伯爵まで怒らせてしまい、ドアから足蹴にされて部屋を追いだされる始末。父は、大司教に謝るようと説得を試みるが「子供の幸せを願わない父親は、もう私の父親ではありません」と、ザルツブルクへ帰ることを断固として拒否したのであった。

モーツァルトは、召使としての宮廷音楽家から、独立したひとりの音楽家へとみごとに転身を遂げた。そしてそれは、これまで自分を導いてくれたザルツブルクの父の庇護から離れることも意味した。

ザルツブルクからの逃走

プリンガー神父様

ザルツブルクはぼくの才能に向いているまちはありません。音楽家たちが少しも尊重されていないし、何も聴くものがありません。劇場もなければ、オペラもありません。

1778年8月7日 モーツァルト

パリ旅行中にプリンガー神父へ宛てた手紙より。ザルツブルクへの嫌悪感があらわである。

大好きなお父さん

怒りでまだ身体が震えています。ぼくはこれまでずいぶん我慢してきましたが、限界です。幸いなことにぼくはもうザルツブルクの大司教に仕える身ではなくなりました。ぼくにとって、今日という日は幸福な日なのです。あいつはぼくのことを小僧だとか放蕩息子だとか呼ぶと、さっさと消え失せるがよいと言ったのです。ぼくは大司教の部屋をでるとき、言いました。「結構です。明日、辞表をお送りしましょう」

1781年5月9日 モーツァルト

ウィーンでの大司教との大喧嘩のあと、モーツァルトはそのなりゆきを父に説明している。



大司教コロレード



コンスタンツェとの結婚 26歳～

◎ コンスタンツェとの結婚

モーツァルトは、かつて苦い失恋をしたアロイジアの母であるヴェーバーツム・アウグ・ゴッテス未亡人の下宿屋「神の眼館」で新しい人生のスタートを切った。息子を利用して以前からヴェーバー家を嫌っていた父レーオポルトにとって、それは許しがたいことであった。

しかし彼はまもなくアロイジアの妹、コンスタンツェと恋に落ちる。父の反対にあい、一度はコンスタンツェとの恋の噂を否定して下宿屋を出たものの、1782年8月4日、モーツァルトは聖シュテファン大聖堂でコンスタンツェと結婚式を挙げたのだ。モーツァルト26歳、コンスタンツェは20歳。それは事後報告というかたちで父親へと伝えられた。ウィーン移住を大反対されて以来、父レーオポルトとの行き違いは、ますます深まっていくのだった。

◎ フリーランスとしての作曲家のはじまり

妻コンスタンツェとの新しい家庭は、父のことをのぞけば順調にスタートした。コロレードとの大喧嘩によって、なかば衝動的にウィーンへの定住を決めたモーツァルトであったが、作品の注文を受け、予約演奏会を開き、作曲や演奏のレッスンをし、生計をたてることを考えた。今やこれらの仕事はすべて順調に進み、その後数年はピアノ協奏曲をメインとした自作自演の予約演奏会が数々開かれた。とくにピアノ協奏曲は自分が独奏を受けもつことができるため、大変魅力的な分野だった。モーツァルトにとってまさに順風満帆の勢いであった。

またこの時期にモーツァルトはある重要な人物と出会っている。ヴァン・スヴィーテン男爵である。彼は大バッハやヘンデルなど、モーツァルトの生まれるおよそ半世紀も前のバロック時代の作曲家たちの作品を収集していたが、それらをモーツァルトに紹介し、大いなる音楽的影響を与えたのである。

(→ p39)

聖シュテファン大聖堂での結婚式



聖シュテファン大聖堂。ここでモーツァルトはコンスタンツェと結婚式を挙げた。8月7日の父宛の手紙で、彼は結婚式の様子を報告した。「ぼくたちふたりが結ばれたとき、妻もぼくも泣きだしてしまいました。それでみんなも、司祭までも感動してしまい、みんな泣きました」

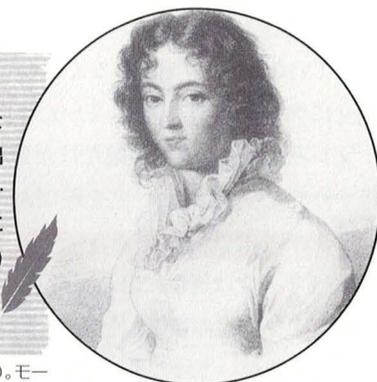
妻へ送った手紙

最愛の妻へ！

たくさん願い事をします。1、寂しがらないで 2、健康に注意して 3、ひとりて出歩かないで、4、ぼくの愛情を確信して……それじゃ、元気だね、最愛のひと。きみに1095060437082回（数字の発音練習になる？）キスを贈り、抱きしめます。

1789年4月16日 モーツァルト

ドレスデン滞在中に妊娠中の妻に宛てて書かれた手紙より。モーツァルトのユーモアと愛情に満ちあふれている。



コンスタンツェ・モーツァルト



ぼくの可愛らしい最愛の妻に

ぼくの昨日の手紙を確かに受けとってくれたよね？今のぼくの望みは用件を片づけて君にまた会いにいくことだけです。君と離れているとどんなに時間が長く感じられるか、君には想像もつかないだろう。ぼくの気持ちは口では説明できません。

1791年7月7日 モーツァルト

バーデンに湯治に出掛けた妻に宛てた手紙より。モーツァルトは心配でたまらない様子で毎日手紙を書いた。

時代の寵児・モーツァルト 28歳～

◎ 作曲家・演奏家・教師としての日々

ウィーンに住み始めて3年。作曲家・演奏家・教師としての仕事も順調でモーツァルトの活躍ぶりはめざましく、収入もどんどん増えていった。ところが年間家賃460フローリンという立派なアパート（「フィガロハウス」、現在は「モーツァルトハウス」と呼ばれる）に引っ越ししたり、新しい豪華な服をつくったりと、派手な生活であった。

働けば収入がいくらでも入ってくる。経済観念にうとい夫婦はまったく心配はしていなかった。定職はなくともモーツァルトは作曲家として、演奏家として、完全にウィーンに認められていたのだ。

父レーオポルトとの問題だけが残っていたが、息子は自分の成功をその目で確かめてもらいたいと、父を呼びよせるのであった。

◎ 流行音楽家の多忙な日々

1785年、父は誘いに応じ、息子のもとへとザルツブルクからやってきた。息子はいまや時代の寵児となり、一緒にいる自分までも落ちついて座っていられないと父親がいうほど多忙な生活を送っていた。父はウィーンに滞在しているあいだ、連日のように開かれる息子の演奏会へと足を運んだ。ある演奏会に予約を入れてくれた人びとのリストには、当時の錚々たる貴族、市民、外交官たちが174人も名を連ねており、流行音楽家モーツァルトのウィーンでの人気ぶりは最高潮に達していた。

父レーオポルトは、久しぶりに接したモーツァルトの様子を、おどろきと喜びに満ちた言葉で、娘のナンネルへと書き送ったのであった。

独立した作曲家として成功し、父とのわだかまりをやっと解消させることもでき、さらに息子のカール・トーマスの誕生という喜びも加わっていた。この頃が、モーツァルトにとって一番幸せな時期だったのかもしれない。

● 売れっ子音楽家の多忙な日々

1784年3月3日付の父宛の手紙にモーツァルトは「確実に弾かなければならない演奏会のリスト」を書いている。レッスンや作曲をしながら音楽会で演奏するという多忙な生活を送っていたことがわかる。

演奏会のリスト	
2月 26日 (木) ガリツィン邸の音楽会	20日 (土) リヒター邸の音楽会
3月 1日 (月) エステルハージー邸の音楽会	21日 (日) ぼくのはじめての劇場演奏会
4日 (木) ガリツィン邸の音楽会	22日 (月) エステルハージー邸の音楽会
5日 (金) エステルハージー邸の音楽会	24日 (水) ぼくの2回目の私的演奏会
8日 (月) エステルハージー邸の音楽会	25日 (木) ガリツィン邸の音楽会
11日 (木) ガリツィン邸の音楽会	26日 (金) エステルハージー邸の音楽会
12日 (金) エステルハージー邸の音楽会	27日 (土) リヒター邸の音楽会
15日 (月) エステルハージー邸の音楽会	29日 (月) エステルハージー邸の音楽会
17日 (水) ぼくのはじめての私的演奏会	31日 (水) ぼくの3回目の私的演奏会
18日 (木) ガリツィン邸の音楽会	4月 1日 (木) ぼくの2回目の劇場演奏会
19日 (金) エステルハージー邸の音楽会	3日 (土) リヒター邸の音楽会



演奏会の予約チケット

ナンネルへ

(ウィーンに到着した) 晩に私たちは6時にあの子のはじめての予約演奏会に行ったが、身分の高いひとがたくさん集まっていた。演奏会は本当に素晴らしいもので、オーケストラもみごとだった。私たちが着いたとき、写譜屋はまだ書き終わっていなかったし、おまえの弟は口ンドーをまだ一度も通して弾いてみる時間がなかったのだよ。

1785年2月16日 レーオポルト

レーオポルトは、市の集会場メーリングループでおこなわれたモーツァルトの予約演奏会に出席し、その様子をナンネルに伝えている。《二短調協奏曲》(K466)はこの演奏会で初演された。(→ p54)

モーツァルトの栄光と悲劇 31歳～

◎ 父レーオボルトの死

時代の寵児として多忙な日々を送るモーツァルトであったが、その生活にも影がさし始める。1787年、モーツァルトが31歳になる頃には、ウィーンの聴衆からの関心は薄くなってきていた。演奏会の数も減り、作曲の依頼も徐々に少なくなった。それでもまだ、大作オペラ《フィガロの結婚》が大成功をおさめたことは、彼にとってこの上ない喜びであった。とくにプラハでは熱狂的な支持を得た。プラハの聴衆は彼をあたたく迎え、しかもこの地では新しいオペラの依頼を受けることもできたのである。こうして次の大作オペラ《ドン・ジョヴァンニ》がつくられることとなった。

しかし意気揚々とウィーンにもどると、父が病気で倒れたという知らせが姉ナンネルから届く。モーツァルトは、父を励ます手紙を書き送るが、一方で死を覚悟してもいた。母を亡くして以来、モーツァルトは死は恐れるものではなく、むしろ「最良の友」とであると努めて思おうとしていたのだ。そして5月末、姉ナンネルの看病もむなしく父は67歳の生涯を閉じた。緊張を強いられていたためか、モーツァルトのこの頃の作品には短調のものが多く作曲されている。

◎ 皇帝より念願の宮廷室内作曲家に任命される

この年は、人気も陰りをみせ始め、ウィーンでの最上の友だった医師バリザーニが29歳で死亡し、さらに愛鳥の椋鳥の死も重なった。しかし、11月のプラハにおける《ドン・ジョヴァンニ》の初演は喜んで12月になると朗報が舞いこんできた。

皇帝ヨーゼフ2世より、念願の宮廷作曲家に任命されたのである。年俵は800フローリン。宮廷の舞踏会用の舞曲などを定期的に作曲するのが主な仕事であったため、やりがいのあるものではなかったが、それでもウィーン在住7年目にしての快挙として、喜びの手紙を姉ナンネルに書き送っている。

父への手紙と愛読書にみるモーツァルトの死生観

病気の知らせを受けて書いた父宛の手紙には、モーツァルトの死に対する考えがあらわれている。

お父さんへ

今、ぼくを大変悲しませる知らせを聞きました。あなたが元気であることを想像していただけに、いっそう悲しいことです。本当に病気のですね。——ぼくは、あらゆることの最悪の状態を考える習慣をもつようになっていましたが、それでも安心できる手紙を待っています。死は、ぼくたちの生の真の最終目的ですから、数年来、ぼくは人間のこの真実で最良の友と非常に親しくなっています。その結果、死の姿はぼくには恐ろしくないばかりか、心を慰めてくれるものなのです。ぼくはいつもベッドに入るときに、もう明日は生きていないかもしれないと思わないことはありません。でも知人のみんなが、ぼくとのおつき合いで、ぼくのことを不機嫌とか無愛想とか悲しそうとかいえる者はいないでしょう。この幸福を、ぼくは毎日創造主に感謝しているのです。

1787年4月4日 あなたの従順な息子

モーツァルトの愛読書より

〈ソクラテス対話篇〉より

真の哲人にとっては、
死は恐ろしいものではなく、
いつでも喜んで
迎えるべきものだ。
死は、長いあいだ望まれた
肉体の協同からの解放なのだ。
死が近づいてくることにおびえ、
それを嘆き悲しむとは、
なんと不合理なことだろう！



モーツァルトの死生観には、彼の愛読書だった18世紀の著名な哲学者メンデルスゾーンの著書につよく通じるものがある。

人生の黄昏 32歳～

◎ ウィーンでの人気は急落した

1788年になると、モーツァルトの生活はますます苦しくなった。オーストリアはトルコ戦争に突入。貴族たちも予約演奏会どころではなくなっていた。ウィーンの時価は急騰。《フィガロ》では貴族を風刺し、《ドン・ジョヴァンニ》も心地よい曲に慣れたウィーンの聴衆には難しく聞こえるのだった。モーツァルトの人気は凋落していった。

同時にこの頃からモーツァルトは、富裕な織物商人でフリーメイソンの盟友・プフベルクから度々、借金をするようになっていった。現在数通残されている「プフベルク書簡」には、モーツァルトがこの人物に宛てた借金の申しこみが綴られている。3年後35歳で亡くなるまでにプフベルクに借りた金額は、1415フローリンにも達したのだった。

◎ 貧窮と創造と

宮廷作曲家としての定収入が800フローリン、ほかにも演奏会やレッスン料などの臨時収入があったにもかかわらず、なぜプフベルクに借金を重ねなければならなかったのだろうか。妻のコンスタンツェが足の病にかかりバーデンでの温泉療法にお金がかかったことも要因のひとつだろうが、次男のフランツ・トーマスを貴族が通う高額の寄宿学校に入れており、王侯貴族とのつきあいでの衣装代や交遊費もかさむ生活をしていせいであろう。昔からモーツァルトは父親のように生活をきちんと守っていくという地道さには欠けていた。一家の経済状況は、日増しに傾き、モーツァルトは健康も害し始めるのだった。

しかしこうした窮乏の時期にも、夏には名高い「三大交響曲」を相次いで作曲し、翌年には傑作オペラ《コシ・ファン・トゥッテ》もつくられている。それらは生活の暗さなど微塵みじんも感じさせず、作曲家のいっそうの円熟味を増した最高傑作の作品群をなすものとなった。

創作と借金と

経済的に苦しくなったモーツァルトは、作曲活動をしなが、プフベルクに宛てて幾通もの無心状を書いた。



最愛で最良の友 プフベルク様

ああ、ぼくは今最悪の敵にさえ望まないような状態にいます。そして最良の友で盟友のあなたがぼくを見捨てたら、不幸にも、罪もない哀れな病弱な妻や子どもとともに、破滅してしまいます。——運命は残念ながらウィーンでだけ、ぼくに逆らっています。——そこでただひとりの友よ、ぼくにもう500フローリンお貸しいただきたいのです。あなたの援助がなければ、友人であり盟友の名誉と安息、それにおそらく命も減ってしまうことを、どうか考えてみてください。

1789年7月14日 モーツァルト

レクイエム・最後のとき 35歳

◎ 病魔と《魔笛》

1791年、モーツァルトは人生最後の年を迎えた。この年には次第に健康状態の悪化に悩まされながら、オペラ《魔笛》や《クラリネット協奏曲》など全作品のなかでもとくに注目に値する傑作が生みだされていく。

夏以降、《魔笛》の作曲中に、灰色の服を着た男が匿名で死者のためのミサ曲《レクイエム》を作曲してくれないかと依頼にきた。前金は225フローリン、全額で450フローリンというオペラ並の高額な報酬であった。現在明らかになっているのは、この灰色の服の男はシュトゥッパハ伯爵の法律顧問ライトゲーブ、または伯爵の友人で弁護士のゾルチェンなる人物のいずれかで、伯爵が若くして亡くなった妻の追悼のためにミサ曲を依頼させたというものだった。しかしこの《レクイエム》は、モーツァルト自身のための葬送の歌となってしまったのである。

◎ 《レクイエム》

10月、はじめはそれほどの評判ではなかった《魔笛》は、次第に熱狂的に迎えられるようになった。それはモーツァルトにとって大きな喜びとなった。しかし彼は、最後に残された《レクイエム》を完成させる力が自分には残されていないのを悟っていたのであった。11月の末になると起き上がるのも困難なほど衰弱し、弟子のジュースマイヤーに手伝ってもらい、最後の力を振り絞っても、ついにこの曲を完成させることはできなかったのだ。

1791年12月5日午前0時55分、^{しゆうえん}終焉のときはやってきた。《レクイエム》の完成をジュースマイヤーに託して、モーツァルトは天に召されたのである。享年35歳であった。葬儀は12月6日、聖シュテファン大聖堂で執りおこなわれたが、健康を害していた妻コンスタンツェは葬列には加わらなかった。そして遺体は、おそらくは翌7日に聖マルクス墓地の共同墓穴に埋葬されたのだった。

死の直前まで作曲をつづけたモーツァルト



臨終まで看病をつづけた義妹ソフィーは、彼が息を引きとるとき、まるで《レクイエム》のティンパニをあらわすかのように口を動かしていたと伝えている。

モーツァルトの葬儀

死の翌日、聖シュテファン大聖堂の死者名簿のなかに検死結果が記載された。葬儀はごく一般的な市民の葬儀と同じ「第3等」のものだった。

12月6日

モーツァルト	称号	ヴォルフガング・アマデウス
第3等		モーツァルト氏、オーストリア皇室楽長
教区聖堂		および宮廷作曲家 ラウエンシュタイン通り
聖シュテファン		クラインカイザーシュタイン家970番地
		検死結果は急性粟粒疹熱 36歳
		聖マルクス墓地
料金8グルデン	支払い済み	4グルデン36クロイツァー、
50クロイツァー		4グルデン20クロイツァー
		馬車3グルデン

聖シュテファン大聖堂の死者名簿より

聖マルクス墓地のモーツァルト記念碑



18世紀の手紙の常識

手紙には最新のニュースがいっぱいだった

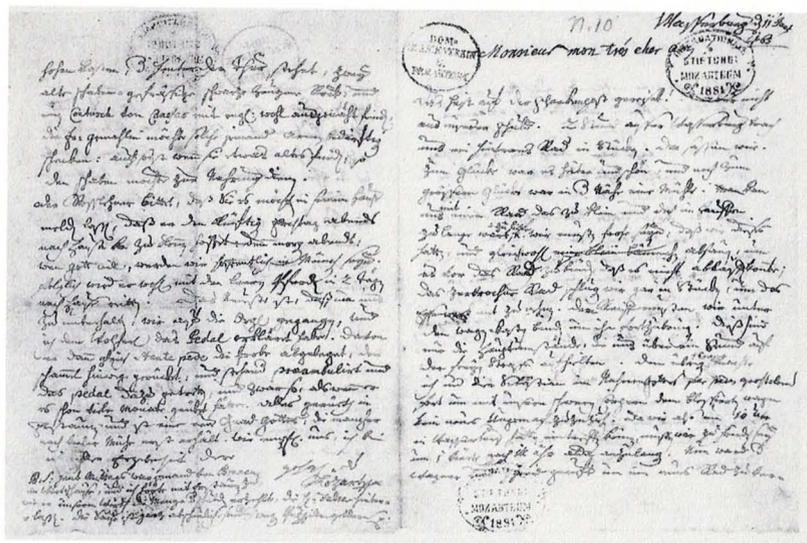
ヨーロッパの18世紀は「手紙の時代」であった。手紙は、電話や電報などが発明されるまでは、どの時代においてももっとも重要な通信手段であったが、とりわけ18世紀は、手紙への感心が高まり、私信だけでなく、公的な手紙が意識的に書かれた時代であった。

情報の乏しい時代には、ちがう土地に住むひとからの手紙や、身近なひとの旅先からの手紙は、知らない土地のさまざまな新しいニュースを伝える貴重な情報源と考えられていた。そうした手紙を親しいひとのあいだでまわし読みをするのも習慣だったため、書く方もそれを意識し、できるだけいろいろなことを詳しく書いた。貴重な記録資料として、手紙の書き手は正確な写しをみずか

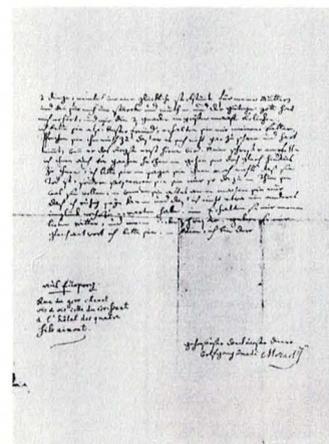
らとるのも通例だった。また18世紀には、文人たちは手紙のかたちで、つまり書簡体で小説を書くというかたちを用いている。ジャン・ジャック・ルソーの『新エロイズ』がそのもっとも名高い実例である。

レーオポルトの手紙は「神童」の報告書

父レーオポルトは息子に手紙はきちんと保存するように若い頃から指示していた。こうしてモーツァルトの場合には、手紙は資料として残されることになった。生涯のおよそ3分の1を旅で過ごしたモーツァルトの場合、彼自身や彼をとりまく人びとによって書かれた手紙は膨大な数にのぼっている。それらの手紙のなかには、父レーオポルトが旅先からザルツブルクの家主宛に送った手紙のように、街中に回覧されて読まれることを意図して書かれた旅先での報告書のようなものもある。また、家族や親友とのあいだでやりとりされた手紙は、決してほかのどんな資料からも得られないモーツァルトと家族の真の姿をみとることができる。そのためこうした手紙は、モーツァルトを知る上でのもつ



←旅先のヴァッサーブルクから家主のハーゲナウアーに宛てたレーオポルトの手紙 1763年6月11日



母の死を知らせたプリンガー神父宛のモーツァルトの手紙 1778年7月3日 (→p123)

とも重要な資料といえるが、逆に、関係者にとっては他人にみせたくない手紙も当然含まれており、モーツァルトの死後闇に葬られた手紙も多々ある。

モーツァルトの肉声を伝える手紙

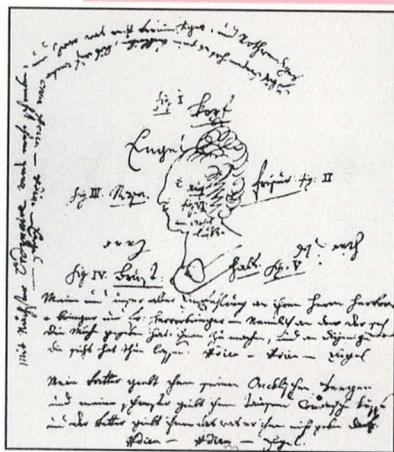
18世紀には、私信もときには検閲の対象になることもあり、モーツァルトの父は暗号を使って書いていることもある。今のような切手はまだなく、受取人払いが普通で、郵便料金は高かったため、できるだけ紙面を無駄なく使って書くのが常識であった。モーツァルトに関わる歴大な数の手紙が残されていることからわかるように、郵便制度は整っており、今よりは日数がかかったものの、手紙はほとんど確実に受取人のもとに届けられていた。

こうした整った郵便制度と、18世紀の手紙に対する捉え方のおかげで、後世はモーツァルトやその関係者の手紙を読むことができるのである。



イタリア旅行中に姉ナンネルに宛てたモーツァルトの手紙 1772年12月18日

ペーズリに宛てたモーツァルトの手紙
1780年5月10日



Part 3

モーツァルトの冒険

「旅をしない者はまったく哀れむべき存在です」。モーツァルトは生涯の3分の1ちかくもの時間を旅に費やしている。馬車の旅は命を失う危険さえともなうものだったが、それでもモーツァルトは旅をしつづけた。その旅が彼にもたらしたものは？

モーツァルトの旅の軌跡

◎ 人生の3分の1を旅に生きた天才

研究者アンガーマミュラーが編纂した最新の『モーツァルトの旅』(2004年)によると、6歳の直前でミュンヘンから始まった旅は、晩年35歳のプラハ旅行まで入れて合計3720日。モーツァルトは35歳10カ月と9日の生涯の、3分の1近くを旅に費やしたことになる。

6歳でミュンヘン、ウィーン、7歳から約3年半にわたるドイツ各地、パリ、ロンドン、アムステルダムなど西方への大旅行、13歳ではじめてのイタリアへの旅、15歳で2度目のイタリア、16歳で3度目のイタリア、17歳で3度目のウィーン、18歳でふたたびのミュンヘン、21歳でミュンヘン、マンハイム、パリ、24歳でみたびのミュンヘンへ、25歳からはウィーンに定住し、27歳で妻とザルツブルクへ帰省旅行、31歳ではじめてのプラハ、33歳でベルリンなど北方旅行、34歳でフランクフルト、35歳で最後のプラハ——。訪問した大きな都市だけを数えてもおよそ30を超え、訪ねた都市、まち、村など合計207にのぼる。

◎ 旅により、作曲家は成長した

神童モーツァルトの才能を世に知らせること、そして神が息子に与えた才能を开花させること。この目的を実現するために父は旅という手段を選んだ。そうして始められたモーツァルトの生涯にわたる旅の軌跡は、北はアムステルダムやベルリン、西はロンドン、南はナポリ、東は現在のスロヴァキアと広範囲にわたり、主な音楽都市を網羅している。飛行機も自動車もない時代に、これほど広く、多岐にわたる旅をした音楽家がほかにいだろうか。

旅の手段は、船も使ったがほとんどが家用馬車や駄馬車。道の整備もされておらず、治安も悪かったため、まさに命掛けのものだった。しかし彼は旅が自分に音楽家として多くの機会を与えてくれることを知っていたのだ。彼は旅をこよなく愛したが、旅によって成長した音楽家でもあったのである。

モーツァルトの訪れた主な都市



ウィーン旅行①

◎ 憧れの都、ウィーン

モーツァルトのエピソードに満ち、成功に彩られた最初の旅はウィーンへの旅であった。25歳でこの地に定住するまでに、モーツァルトは父レーオポルトに連れられ3度、この地を旅している。当時1万6千人のザルツブルクの10倍を超える人口をもつ、神聖ローマ帝国の首都ウィーンは、多くの文化人や芸術家の集まる大都会だった。モーツァルトを連れたミュンヘンへのはじめての旅で成功を確信した父レーオポルトが、次はドイツ語圏最大の都市ウィーンで息子の才能を知らしめようとしたのは、当然のことだろう。ウィーンは、モーツァルトが音楽家として華々しくデビューを飾った記念すべき地であった。

◎ 御前演奏の折にも音楽を理解するひとを見分けた

ウィーンに入るためには厳しい税関で時間のかかる通関手続きをしなければならなかった。6歳のモーツァルトは「その荷物はなんだ?」と聞かれると「僕のヴァイオリンだよ」と上手にメヌエットを弾いた。これに機嫌をよくした税関吏により、速やかに通関することができたという。ウィーンに着くと神童の噂はたちまち広まり、早速シェーンブルン宮殿に参上せよとの命令が下る。

宮殿では、モーツァルトが女帝マリア・テレジアの夫、皇帝フランツ1世を前にして、有名な宮廷作曲家のヴァーゲンザイルに譜めくりをを頼んだというエピソードもあるが、幼いながらも音楽を理解するひとを見分けていた証^{あかし}だろう。御前演奏の後日、マリア・テレジアは姉弟の見事なクラヴィア（ピアノ）の演奏に喜び、モーツァルトには豪華な皇子の大礼服を、ナンネルには皇女服を贈っている。父レーオポルトはこれに感激し、ザルツブルクに戻ると早速この豪華絢爛たる礼服をモーツァルトに身につけさせ、記念の肖像画を書かせたのだった。
(→口絵1)

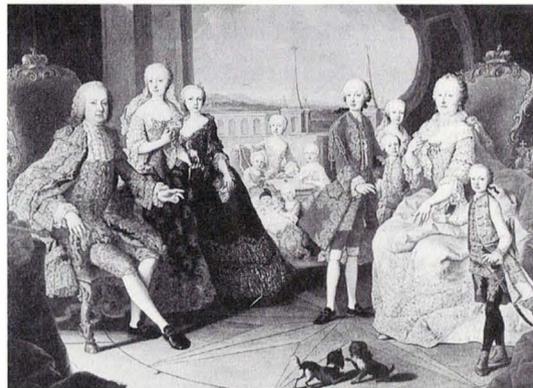
このときレーオポルトは100ドゥカーテン（年俸の倍）を賜っているが、神童の旅のもたらす経済面での成果を、父に確信させるものだった。

第1回ウィーン旅行のハイライト



シェーンブルン宮殿 当時ハプスブルク家の離宮として使用されていたシェーンブルン宮殿の部屋数は1441にのぼる。ロココ調の装飾が施された華麗な「鏡の間」で、6歳のモーツァルトは御前演奏をした。

フランツ1世、マリア・テレジアと子どもたち



モーツァルト一家は皇帝夫妻から手厚くもてなされた。伝記作家ニメチェクは次のような有名なエピソードを伝えている。幼いモーツァルトは宮殿の磨き抜かれた寄木細工の床の上で転んでしまった。それをひとりの皇女が助け起こしてくれた。感激した彼は彼女を褒めちぎったが、この親切な皇女こそ後にフランス国王ルイ16世の王妃となるマリー・アントワネットだったのだ。この話には尾ひれがつき、モーツァルトが彼女に「大きくなったら結婚してあげよう」と言ったとまで伝えられている。

西方への大旅行

◎ 3年半もつづく、家族での大旅行

ドーヴァー海峡を隔てて、南北に対峙するフランスの首都パリとイギリスの首都ロンドン。パリは約70万人、ロンドンには100万を超える人口をもった大都市であった。父レーオポルトは、神童モーツァルトがこれらの大都市で名をあげ、音楽的にも重要な成果を得られるであろうと、これらふたつの都へと思いを馳せるのであった。

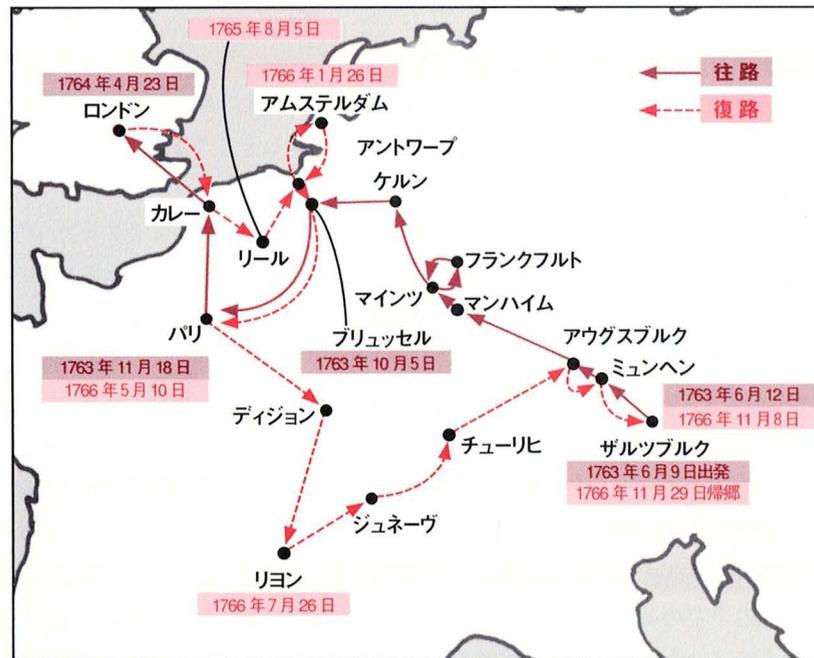
モーツァルト一家は1763年、自家用馬車で、パリ、ロンドン、オランダ、ドイツ各地、ベルギーなどをまわる3年半の西方旅行へ出発した。各国の王侯貴族の前に演奏の腕前を披露し、驚嘆させたモーツァルトであったが、それぞれの国で音楽的に大いなる刺激を受け、作曲活動を本格的に開始したということは重要である。

◎ パリとロンドンの音楽家たちからの影響

当時パリでは、器楽の分野でドイツ系音楽家たちが活躍しており、クラヴィーア（ピアノ）演奏ではショーベルトやエックルトなどがもてはやされていた。このときに作曲されたモーツァルトのソナタ（K 6～9）には、彼らの影響がみとれる。またロンドンで作曲された最初の交響曲では、当時この地で活躍していた大バッハの末子、クリスティアン・バッハの影響が顕著にあらわれている。幼くも他人の音楽を自分の作品のなかに消化吸収する術を、モーツァルトは心得ていたのだ。

旅先でのひとと音楽との出会いは、モーツァルトにとってかけがえのない財産となった。とくにこの旅行でのクリスティアン・バッハとの出会いは、旅によってもたらされたもっとも重要な出会いとなった。クリスティアンの明るく軽やかな器楽様式は、モーツァルトの作曲語法の一部となるほどに、強烈な影響を与えている。

3年半に及んだ大旅行の経路



ヨーロッパ随一の都市、ロンドン



当時のロンドンの風景。一家は西方への大旅行での約1年3カ月間をこの都市で過ごした。18世紀のロンドンは、経済的な繁栄や民主的な諸制度の運営などにより、ヨーロッパのなかでもとくに発展を遂げており、自国の音楽家には恵まれなかったものの、積極的に外国からの音楽家を受け入れていた。

イタリア旅行

◎ 作曲家の巡礼聖地、イタリア

1770年、イタリア旅行中にレーオポルトは馬車の事故に遭い右足に大怪我を負ってしまう。旅は常に危険と隣合せだった。しかしそうではあってもイタリアを旅するには大きな理由があった。

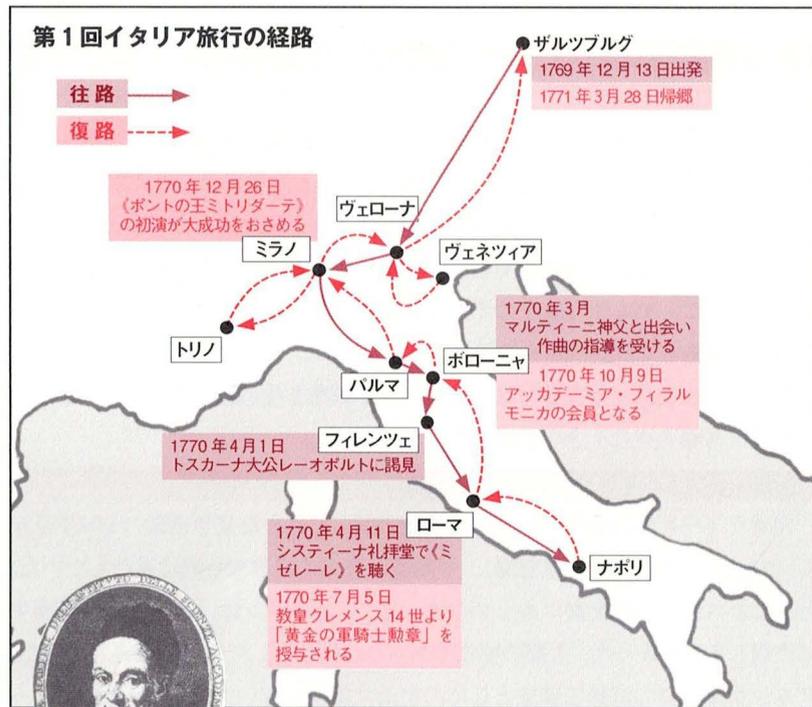
モーツァルトの生きた時代、アルプスより北の音楽家にとってイタリアへの憧憬はつよいものであった。音楽家として大成するには、オペラの作曲を抜きには考えにくいこともあって、オペラ発祥のこの地は、いわば音楽家たちの巡礼聖地となっていた。ロンドンで親交を結んだクリスティアン・バッハや、バロックの巨匠ヘンデルなど、モーツァルトの先輩作曲家たちも、やはりイタリアを目指したのであった。モーツァルトは3度この地を旅しているが、作曲家として成功し名をあげることを夢みていた彼にとって、イタリアはほかの国々とはまた違った特別な意味をもっていた。

◎ 栄光と思い出

イタリアでのモーツァルトは本場のオペラや歌手のさまざまな個性と能力に触れ学ぶことも多かったが、器楽の面でも収穫があった。ボローニャでの大音楽理論家マルティーニ神父との出会いは特筆すべきことで、モーツァルトは師から対位法などの作曲の指導を受けることができた。

またこの地への旅にもたくさんのエピソードが残されている。有名なのは、ローマのヴァチカン宮のシステーナ礼拝堂を訪れたときのものだろう。1770年、1回目のイタリア旅行の折、父子はここでしか聴けないという秘曲《ミゼレーレ》を聴くためにこの礼拝堂へとやってくるが、モーツァルトは一度聴いただけでこれを覚え、楽譜に書き上げてしまった。そのローマで教皇クレメンス14世から「黄金の軍騎士勲章」を授与され、またボローニャでは由緒あるアカデミア・フィラルモニカに14歳で入会を認められている。
(→口絵V)

● 栄光に満ちたイタリア旅行



マルティーニ神父

イタリアの作曲家、音楽理論家。モーツァルトはマルティーニ神父のもとで、古い音楽の技法（対位法）を学んだ。神父は深い愛情をもってこの少年作曲家を指導し、ボローニャのアカデミア・フィラルモニカの会員になるための試験を受けさせた。（対位法の技法を用いて作曲をするという試験の結果は、満場一致でこの少年を会員に推挙するというもの。会員資格は通常満20才以上で、14歳の少年が入会することは例外中の例外だった）

3回のイタリア旅行	
1回目	1769年12月13日 ～1771年3月28日
2回目	1771年8月13日 ～1771年12月15日
3回目	1772年10月24日 ～1773年3月13日

ウィーン旅行②

◎ 難航する就職活動

1773年7月、17歳のモーツァルトは、父レーオポルトと3度目のウィーン旅行を試みた。第1回の旅行で、神童モーツァルトをおおいにもてはやしたウィーン宮廷の態度は、第2回、第3回の旅ではだんだんと冷やかなものになっていった。第2回には作曲家たちによる嫉妬によってオペラ上演を阻止されるという事件が起こり、この3回目の旅行でも、サリエリ、ホフマンをはじめ多くの優れた作曲家がひしめくこの地ではザルツブルク出身の青年作曲家が活躍する機会を掴むのは難しく就職活動も挫折に終わった。

しかし、音楽的には前2回以上に大なる刺激を受けることができ、この短い旅行は音楽人生に大きな意味をもつことになる。

◎ ヨーゼフ・ハイドンの音楽との出会い

当時ウィーンの音楽界ではドイツ各地で盛んであった文学活動〈シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）〉の潮流が音楽の世界でも同時進行していた。とくにオペラ作曲の大家グルックやヨーゼフ・ハイドンは、それまでの音楽では表現しきれなかった、人間の感情をあらわに押しだした作品を発表していた。ザルツブルクでの宮廷音楽家としての生活に退屈していたモーツァルトにとって、それは大変刺激的なものであった。ハイドンの弦楽四重奏曲は、1760年代から出版楽譜によってすでにヨーロッパ各地に広まっていたが、モーツァルトは3回目に訪れたウィーンでハイドンを手本に6曲の弦楽四重奏曲を作曲した。その8年後にモーツァルトはハイドンと運命的に面識をもつことになる。

また旅行中、彼はよく姉ナンネルに宛てて父の手紙に添え書きをつけた。イタリア旅行でもそうであったが、それらは陽気で明るいおしゃべりに終止している。ときにはラテン語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、英語とめまぐるしく変わる手紙も書いた。どこにいても常にユーモアは忘れなかったようだ。

第3回 ウィーン旅行のモーツァルト

就職活動は思うようにいかなかったが、故郷宛のレーオポルトの手紙の添え書きから、皮肉をいながらも元気に過ごしていた様子がわかる。

追伸 ヴォルフガング坊やは手紙を書いている時間がない。というのは、何もすることがないのだ。彼は部屋のなかを歩きまわっているよ。蚤をとって犬のようにね。

1773年9月8日の添え書き。まるで父親が書いたように、客観的に自分をみている。

らなうよさ。—ゲンガフルォヴ・トルア
ツ—モ。ニーヴ 日21月8年3771

oidda.- gnagfloW Trazom
neiW ned 12 tsugua 3771

1773年8月21日の添え書き。「Trazom」はモーツァルトが後年愛用したアナグラム。



ウィーンのミハエル広場とブルク劇場。今回の旅行ではウィーンでの就職活動は失敗に終わったが、のちにこの地に定住したモーツァルトは、ブルク劇場で数々の自作品を発表する。

マンハイム・パリ旅行

◎ わかり合える仲間たちとの出会い

マンハイムの宮廷は、ヨーロッパ随一の楽団をもっていた。モーツァルトはこのオーケストラを「大変立派で強力です」と高く評価し、そのダイナミックな表現法や演奏技法から多くのことを学んだ。またここでは、宮廷楽団長クリスティアン・カンナビヒをはじめ素晴らしい音楽家と親しく交流をもつこともできた。ザルツブルクとちがひ、ここの人びとはモーツァルトの才能を認めてくれたのだった。

マンハイムはまた、21歳の青年モーツァルトが青春の思い出を若き女性たちと紡いだ場所でもあった。彼はここで幾人かの女性たちとの触れ合いを楽しんだ。カンナビヒの娘ロジーナ・ペトロネッラや、フルート奏者ヴェンドリングの娘エリーザベト・アウグステに曲をつくってあげたり、アウクスブルクの従妹マリア・アンナ・テークラ（ベーズレ）へは、たいへんおどけた親しげな手紙（ベーズレ書簡）の1通目をここで書いたりした。しかし、そのなかでも写譜師プロンプターの娘アロイジア^(→p138)に対しては本当の恋をするのだった。

◎ 実り多い旅の成果

1777年9月23日から約1年4カ月にわたるマンハイム・パリ旅行は、第一の目的の就職活動という面では失敗に終わったが、真剣な恋愛を経験し、パリでは最愛の母を亡くす悲しみを味わい、人間としての機微^{きび}を学ぶ旅となった。

音楽の面でも、大きな影響を与えられた。パリで作曲された《パリ交響曲》は素晴らしいダイナミズムをもち大好評を博し、ほかにも、あくまで優雅でフランス的な《フルートとハープのための協奏曲》、悲しみを秘めた名曲《イ短調ピアノ・ソナタ》や《ホ短調ヴァイオリン・ソナタ》、アロイジアに捧げたアリア《テッサーリアの人びとよ》など、数多くの名作がこの旅行中に生みだされた。

マンハイムの友人たち



クリスティアン・カンナビヒ
マンハイム楽派を代表する人物



アントーン・ラーフ
ヨーロッパ各地で活躍していたテノール歌手



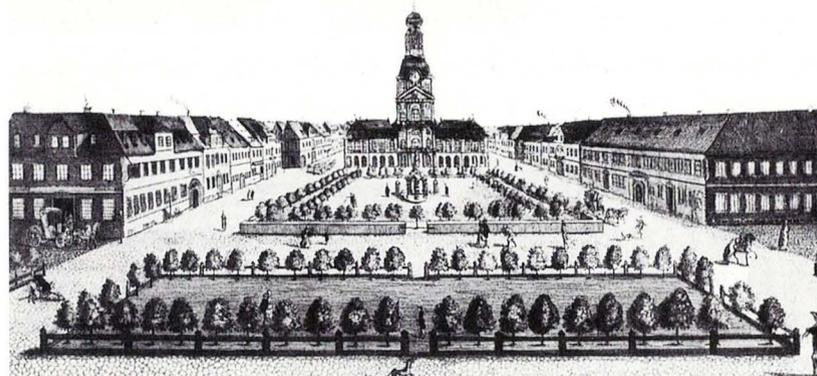
ヨハン・バプティスト・ヴェンドリング
みことな演奏をするフルート奏者



エリーザベト・アウグステ・ヴェンドリング
ヴェンドリングの娘で、マンハイム宮廷劇場の歌手



アロイジア・ヴェーバー
宮廷劇場の歌手兼写譜家のフリードリヒン・ヴェーバーの娘。歌手の卵



マンハイムのパラデ・ウント・フロムナーデン広場（1779年）

ミュンヘン旅行

◎ ミュンヘンでの思い出

モーツァルトにとって人生はじめての旅はミュンヘンへの旅だった。3週間という短い滞在ではあったが、選帝侯マクシミリアン3世に御前演奏して評判をとり、6歳の誕生日はこの地で迎えている。その後モーツァルトは度々ミュンヘンを訪れている。オペラの作曲の依頼を受け、上演したり、滞在中に舞踏会で楽しく過ごしたりと、この地にはたくさんの思い出ができた。

次のミュンヘン滞在は1774年18歳の冬、選帝侯のマクシミリアン3世に依頼されて作曲したオペラ・ブッファ《偽りの女庭師》の初演のためだった。このオペラは大成功をおさめ、客席からは「万歳マエストロ！」の叫び声が響いたという。また2月中旬までのあいだ、モーツァルトは、毎日のように仮装舞踏会に出席し、ミュンヘンでの華やかな日々を謳歌したのだった。

◎ 《イドメネーオ》の成功

彼はマンハイム・パリ旅行の行き帰りにもミュンヘンに立ち寄っている。父レーオポルトに、ザルツブルクへ戻るよう再三せまられていたが、その前にひとりミュンヘンを訪れたのは、アロイージアに会うためだった。しかし彼の愛は無残にも拒まれてしまう。モーツァルトの失恋の悲しみは、父への手紙のなかにはあらわれている。「僕は生来字が下手ですが、今度ほど下手に書いたことはありません。書けないのです。——僕の心は泣きだしそうなのです」1778年、モーツァルト22歳のことだった。

3回目のミュンヘン旅行は、1780年24歳の秋で、選帝侯カール・テオドールの依頼によるオペラ《クレータの王イドメネーオ》の上演のためである。このときの旅は厳しく「馬車の椅子は石のように硬く、お尻をミュンヘンにもっていけないのじゃないかと心配したほど」だったとモーツァルトは記している。一方オペラの方は大成功をおさめたのだった。

ミュンヘンでの《偽りの女庭師》初演と仮装舞踏会

ありがたいことです！ ぼくのオペラは昨日13日に上演されました。これは本当にうまくいきました。ママには説明できないくらいです。第1に劇場は満員で、たくさんのお客が引き返さなければなりません。アリアが終わるたびにどよめきと拍手、そして「万歳マエストロ！」の叫びです。

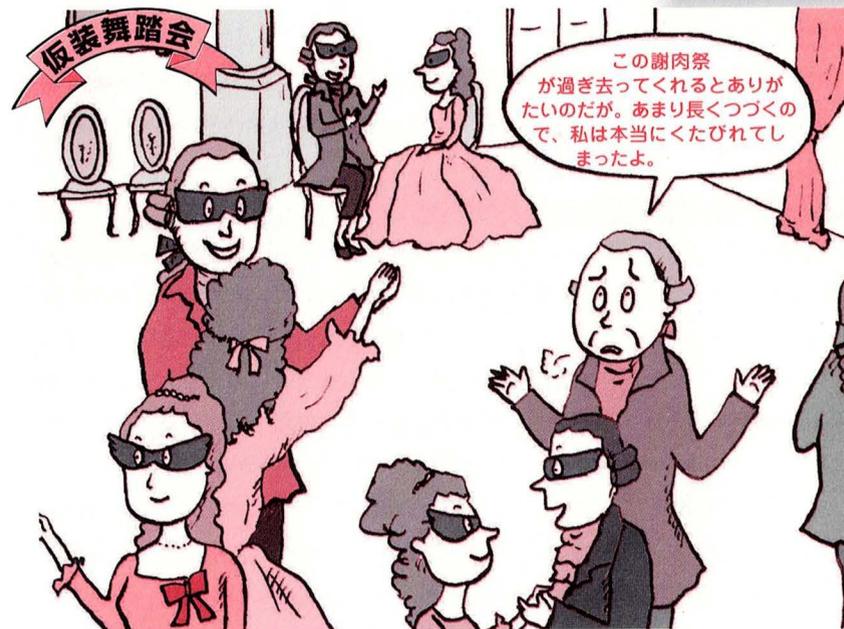
1775年1月14日 モーツァルト

《偽りの女庭師》の大成功の様子を、モーツァルトは母に報告している。

驚くべき天才モーツァルトのオペラ・ブッファを聴いた。天才のきらめきがいいたるところに輝いていたが、……まだそれは神々にとって好ましい香りではない。もし彼が温室育ちの植物でないのであれば、もっとも偉大な作曲家のひとりとなるにちがいない。

『ドイツ年代記』より

クリスティアン・シューバルト



1775年2月2日付のレーオポルトの手紙より

プラハ旅行①

◎ モーツァルトを愛したまち・プラハ

ウィーン時代のモーツァルトは、1791年の死の年までのあいだに、3度プラハを旅している。プラハ旅行は自作オペラの上演に関係する旅であった。1787年1月、モーツァルトは妻コンスタンツェとともに始めてプラハを訪れる。前年に作曲された《フィガロの結婚》がプラハで圧倒的な人気を得たため、招待されたのである。プラハのまちは《フィガロ》の話でもちきりだった。モーツァルトは《フィガロ》の上演や演奏会で、1000フローリンもの大金を得ることができた。このときに初演された交響曲第38番ニ長調（K504）には、のちに《プラハ》の名がつけられた。

《フィガロ》は当時の貴族批判、社会批判の要素を含んだオペラだが、プラハでは逆にこのような反体制的な作品が好まれた。とくにプラハの音楽愛好家たちは、《フィガロ》を愛してやまなかった。そして新作オペラの作曲も依頼された。

◎ 《ドン・ジョヴァンニ》初演

新作オペラ《ドン・ジョヴァンニ》の初演は、プラハのひとたちがオペラ上演のノウハウを、ウィーンの楽壇ほどには心得てはいなかったためもあり、予定よりも遅れている。しかしそれがよい結果を生んだ。もともと皇帝ヨーゼフ2世の妹マリア・テレージア皇女が許婚ザクセン公アントーンをとまない訪問する際の歓迎用のオペラとして作曲を依頼されたものだったが、死に始まり死に終わるこのオペラは、祝典用の内容にはそぐわなかったからだ。

10月14日の祝典用にはプラハ市民のお馴染みの《フィガロ》が上演された。新作は半月遅れの10月29日プラハで初演された。翌年5月におこなわれたウィーンでの初演ではかなり冷やかな反応を受けることになったが、この土地では《フィガロ》を超える熱狂ぶりで大成功をおさめた。

● プラハでの成功

コントルダンスやドイツ舞曲に変身したぼくの《フィガロ》の曲で、みんなが楽しく心から満足して飛び跳ねて踊っているのを見て、ぼくは本当に嬉しくなったよ。この街では《フィガロ》の話でもちきりです。弾くもの、吹くもの、歌うもの、口笛吹くもの、すべて《フィガロ》ばかり。オペラを観に行くといえば《フィガロ》だけ。いつまでも《フィガロ》だ。確かにぼくにとっては大変な名誉だよ。

1787年1月15日 モーツァルト

ウィーンの親友ジャカンに宛てた手紙より

● ドゥーシェク夫妻とベトラムカ荘

プラハのソプラノ歌手、ドゥーシェク夫人（ヨゼーファ）。モーツァルトとは1777年以来的の知り合い。モーツァルト夫妻がプラハを訪れると、作曲家の夫とともにあたたかい配慮をもって迎え入れた。



プラハ郊外にあるベトラムカ荘。ドゥーシェク夫妻はモーツァルトの作曲が進むようにと、この閑静な別荘を提供してくれた。《ドン・ジョヴァンニ》の作曲はここでつけられた。

ヨゼーファ・ドゥーシェク

ベルリン旅行

◎ バロックの音楽史体験の旅

ベルリンは、バロック時代の伝統を色濃く残すまちであった。数年前に、ヴァン・スヴィーテン男爵を通じて、大バッハやヘンデルをはじめとするバロックの厳格な対位法の芸術に魅せられ、その作曲技法を完全に身につけていたモーツァルトにとって、この旅行はそのバロックの本場を体験する大変印象深い旅行となった。1789年33歳のモーツァルトはフリーメイソンの盟友リヒノフスキー侯爵とベルリンへ向かったのだった。

ベルリンに到着すると、王立劇場では偶然にもモーツァルトのオペラ《後宮からの奪還》が上演されていた。モーツァルトはお忍びで聴きに入るが、ヴァイオリン奏者が半音間違っで演奏していたため我慢ならず罵声をとばし、正体が知られてしまったというエピソードも残されている。

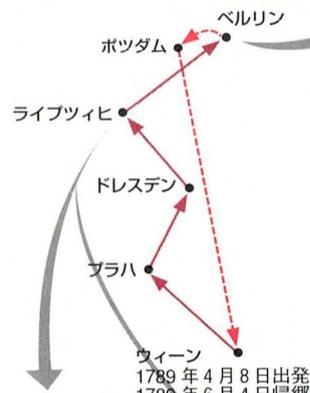
◎ 弦楽四重奏曲の依頼

プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世は、無類の音楽愛好家で、宮廷を訪問した音楽家らに高額な報酬を与えることで知られていた。この旅行には、現実的には経済状況の悪化を打破すべく国王に謁見するという目的があった。このころ妻の脚の病気はかなり重く莫大な費用がかかったため友人へ借金の申しこみを重ねなければならないほどであったのだ。

ベルリンでモーツァルトは国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世の御前で演奏をおこない、チェロを弾きこなす国王のために6曲の弦楽四重奏曲と、王女フリーデリーケのためにはやさしい6曲のピアノ・ソナタを依頼された。それは経済的に困窮していた彼にとっては願ってもないチャンスだった。しかし、ウィーンに戻った彼にはこれらの依頼すべてを書き上げる余裕はなかった。妻の病気で経済状態がさらに悪化し、もっと早く確実に金を工面する方法を考えねばならなかったのである。

バロック音楽の故郷、北ドイツへの旅

モーツァルトが敬愛した大バッハや、その弟子たちが残る北ドイツでは、モーツァルトはあたたかく迎え入れられた。



フリードリヒ・ヴィルヘルム2世への謁見許可を求める上申書

ここにモーツァルトと申すものが、リヒノフスキー侯爵と一緒に、「国王陛下に自分の才能をご披露申し上げたく参上しました。陛下がお召しなさればただちに伺いたくご下命を待ち望んでおります」と申し立てております。

1789年4月26日



フリードリヒ・ヴィルヘルム2世

モーツァルトはフリードリヒ・ヴィルヘルム2世からかなり好意的に迎えられ、ベルリン滞在中毎日のように国王の御前で即興演奏をしなければならなかった。モーツァルトがベルリンに留まるなら相当額の支給をするという申し出までであったといわれている。前任のフリードリヒ大王の時代には大バッハもここを訪れ、傑作《音楽の捧げ物》を作曲している。



ライプツィヒの聖トーマス教会。

晩年の大バッハはこの教会の合唱長をつとめ、バロックの最高傑作を数多く生みだした。それから半世紀以上のちの1789年4月22日、ここを訪れたモーツァルトはオルガンで即興演奏をおこなった。そこには大バッハの愛弟子のドーレスも臨席していたが、音楽著述家のロホリッツによれば、そのドーレスは「老バッハが蘇ったようだ」と語ったという。



『ライプツィヒ新聞』

1789年5月12日

本日、5月12日、皇帝国王陛下に仕える現職楽長のモーツァルト氏が、ライプツィヒの大演奏会場で音楽会を開きます。チケットは1グルデン、アウエルバッハ館のロスト氏のところか、会場の入り口で購入できます。開演は6時。

コンサート・プログラム

皇帝室宮廷楽長モーツァルト氏の音楽会
ゲヴァントハウスのホールにて 1789年5月12日(火)

第1部	第2部
交響曲	ピアノ協奏曲
シエーナ(ドゥーシェク夫人)	シエーナ(ドゥーシェク夫人)
ピアノ協奏曲	ピアノのための幻想曲
交響曲	交響曲

これらはすべて楽長モーツァルトによる作品です。

プラハ旅行②

◎ 人生最後の旅

1791年秋、ボヘミアの首都プラハでは華々しい祝典が催された。神聖ローマ皇帝になったレーオポルト2世がボヘミア王としてプラハで戴冠式を催すことになったのだ。その祝典のために作曲された、オペラ《ティート帝の慈悲》を上演するため、モーツァルトは妻のコンスタンツェと弟子のジュースマイヤーをともないみたびプラハを訪れた。

王妃は「お粗末なできばえのドイツもの」とこのオペラを厳しく評したが、プラハ市民たちは惜しめない拍手を送った。この祝典では、4年前にこの地で初演されて大成功をおさめ、いまやプラハの誇りともなった《ドン・ジョヴァンニ》も再演された。

家財を抵当に入れてまで決行した前年のフランクフルトへの旅行は完全に失敗に終わり、加えてこのころモーツァルトの病気は進行し、体力的にも辛いものだった。その彼にとって旅先の聴衆の温かい歓声は、心のやすらぎをおぼえさせるものだっただろう。一行は9月上旬にプラハを発った。しかしこれが彼の生涯にわたる旅の最後となったのである。死の3カ月前のことだった。

◎ プラハのモーツァルト讃

ウィーンでは冷遇されるようになってしまっても、プラハでのモーツァルトの名声は衰えることはなかった。プラハは夫妻にとって特別なまちであり、このまちもまたモーツァルトを愛したのだ。モーツァルトの死はすぐにプラハに伝えられた。死の9日後には作曲家追悼のための荘厳ミサが執りおこなわれている。その後もプラハの〈親モーツァルト・サークル〉の人びとは、モーツァルトの遺族に対してなにかと心遣いをしてくれた。最初の独立したモーツァルト伝であるニーメチェクの『宮廷楽長ヴォルフガング・ゴットリーブ・モーツァルトの生涯』（1798年刊）が出版されたのもこのプラハの地であった。

モーツァルトのプラハ



国立劇場（ティル劇場）の内部写真。1786年に《フィガロの結婚》がプラハ初演で大ヒットとなり、つづく1787年の歴史に残る《ドン・ジョヴァンニ》の世界初演で、プラハとモーツァルトのつながりは確固たるものとなった。さらに死の年、1791年には《ティート帝の慈悲》が世界初演されている。



聖ミクラーシュ教会とプラハの街並み。モーツァルトの死後5日後、ウィーンのみハイル教会ではシカネーダーらによる追悼ミサがおこなわれたが、そのあとすぐに追悼の意をあらわしたのはプラハの街だった。12月14日には、聖ミクラーシュ教会にてモーツァルト追悼のための荘厳ミサがとりおこなわれた。ミサでは晩年にモーツァルト夫妻のよき友人でもあったドゥーシェク夫人も歌を捧げている。

18世紀の旅の常識

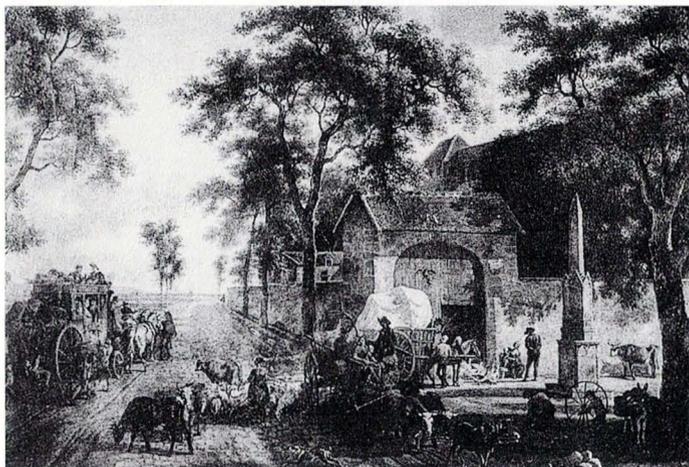
天才を開花するために

18世紀のヨーロッパでは、道路整備や馬車の改良などにより、旅をするひが多くなった。旅の目的はさまざまであったが、勉学のための旅も多かった。

モーツァルトの父も、息子の天才を開花させるためには各地のさまざまな音楽に直接触れさせることが不可欠だと考え、幼い頃から息子を旅に連れていった。モーツァルト自身も、パリから父に宛てた手紙のなかで「優れた才能の持ち主は、いつも同じ土地にいたらだめになります」と書いている。しかし、当時の旅は今のように快適ではなく、命の危険さえともなうものであった。

旅は危険と隣り合せ

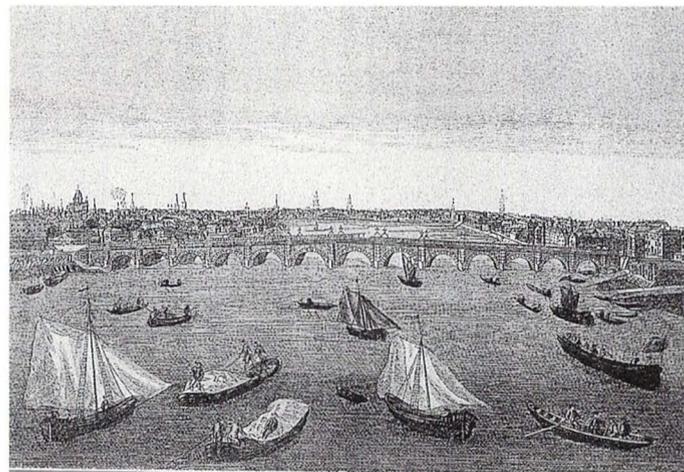
18世紀の陸路の旅は、徒歩か馬車でおこなわれた。馬車には、自家用馬車、貸馬車、乗合の駅馬車があった。一般庶民は徒歩のことも多かったが、貴族や富裕な市民は自家用馬車が多かった。馬車をもつことは馬も数頭飼うことで



当時の馬車旅行の図

あり、かなりの経費を必要とした。それでもモーツァルト家は1762年の2回目の旅行のときに旅先で中古ながら有蓋4人乗りの馬車を購入している。当時の駅馬車は無蓋か半蓋のものが多く、駅馬車での冬の旅は健康にも影響を及ぼすほどの耐え難いものであった。多くの旅を計画していたモーツァルトの父は、息子と家族の健康を考え、思い切って馬車を購入したのであろう。

当時の馬車の乗り心地は悪かった。道路整備がよい国でも、道路は凹凸のある石畳である上、馬車の車輪は木製のものを鉄のベルトで補強したものであったため、騒音も振動も相当ひどかった。車輪や馬のトラブルで馬車が転覆し、死亡事故さえあったのだ。そのため、車輪の手入れやチェックをこまめにし、宿駅ごとに馬をとり替える必要があった。河川や運河を利用できるときは、振動のない船旅の方が快適だったようである。



ロンドンのウェストミンスター橋と行き交う船の風景 1770年頃

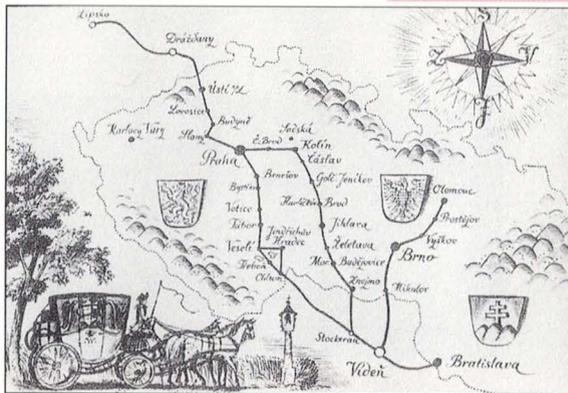
旅の備えは万全に

宿も、大都市の宿は快適だったが、料金が高く、モーツァルト家はできるだけ貴族の館や修道院などに寄宿している。田舎の宿では虫に刺されて眠れないこともしばしばで、シーツなどの寝具を持参することも多かった。治安も悪く、盗賊に襲われて金品や、ときには命までもが奪われることもあった。そのため、旅人とは親しくせず、旅の目的やいき先などは教えないのが常識であった。銃の持参や、夜の移動を避けるなどの配慮も必要だった。さらに、旅に出る前に遺言書の作成も奨められた。当時の旅はそれほどまでに危険なものであったのだ。それでも旅は重要なものと考え、生涯のおよそ3分の1を旅で過ごしたモーツァルト。無事であったのは、運がよかっただけではなく、十二分な準備と注意を払って旅行に臨んだからであった。



1775年ハンブルク製の旅行のガイドブック

モーツァルトの旅程図



Part 4

モーツァルトのおもひで

～タイムマシンに乗って～

息子として、夫として、友人として、憧れの先輩として——。モーツァルトは18世紀をともに生きた人びとも、19世紀の作曲家たちにも、大きな足跡を残した。彼らにとってモーツァルトへの思いとは？

モーツァルトをとりまく人びと

◎さまざまなひとに支えられて

モーツァルトは生涯にわたって数多くの人びとと関わりをもった。彼をとりまくひとの輪は、家族や親類はもちろん、友人、知人、作曲家、演奏家、弟子、写譜家、出版者、画家、文人、知識人、医者、王侯貴族など、多彩をきわめている。そのなかには、一度だけの出会いもあったし、生涯にわたって関わりをもったひととも、ザルツブルクの家主ハーゲナウアーのように家族ぐるみでつき合いのあった人物もいる。コロレード大司教のようにモーツァルト自身が嫌った存在や彼の活動を妨害した者、彼を高く評価してくれたヨーゼフ2世も、彼の天才を試験したバリントンのような学者も、旅先での母の死を父に知らせる役目を頼まれたプリンガーのような親友も、度重なる借金の申しこみに最後まで応じたプフベルクのような支援者もいるのだ。そうした多彩な人びととの関わりがモーツァルトの音楽を豊かなものにしたのである。

◎天才は多くの人びとによってつくられた

モーツァルトを幾重にもとりまく多様な人間模様の輪のなかで、彼に大きな影響を及ぼした作曲家だけに限ってみてもその数は驚くほど多い。生地ザルツブルクの作曲家のなかではミヒャエル・ハイドンが重要である。さらに、旅先で影響を受けた数多くの作曲家のなかでは、パリのドイツ系作曲家エツカルトやショーベルト、交響曲の創作へと導いたロンドンのクリスティアン・バッハや、イタリアのパイシエッロ、ヨンメッリといったオペラ作曲家たち、ポーロニヤで対位法を習ったマルティエーニ神父、カンナビヒをはじめとするマンハイム宮廷の作曲家たち。ウィーン時代では、ヨーゼフ・ハイドンとスヴィーテン男爵を通じて知ったバロックの巨匠大バッハやヘンデルの影響であろう。このように、モーツァルトは、生涯にわたって常に新しいものを学び、それを自分のものにする努力をすることによって、その音楽をより豊かなものに高めていったのである。

モーツァルトの生涯の多彩な登場人物



ヨーゼフ2世



ミヒャエル・ハイドン



コロレード



マルティエーニ神父



クリスティアン・バッハ



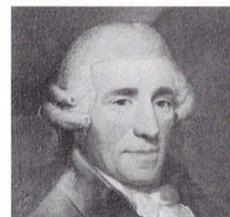
グリム



ドゥーシェク夫人



サリエーリ



ヨーゼフ・ハイドン



ヴァン・スヴィーテン



ダ・ポンテ



カンナビヒ

天才モーツァルトを育て上げた父、 レーオポルト

◎ 父は知的な宮廷音楽家

モーツァルトの父ヨハン・ゲオルク・レーオポルト・モーツァルト（1719～87）。天才モーツァルトを世に送りだした一番の功労者である。彼もまた18世紀のザルツブルクを代表する音楽家のひとりであった。彼はアウクスブルクで製本師の長男として生まれたが、18歳のとき大学に入るためにザルツブルクにきた。しかし結局好きだった音楽の道に進み、24歳で大司教宮廷楽団ヴァイオリン奏者となる。作曲家、音楽教師としても活躍。優れた音楽理論家でもあった彼は、息子モーツァルト誕生の年に18世紀演奏論の名著『ヴァイオリン教程』を出版、40歳で副楽長に就任した。このような経歴からわかるように、レーオポルトは知的で有能な音楽家であった。そんな父であったからこそ、息子の楽才をいち早く見抜き、その才能をみごとに開花させることができたのだ。

◎ 息子のために捧げた生涯、しかし最後はひとり寂しく

まだ3歳の息子がピアノで3度の和音を鳴らして遊び始めたとき、父は息子の稀有な楽才に気づき、さっそくピアノを教え始める。息子はみるみる上達。そして5歳になった息子が小品をつくったとき、父は息子の天才を確信する。以来父は息子の才能を広く世のなかに知らしめ、その天才を十二分に開花させることが、自分の使命であると考え、用意周到な計画のもと、全力で息子の教育にあたる。まず自らが音楽のみならず、語学や算数などの勉強も教え、さらに多種多様な音楽的、社会的経験を積ませるために、当時の主要な音楽都市への旅行をおこなった。こうして彼は息子の天才を開花させるのに成功し、使命をみごと果たしたのである。しかし、息子が成人すると次第に親子の関係に亀裂が生じ、やがて息子は父に反旗を翻してウィーンに移住、父の反対を押し切って結婚する。その後ウィーンを訪れ、息子の活躍を確認できた父ではあったが、娘も結婚して離れてしまい、晩年は寂しい生活のなか、67歳でその生涯を終えたのである。

ヨハン・ゲオルク・レーオポルト・モーツァルト



レーオポルト・モーツァルト著『ヴァイオリン教程』

profile

- 1719年 アウクスブルクにて誕生
- 1737年 ザルツブルクに移住
- 1743年 ザルツブルク大司教にヴァイオリン奏者として仕える
- 1747年 マリーア・アンナ・ベルトゥルと結婚
- 1751年 ナンネル誕生（3男4女7人の子どもが生まれたが、生きのびたのは4子ナンネルと末っ子ヴォルフガングのふたりだけ）
- 1756年 ヴォルフガング誕生
- 1756年 『ヴァイオリン教程』出版
- 1757年 宮廷作曲家に任命される
- 1758年 次席ヴァイオリン奏者に任命される
- 1763年 副楽長となる
(以後息子ヴォルフガングの教育に力を注ぐ)
- 1787年 ザルツブルクにて死去

ナンネルが伝えたレーオポルトの姿

父の7人の子どものうち、娘マリーア・アンナとこの息子ヴォルフガング・ゴットリーブだけが生き残りました。そのため彼はヴァイオリンを教えることも作曲することも放棄してしまい、宮廷に仕える以外の残りの時間を、ふたりの子どもたちの教育のために費やしました。ヴォルフガングが4歳のとき、父は遊びがてらにピアノでいくつかのメヌエットや小曲を教え始めました。それは父にとっても子どもにとってもなんの苦にもならなかったのです。

ナンネル

モーツァルトの死後、彼の『死者小伝』を執筆すべく資料の提供を求めたドイツの史家シュリヒテグロルの質問に対して姉のナンネルが答えた文章には、子どもたちのために熱心に教育を施す父の姿が見える。

モーツァルトに明るさを与えた母、 マリーア・アンナ

◎ 陽気な性格と音楽的な遺伝子を伝える

モーツァルトは顔立ちも性格も母親譲りであるとよくいわれる。確かに肖像画をみると、モーツァルトは父親よりも母親に似ている。また、手紙などの資料からみる限り、モーツァルトの天衣無縫で陽気な性格は、几帳面で謹厳実直な父親に似ているとはいえず、おおらかな母親に通じている。しかし、最も重要なことは、モーツァルトが父親からだけでなく、母親からも音楽的な遺伝子を受け継いでいるということである。

母マリーア・アンナ（1720～78）自身に音楽の才能があったかどうかはわからないが、ザルツブルク大司教宮廷に仕える地方管理官であった彼女の父、つまりモーツァルトの祖父ヴォルフガング・ニコラウス・ベルトゥルは、若い頃聖ペテロ大修道院聖歌隊のバス歌手でもあったのだ。

◎ 良妻賢母の鏡

父の赴任地ザンクト・ギルゲンで生まれたマリーア・アンナは、3歳のときに父が急逝すると、母姉とともにザルツブルクに移り住む。その後の暮らしぶりもレーオポルト・モーツァルトとの馴初めも不明だが、26歳で結婚した。結婚後のふたりは、残された手紙を読むと、子供に深い愛情を注ぎ、お互いを思いやる仲睦まじい夫婦であったことがわかる。当時、妻は夫に忠実に従って家族の世話をし、家計も夫の管理下でやりくりするのが良妻賢母とされたが、モーツァルトの母もまさにそんな女性であった。しかし、そんな母が、21歳の息子のマンハイム・パリ旅行に夫に代わって同行するという大役を担わされることになる。すべて夫の指示に従って行動すればよかつたとはいえ、父から精神的自立をし始めた息子と、それを受け入れることができない夫とのあいだにたち、知り合いもない旅先での精神的負担がどれほど大きかつたか計り知れない。気候にも順応できず体調を崩した母はパリで病死する。享年57歳であった。

マリーア・アンナ・モーツァルト



1775年頃のマリーア・アンナ

profile

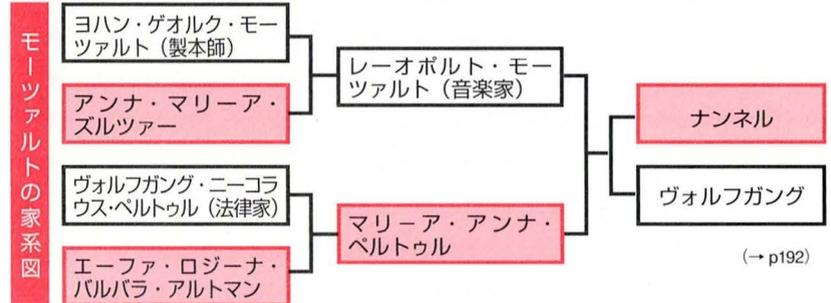
- 1720年 ザンクト・ギルゲンにて誕生
- 1747年 レーオポルト・モーツァルトと結婚
- 1751年 ナンネル誕生
- 1756年 ヴォルフガング誕生
- 1777年 息子ヴォルフガングとふたりでマンハイム・パリ旅行へ出発
- 1778年 パリにて死去

さようなら。ふたりとも元気でね。あなたたちに何千回もキスします。私はあなたの誠実な妻です。もう終りにします。腕と手が痛みますので――。

1778年6月12日

マリーア・アンナ

パリで家族宛に書いた最後の手紙より



モーツァルトと同じように 音楽の才能に恵まれた姉、ナンネル

◎ 華やかな少女時代

モーツァルトには姉がひとりいた。その名はマリーア・アンナ・ヴァルブルガ・イグナーツィア (1751 ~ 1829)。モーツァルトとは4歳半違い、ナンネルの愛称で呼ばれていた。実は彼女も幼い頃から楽才を示し、7歳のときに父がピアノを教え始めた。上達は目覚しかったが、レッスンを始めてまもなく父は息子の類い稀な楽才に気づき、その教育に夢中になる。それでも少女時代は彼女も弟と一緒に演奏旅行に出かけてみごとなピアノの演奏を披露し、神童姉弟との評判を得ていた。しかし、ヴォルフガングの才能があまりにも稀有なものであったために、ナンネルはその後次第に表舞台には立たなくなり、家で弟と連弾を楽しんだり、父のヴァイオリンの伴奏をしたり、ピアノを教えたりするに留まった。

◎ モーツァルトの成長を見守った、貴重な生き証人

几帳面で思慮深い父親譲りの性格だった姉は父に従順で、自分の置かれた状況を受け入れ、弟の活躍を見守った。子どもの頃からとても仲のよかった弟はそんな姉にピアノ曲を書いて贈ったり、旅先から手紙で曲への意見を求めたりしている。しかし、弟が父に背いてウィーンに移住し、父の反対する女性と結婚すると、姉弟の心は離れていく。母が亡くなったあと父の世話を強いられていた姉は好きなひととの結婚もままならず、そんな姉に弟はピアノの腕を生かしての自立を勧める。しかし姉は父に逆らうことはできず、32歳でようやく父が選んだ5人の子どもの資産家の官吏と結婚する。弟とはますます疎遠になり、父の死も知らせなかった。姉のかつての恋人から父の死と遺言状のことを知らされた弟は、遺産をめぐる姉と争うことになる。遺産がどのように処理されたかは不明だが、その後姉弟は絶縁状態となる。

弟の死後の姉は生き証人として弟の初期の伝記に貴重な情報を提供する。やがて夫の死後故郷に戻った姉は盲目となり、79歳という高齢で生涯を終えた。

マリーア・アンナ・ヴァルブルガ・イグナーツィア (ナンネル)



profile

- 1751年 ギルツブルクにて誕生
- 1756年 弟ヴォルフガング誕生
- 1759年 音楽の勉強を始める
(少女時代は弟とともに各国の宮廷で御前演奏をする)
- 1784年 ベルヒルト・ツッ・ゾンネンブルクと結婚
ザンクト・ギルゲンの母の生家で暮らす
- 1791年 弟の死後、日に日に高まるモーツァルトの名声とともに、モーツァルトに関する証言を求められることが多くなる
- 1801年 未亡人となり、ギルツブルクへ戻ってピアノ教師として生計をたてる
- 1825年 視力を失う
- 1829年 ギルツブルクにて死去

11歳のナンネルの肖像。最近この服は女帝マリア・テレジアから贈られた皇女の服ではないとされた。

父のつくってくれた 『ナンネルの練習帳』

クラヴサン用
このノートは
マリー・アンナ・
モーツァルト嬢のもの
1759年

ナンネルが7歳から8歳にかけての頃、父レーオポルトは娘のレッスン用に練習帳(『ナンネルの練習帳』と呼ばれている)をつくってあげた。父はここに簡単なものから難しいものへと自作を含めて40曲程の小曲を書きこみ、娘に実際に弾かせて演奏の練習をさせながら、音楽の理論も教えた。弟のヴォルフガングもこの練習帳を使って学んだが「1761年1月26日、5歳の誕生日の前日に夜9時半に30分で学ぶ」という記録が書き記されているように瞬間に吸収した。このノートの空いたページには、幼いヴォルフガングが作曲した小曲が父親によって書きこまれている。

モーツァルトが終生愛した妻、 コンスタンツェ

◎ 悪妻説は本当か？

世界三大悪妻のひとりとしてまでいわれるモーツァルトの妻コンスタンツェ（1762～1842）。だが、この悪妻コンスタンツェ像は後世がつくりだした虚像といつてよい。悪妻か良妻か、実際のところ他人がとやかく議論する問題ではない。いずれにせよ、モーツァルトが彼女を終生深く愛していたことは事実なのだ。

モーツァルトが彼女と結婚したのはウィーン移住の翌年、26歳のときで、彼女は20歳。実は彼女は、モーツァルトが22歳のときにマンハイムで失恋した歌手アロイジアのすぐ下の妹であった。不思議な縁というか、モーツァルトはウィーンに移住しようとしていたとき、ヴェーバー一家と再会する。ヴェーバー一家はマンハイム宮廷のバス歌手兼劇場プロンプターの父が他界し、母が下宿屋をして生計をたてていた。さっそくモーツァルトはここに下宿する。アロイジアは結婚して外に出ていたが、三女コンスタンツェと仲よくなったのである。

◎ モーツァルトの遺産を後世に残す

結婚を反対する父にモーツァルトは、彼女が美人ではないが、醜くもなく、心優しく賢い女性で、浪費家ではなく、妻としても母としても十分に務めを果せる女性だといっている。結婚後、夫の仕事は軌道に乗り、幸せな生活を送るが、やがて夫は借金を抱え、彼女も体調を崩して苦しい生活になる。しかし、夫の死後の彼女は、ふたりの幼子を抱えて毅然とした態度で生活に臨む。夫の追悼演奏会開催や遺された楽譜の売却などで収入の道を計り、夫の借金を返済する。その後彼女は再婚したデンマークの外交官ニッセンとともにザルツブルクに移り、ふたりで前夫の遺産を整理、おそらく不都合なものは処分しながらもその貴重な遺産の大半を後世に遺すことに努めた。また、ニッセンが執筆した『モーツァルト伝』を彼の死後刊行してもいる。こうした彼女の努力は高く評価されてよい。そして、彼女は前夫の没後50年の翌年、80歳の高齢で他界する。

● コンスタンツェ・モーツァルト



1802年にハンス・ハンゼンが描いたコンスタンツェ

profile

- 1762年 ツェル・イム・ヴィーゼンタールにて誕生
- 1777年 マンハイムでモーツァルトと知り合う
- 1781年 ウィーンのヴェーバー家にモーツァルトが下宿する
- 1782年 モーツァルトと結婚
- 1784年 カール・トーマス誕生
- 1791年 フランツ・クサーヴァー誕生
- 1791年 未亡人となる
- 1809年 ニッセンと再婚
- 1821年 ザルツブルクに移住
- 1826年 ニッセンの死後、妹のゾフィー・ハイベルとともに暮らす
- 1842年 ザルツブルクにて死去

モーツァルトとコンスタンツェの息子たち。右が13歳のカール・トーマス、左が6歳になるフランツ・クサーヴァー。モーツァルトとコンスタンツェのあいだには6人の子どもが生まれたが、生き残ったのはふたりだけだった。末っ子のフランツ・クサーヴァーはヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト2世を名乗り、音楽家として活動した。作品に佳作も多い。



モーツァルトのよきライバル、サリエーリ

◎ 大人気オペラ作曲家として活躍

シェファアの戯曲とその映画『アマデウス』により、アントーニョ・サリエーリ（1750～1825）は、モーツァルトの天賦の才に嫉妬し、毒殺した作曲家として有名になった。だが、生前のサリエーリはオーストリアの黄金市民栄誉勲章やフランスのレジオン・ドヌール勲章を受けるほどの音楽家であった。

イタリアのレニャーゴ生まれのサリエーリは16歳のとき、ウィーン宮廷作曲家ガスマンに才能を見出され、ウィーンに移住した。20歳でオペラ界にデビューした彼は、瞬く間にウィーンでもっとも人気のあるオペラ作曲家のひとりとなった。23歳で師の後任の宮廷作曲家兼イタリア語オペラの楽長、37歳で宮廷楽長に就任し、74歳で亡くなる1年前までこの地位にあった。またベートーヴェンやシューベルト、リストなど、多くの優れた音楽家を育てた名教師でもあった。

◎ モーツァルト殺しのうわさの実体は？

モーツァルトがウィーンに移住したとき、サリエーリは宮廷楽長とともに最も力のある音楽家であった。フリーで、その天才を武器に活躍し始めたモーツァルトを、サリエーリが意識したことは疑いない。モーツァルトも、イタリア語オペラの作曲家として大活躍のサリエーリを意識したことも確かである。ヨーゼフ2世もふたりに強い関心を示し、サリエーリにイタリア語オペラを、モーツァルトにドイツ語オペラを書かせて競演させている。しかし、ふたりは敵対関係にあったわけではなく、お互いに評価しあうよきライバルであった。このことは、モーツァルトの妻が、夫亡きあと、息子フランツ・クサーヴァーをサリエーリに師事させていることから推測されよう。だがその一方で、サリエーリによるモーツァルト毒殺のうわさが、すでに彼の存命中に囁かれていたことも事実である。晩年精神錯乱状態に陥ったサリエーリ自身が告白したともいわれているが、彼の弟子モシェレスによれば、師は毒殺を否定したとのことである。

アントーニョ・サリエーリ



1815年～20年にかけて書かれたサリエーリの肖像画

profile

- 1750年 レニャーゴにて誕生
- 1766年 ヴェネツィアでガスマンに音楽的な才能を認められてウィーンへ同行
- 1770年 オペラ《女文士たち》で早くもオペラ作曲家としての名声を確立
- 1774年 宮廷作曲家兼イタリア・オペラ指揮者となる
- 1788年 宮廷楽長に就任（1824年までこの地位に留まる）
- 1804年 この年を最後にオペラを書かなくなり、後進の指導にあたる
- 1812年 ウィーン音楽家協会の設立に参与
- 1825年 ウィーンにて死去

サリエーリのモーツァルト賛

ふたりはこう言いました。「これがオペラだ。最大の祝祭で、最大の君主たちの前で上演されるのにふさわしいものだ。これほど美しく、これほど気持ちのいいオペラは観たこともない。これから何度も観にくるだろう。」彼は注意深く観て、聴いていたが、シンフォニアから最後の合唱曲まで、彼の口から「ブラボー」や「きれいだ」という言葉が出ない曲はひとつもなかったのです。そしてそのような好意、ほくに感謝しつくすことができないようでした。

1791年 10月14日 モーツァルト

バーデンの妻に宛てた手紙のなかには、モーツァルトがサリエーリと愛弟子の歌手カヴァリエーリを《魔笛》に招待した折に、ふたりが賛辞を惜しまなかった様子が記されている。

モーツァルトの生涯の師友、 ハイドン

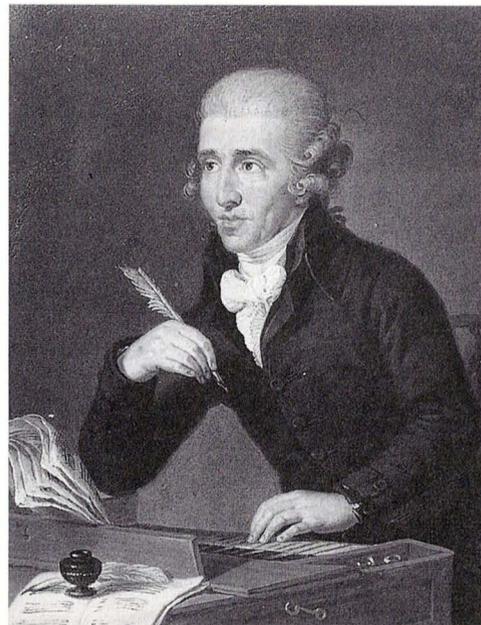
◎ ハイドン兄弟は大の親友

古典派音楽の発展の道を開いた巨匠ヨーゼフ・ハイドン (1732～1809)。彼はモーツァルトより24歳も年上であったが、ふたりは互いに尊敬しあい、堅い友情で結ばれていた。アイゼンシュタットのエステルハージー侯爵家に仕えるハイドンとモーツァルトの最初の出会いがいつだったのかは不明であるが、おそらくモーツァルトがウィーンに定住してまもなくのことと推測される。しかし、ザルツブルクにはハイドンの5歳違いの弟ミヒャエルが宮廷音楽家として活躍しており、モーツァルトはこの弟と親友関係にあったことから、彼がザルツブルク時代から兄ハイドンの作品をよく知っていたことは疑いない。

◎ 尊敬と友情と

モーツァルトとハイドンの関係をもっとも端的に伝えているのは、ハイドンに献呈された6曲の《ハイドン四重奏曲》である。ハイドンの《ロシア四重奏曲》(作品33)に刺激されて書かれたこの作品は、モーツァルトがハイドンから得たものをいかに自分のものとして発展させていったかを示している。また、初版譜の献辞からは、モーツァルトが彼をいかに尊敬していたかが伝わってくる。1787年、出版に先立つ自宅での披露演奏に招かれたハイドンは、ウィーンにきていたモーツァルトの父に「御息息は、私が名実ともども知っているもっとも偉大な作曲家です。様式感に加えて、この上なく幅広い作曲上の知識をおもちです」と賞賛した。1790年の暮、彼はロンドンに旅立つ前日、モーツァルトと会って別れを惜しんだという。その1年後、後輩の死を知ったハイドンは深く悲しみ「100年たっても、これほどの才能をふたたび得ることはないだろう」と、モーツァルトを讃えた。また、遺児が然るべき年齢になったとき「無償で私の最大の努力を払って作曲をお教えし、いささかなりとも父親代わりが務まるようにしたい」と、未亡人コンスタンツェに書き、友情を示したのである。

ヨーゼフ・ハイドン



ヨーゼフ・ハイドンの肖像画

profile

- 1732年 ローラウにて誕生
- 1740年 ウィーンのシュテファン大聖堂の聖歌隊の一員となる
- 1749年 声変わりのため合唱団をやめ、音楽教師をしながら作曲の勉強をする
- 1761年 エステルハージー家と雇用契約を結ぶ
- 1766年 正楽長となる
- 1783年 ブルク劇場の音楽会でおそらくはじめてモーツァルトと直接知り合う
- 1787年 モーツァルトから《ハイドン四重奏曲》を献呈される
- 1791年 この年と1794年に2度ロンドンにわたり、《驚愕交響曲》(時計交響曲)などを含む《ザロモン交響曲》を作曲、初演し、大好評を博す
- 1791年 モーツァルトの死の知らせを受けとる
- 1809年 ウィーンにて死去
葬儀ではモーツァルトの《レクイエム》が演奏される

モーツァルトのハイドンへの敬意

コジェルフがハイドンの弦楽四重奏曲について自分ならこうは書かないとけなすと、モーツァルトはこう言った。「私もそうです。なぜだかわかりますか？ あなたや私にはこれほど素晴らしい考えが思いつかないからです」

ポール

フェルディナント・ポールのハイドン伝にはモーツァルトのハイドンへの尊敬の気持ちをあらわしたエピソードが伝えられている。

モーツァルトに影響を受けた人びと

◎「偉大な古典」となったモーツァルトの音楽

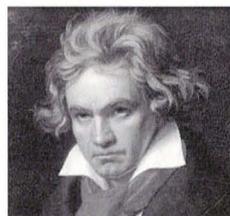
モーツァルトが逝って10年を経た19世紀はじめには、モーツァルトと直接関わりがあった人びともまだ少なからず存命であった。ヨーゼフ・ハイドン、ミハエル・ハイドン、サリエリ、クレメンティのように活躍をともにした作曲家たちもいた。モーツァルトの全作品のおよそ3分の1の作品が、はじめて『モーツァルト作品全集』という名のもとにブライトコップフから刊行されたのもこの頃である。しかし、社会はフランス革命の影響を受け、戦乱の時代であり、そんな時代に生きたベートーヴェンはモーツァルトとは違った響きの新しい音楽を生みだしていた。やがて社会は貴族社会から市民社会へと変わり、音楽も古典派からロマン派の時代へと変わっていく。そうした時代の移り変わりのなか、モーツァルトの音楽は「偉大な古典」として位置づけられ、音楽家は勿論のこと、文人や画家、哲学者など、あらゆる世界の人びとの心をさまざまなかたちで捉えていくことになった。作曲家だけに限ってもその数は驚くほど多い。

◎ロマン派の天才たちからの賛辞

モーツァルトの活躍を直接知っていたベートーヴェンをはじめ、モーツァルトを楽譜と演奏を通して知った19世紀の作曲家たちの多くは、モーツァルトの音楽へのさまざまな感動を言葉で綴っている。そうした作曲家のなかには、シューベルト、ロッシェニ、ベルリオーズ、ショパン、シューマン、リスト、ヴァーグナー、ヴェルディ、ブラームス、ビゼー、サン＝サーンス、チャイコフスキー、グリーグ、ヴォルフ、ドビュッシーなど、オーストリア、ドイツ、フランス、イタリア、ロシア、そして北欧の19世紀を代表する作曲家のほとんどが含まれているのである。

19世紀の作曲家たちは、自分たちが越えていくことのできないモーツァルトの音楽を永遠に遺されるべき「古典」として仰ぎ、音楽の理想として讃え、そこに音楽の本質を求めようとしたのであった。

モーツァルトを讃えた19世紀の作曲家たち



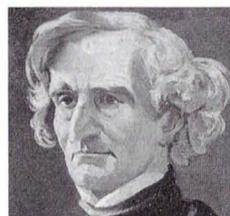
ベートーヴェン



シューベルト



ロッシェニ



ベルリオーズ



ショパン



シューマン



リスト



ヴァーグナー



ヴェルディ



ブラームス



チャイコフスキー



ドビュッシー

モーツァルトを崇拝した 古典派最後の巨匠、ベートーヴェン

◎ モーツァルトに憧れて

ハイドン、モーツァルトにつづく古典派最後の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770～1827)。彼は、1792年11月、ハイドンに作曲を学ぶべく、ボンからウィーンに移住した。モーツァルトの死後1年になろうというときで、フランス革命真只中の戦乱の時代であった。やがて社会は貴族社会から市民社会へと大きく変わっていく。そんな革命の時代に作曲家として成長していったベートーヴェンは、思想的にも音楽的にもハイドンやモーツァルトとは大きな違いをみせていくことになる。それでも、ベートーヴェンはモーツァルトに深い尊敬の念を抱いていた。「つねに私は自分をモーツァルトの大崇拝者のひとりと考えている。またこれは我が生涯変わることはないだろう」と、彼自身が手紙のなかで書いている。その彼がウィーンで最初に出版したのは《フィガロの結婚》から主題をとったヴァイオリン変奏曲 (WoO.40) であった。

◎ 同じ思想のもとに

道徳主義者ベートーヴェンは《ドン・ジョヴァンニ》のような内容のオペラを好まず、フリーメイソンの自由、平等、博愛という基本理念が象徴的に描かれている《魔笛》をもっとも高く評価していた。それは《英雄交響曲》や《第9交響曲》などからも明らかなように、彼自身、同じような思想をもっていたからだといえよう。彼は《魔笛》から主題をとって、チェロのための変奏曲を2曲 (作品66とWoO.46) 書いている。また彼は、ピアノ協奏曲二短調をこよなく愛し、第1楽章とフィナーレのカデンツァを書いた。こうした創作を通して彼は、音楽的には大きく違うところがあっても、思想的には通じ合うモーツァルトに敬意をあらわそうとしたのであろう。

ベートーヴェンはモーツァルトの生前に一度だけウィーンを訪ずれている。16歳だった彼とモーツァルトが実際に会ったかどうかはいまだ不明である。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン



ベートーヴェンの肖像画

profile

- 1770年 ボンにて誕生
幼時から父に音楽教育を受ける
- 1784年 ボンの宮廷次席オルガン奏者に就任
- 1787年 勉学のためにウィーンに出るが、母が重病のため短期間で帰国 (このときにモーツァルトに出会ったとする説もある)
- 1789年 正オルガン奏者に任命される
- 1792年 ウィーンに出てハイドンやザリエーリらに学ぶ
- 1800年 自作品発表会を開き、古典派音楽の伝統の流れを汲んだ作品を発表する
- 1802年 耳の疾病が悪化し、絶望にかられてハイリゲンシュタットで遺書を書く
- 1803年以降 やがてその苦しみを克服し、さまざまな分野で創作をつづけ《英雄交響曲》《運命交響曲》《田園交響曲》などの傑作が生みだされた
晩年は甥のカールの後見人として苦勞し、難聴も極度に悪化する
- 1827年 ウィーンにて死去

古典派の大先輩たちからの影響

ハイドン

ピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲の書法
晩年の交響曲の構成員

モーツァルト

《魔笛》の思想

ベートーヴェン

ハイドンからは自分の様式を形成していく途上で大きな影響を受けた。一方モーツァルトの音楽は、本質的なところでもあまりにも彼独自のものであったため後世が「伝承する」といった可能性をほとんどもっていなかった。しかしモーツァルトのとくに《魔笛》には敬意をあらわしていた。

モーツァルトの作品の伝導師、 ブラームス

◎ 古典派の伝統のなかで

バロックや古典派の古い形式のなかで、憂愁の漂うロマン的色彩の濃厚な音楽をつくり上げた作曲家ヨハネス・ブラームス（1833～97）。北ドイツのハンブルクに生まれた彼は、音楽家であった父から音楽の手ほどきを受けたのち、当地の音楽家マルクスゼンに作曲を師事することになった。この師によって、ブラームスはモーツァルトやベートーヴェンが遺した古典派の音楽へと導かれたのである。そして彼は、終生とりわけモーツァルトの偉大さを讃え、敬愛してやまなかった。その気持ちをブラームスはしばしば言葉で語っているが、彼にとってモーツァルトがどのような存在であったかを示す有名な言葉がある。「今日では、私たちにはもうモーツァルトのように美しくは書けない。だが、私たちにできるのは、彼が書いたのと同じくらい純粋に書くよう努めてみることだ」

◎ モーツァルトの音楽を正しく伝えたい

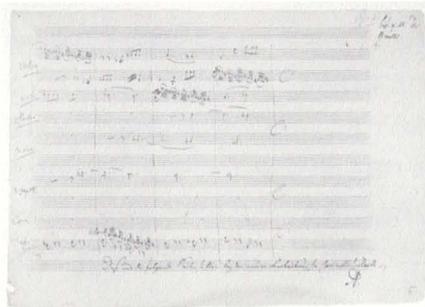
ブラームスは、敬愛するモーツァルトの音楽を後世に正しく伝えるためにも貢献した。彼は、1877年に『旧全集』の補巻として刊行された《レクイエム》の校訂者でもあるのだ。彼は当時、現ウィーン国立図書館に保管されていたモーツァルトの未完の自筆譜と弟子のジュースマイヤーが補筆した楽譜だけを元に、弟子によって完成された《レクイエム》を忠実に再現したのである。こうして編まれたこの旧全集版の《レクイエム》は、1965年に『新全集』が刊行されるまで、100年近くにもわたり、《レクイエム》の普及に貢献することになった。

その彼は、モーツァルトの交響曲の傑作《ト短調交響曲》(K550)の自筆譜を愛蔵していた。この自筆譜は、ブラームスが自作の《ヘ短調ピアノ五重奏曲》を献呈したヘッセン方伯夫人から、その返礼に贈られたものであった。現在この自筆譜は、ブラームスがウィーン移住後の活動のなかで深く関わることとなったウィーン楽友協会に大切に保管されている。

ヨハネス・ブラームス



ブラームスの肖像画



profile

- 1833年 ハンブルクにて誕生
- 1848年 はじめての公開演奏会を開く
- 1853年 シューマン夫妻に出会いピアノ演奏と作曲の才能を認められる（1856年のシューマンの死後も、未亡人となったクララや子どもたちと終生関わりをもちつづけた）
- 1868年 ウィーンに本拠を移す
- 1868年 《ドイツ・レクイエム》を初演
- 1872年 ウィーン楽友教会芸術監督に就任
- 1876年 交響曲第1番作曲
- 1877年 校訂をおこなったモーツァルトの《レクイエム》が出版される
- 1878年 ヴァイオリン協奏曲を完成
以後、ピアノ協奏曲第2番、交響曲第3番、交響曲第4番と、傑作を相次いで発表する
- 1891年 クラリネット五重奏曲を発表
- 1896年 クララの死後目立って健康が悪化する
- 1897年 ウィーンにて死去

モーツァルトの《ト短調交響曲》第2楽章の自筆譜の一部。モーツァルトや古典派の大作曲家たちを敬愛したブラームスは、ロマン派の時代にありながらもドイツ古典派の伝統を守った、しっかりとした構成の作品を発表していた。ロマン派の作曲家のなかでもっとも古典派に近いと考えられており、「新古典派」と呼ばれることもある。

モーツァルトの音楽とともに デビューを飾った、ショパン

◎ デビュー・コンサートでモーツァルトの変奏曲を

幼い頃モーツァルトの再来として評判となったフレデリック・フランソワ・ショパン（1810～49）。彼はポーランドのワルシャワで、貴族出の母からピアノの手ほどきを受けたのち、6歳からボヘミア出身の音楽家ジブヌイのもとで本格的な音楽の勉強を始めた。師がとくに好んで用いた教材のひとつがモーツァルトの作品であったと伝えられている。こうしてショパンは幼い頃からモーツァルトの作品に親しみ、彼の音楽を熱愛していた。そのショパンが、1829年のウィーンでのデビュー・コンサートのために選んだ曲が、ほかならぬ《ドン・ジョヴァンニ》の《お手をどうぞ》の主題による変奏曲なのだ。実はこの変奏曲はデビューの2年前、ショパンが17歳のときの作品であった。おそらく彼の自信作であったのだろう。デビュー・コンサートは各変奏ごとに拍手喝采を浴びるほどの大成功をおさめ、変奏曲は翌年「作品2」として出版されたのである。

◎ モーツァルトとショパンの融合

ショパンと同じ年に生まれたロマン派音楽の旗手ローベルト・シューマンは、出版された「作品2」の楽譜をみてその批評を書き「諸君、帽子をとりたまえ、天才だ」といって絶賛した。この言葉で有名になった批評はまた、シューマンの批評家としてのデビューを飾るものでもあったのだ。

このモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》の主題による変奏曲は管弦楽の伴奏を伴うピアノ変奏曲で、序奏と5つの変奏のあと、この主題によるショパンならではのポロネーズで結ばれるという作品である。当時の楽壇の超絶技巧好みを反映した華麗な作品で、モーツァルトの主題を用いてショパン独自の個性的な世界をくり広げている。こうした作品を2作目で書き、それをデビュー・コンサートでとり上げたショパン。彼は音楽家としてのデビューを、熱愛するモーツァルトとともに飾りたかったのではないだろうか。

フレデリック・フランソワ・ショパン



死の数カ月前に撮影されたショパンの写真

profile

- 1810年 ワルシャワにて誕生
幼時よりピアノを習い、大バッハとモーツァルトの音楽から大きな影響を与えられる
- 1829年 ウィーンでデビュー
- 1832年 パリでデビュー
- 1836年 女流作家ジョルジュ・サンドと出会う
- 1838年 結核療養のためサンドとマジョルカ島に渡り同棲するが病気はしだいに悪化
- 1839年 冬はパリ、夏はノアンのサンドの別荘で暮らす生活が始まり(24の前奏曲)《バラード第4番》《幻想ポロネーズ》などの傑作が生まれる
- 1847年 サンドと別れる
- 1849年 パリにて死去

ショパンの葬儀が行われたマドレーヌ教会。10月30日に行われた葬儀では敬愛するモーツァルトの《レクイエム》が演奏された。遺体はラ・ペール＝ラシェーズ墓地に葬られたが、心臓は彼の希望通り故郷のワルシャワに送られ、聖十字架教会に安置された。



モーツァルトに憧れつづけた、 チャイコフスキー

◎ 西洋音楽と国民楽派の融合

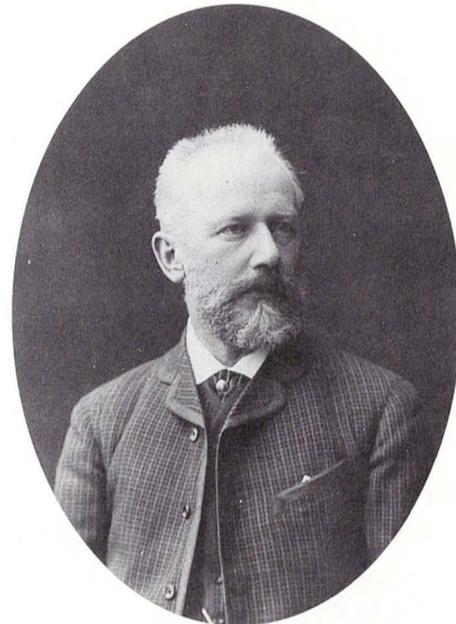
モーツァルトのおよそ1世紀後に活躍したピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）。彼は19世紀後半のロシアを代表する作曲家のひとりである。彼が生きた時代のロシアは皇帝が支配する西欧化された貴族社会であったが、社会主義を目指そうとする革命の時代でもあった。音楽においても、ロシアの民族的な要素を重視するいわゆる国民楽派の音楽家たちの活躍が始まり、貴族社会で好まれた西欧音楽だけを尊重する音楽家たちと対立した。ロシアの音楽院で学んだチャイコフスキーは、西欧音楽の伝統を基本としたが、国民楽派の音楽も受け入れ、民族的な要素を巧みに融合させた独自の世界をつくりだした。その彼が終生愛しつづけた音楽家、それがモーツァルトなのである。

◎ モーツァルトの音楽は希望の光り

チャイコフスキーは、基本的なモーツァルト伝や、当時刊行されたばかりの『旧全集』等を愛蔵し、《フィガロの結婚》をロシア語に翻訳している。そんな彼は、およそ3年をかけ、47歳のときに、管弦楽のための組曲第4番《モーツァルティアーナ》（作品61）を完成した。この作品で用いられたモーツァルトの曲は、当時はまだほとんど知られていない曲ばかりであるが、こうした曲を敢えて選ぶことによって、彼は人びとにモーツァルトの魅力をより深く認識して欲しいと願ったのであろう。そして、この曲の成功をきっかけに、彼はおよそ10年にも及んだスランプから抜け出すことができたのだ。

チャイコフスキーは、モーツァルトを愛してやまない理由について「時代の子として意気消沈していて、精神的に病的」な自分が、「天性の生のよるこびが表現されているモーツァルトの音楽に、安らぎと慰めとを求めていればこそである」と語っている。革命の暗い時代に生きたチャイコフスキーにとって、明るいモーツァルトの音楽は彼の心の慰めであり、希望の光であったのだ。

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー



1883年のチャイコフスキーの写真

profile

- 1840年 ウラル地方ヴォトキンスクにて誕生
- 1854年 母親が亡くなり大きな打撃を受ける
- 1859年 法務省に勤務する
- 1861年 アントン・ルービンシュタインが開設した音楽教室に入る
- 1863年 法務省の職を辞して音楽に専念
- 1866年 モスクワ音楽院で教え始める
- 1876年 未亡人ナジェジダ・フォン・メックから財政的な援助を受け始める
- 1877年 アントニーナ・ミリュコバとの結婚が失敗に終り、精神的痛手を負う
- 1877年 ブライトコップ・フント・ヘルテル社の『モーツァルト全集』（旧全集）の刊行が開始
- 1887年 《モーツァルティアーナ》完成
- 1893年 交響曲第6番《悲愴》初演の9日後、サンクトペテルブルクにて死去

《モーツァルティアーナ》にこめられたモーツァルトへの思い

	第1楽章 ジグ	第2楽章 メヌエット	第3楽章 祈り	第4楽章 主題と変奏
モーツァルトの作品 原曲となった	《小ジグ》 (K574)	《メヌエット ニ長調》 (K355)	《アヴェ・ヴェルム・コルプス》 (K618) (リストがこの曲と《ミゼレーレ》とをあわせて改編した《システィナ礼拝堂にて》を素材にしている)	グルックの《メッカの巡礼者たち》のアリエッタ《愚民が思うは》による十の変奏曲 (K455)

《モーツァルティアーナ》に使われた素材はモーツァルトの膨大な作品のなかの、当時はまだ有名でない小品ばかり。しかしそれらは小さくても美しい作品だった。チャイコフスキーはこれらの曲を少しでも多くのひとに知ってもらいたかったのかもしれない。

モーツァルトの恋

たくさんの女友たち

モーツァルトは恋多き男性であった、といわれることが多い。それを裏づける証拠のように、よく引用される手紙の一文がある。「ぼくが冗談をいったすべてのひとと結婚しなくてはならないとすれば、少なくとも200人の妻をもたなくてはならないでしょう」。これは、モーツァルトがウィーン移住後まもなく、コンスタンツェとの結婚のうわさを耳にした父からの手紙への返信のなかで書いたものである。確かにこの一文は、彼が多くの女性とつき合いがあったことを示しているが、多くの女性と恋に落ちたという印象は与えない。モーツァルトは、「愛している」とか「結婚しよう」などと軽く冗談を飛ばしながらも分別をもって、楽しく女性とつき合っていたと理解できよう。

モーツァルトの心を捉えた女性たち

モーツァルトが会った数多くの女性のなかには、どんなかたちであるかは

わからないにせよ、彼の心を捉えたことが確かな女性も多い。音楽的才能に惹かれた女性としては、失恋したアロイジア・ヴェーバー、ドゥーシェク夫人、ボンディーニ、ニクラス、バラニウス、ストレース、コルテッリーニ、ラスキ、ブッサーニ夫人、ゴットリーブ、カヴァリエーリなどの歌手、ピアニストのジュナミ、やパラディス、ヴァイオリニストのストリナザッキなどがある。その多くは作品を捧げられたり、オペラの初演歌手に起用されたり、演奏会で彼と共演している。ローザ・カンナビヒやヴェンドリング母娘など、友人の妻や妹、あるいはプロイヤー嬢、アウエルンハンマー嬢、トラットナー夫人、ホーフデーメル夫人といった弟子のなかにも作品を捧げられた女性も多い。さらに、トゥーン伯爵夫人、ハッツフェルト伯爵夫人、ヴァルトシュテッテン男爵夫人などの後援者や、駄洒落やスカトロジックな表現で有名な「ベーズレ書簡」を書かせた従妹のアンナ・マリーア・テークラ・モーツァルトもいる。これらの女性たちの



←モーツァルトと交流のあった歌手たち

左/チェレステ・コルテッリーニ
中/ナンシー・ストレース (《フィガロの結婚》初演でスザンナ役を担当)

右/ヘンリエッテ・バラニウス (ベルリンでの《後宮からの奪還》でブロンデ役を担当)



アンナ・マリーア・テークラ・モーツァルト
(通称ベーズレ「いとこちゃん」)

なかにはモーツァルトとの深い関係がささや囁かれる者も少なくない。

本当に愛した女性は？

モーツァルトが恋をした女性、と断言できるのは、失恋したアロイージャと、その妹で彼が結婚したコンスタンツェだけであるといえよう。ほかの女性との深い関係を示す手紙や資料は、妻が処分したと推測する者もある。しかし、アロイージャに失恋後、作曲家としては彼女の活動を支えつづけても、彼女への恋を再燃させたことはなかったことをみれば、モーツァルトは理性をもって女性とつき合っていたといえるのではなからうか。彼が恋をし、終生変わらぬ愛を捧げた女性は妻コンスタンツェただひとりだったのである。



アロイージャ・ヴェーバー



コンスタンツェ・モーツァルト (旧姓ヴェーバー)



付録

もっと知りたい! モーツァルト

モーツァルトのおじいさんは製本師!? モーツァルトの作曲料はどのくらい? モーツァルトの死因は150種類もあるの!? ケッヘル番号ってなに?

モーツァルトの家系

💡 モーツァルトの父方の祖先に音楽家はいなかった

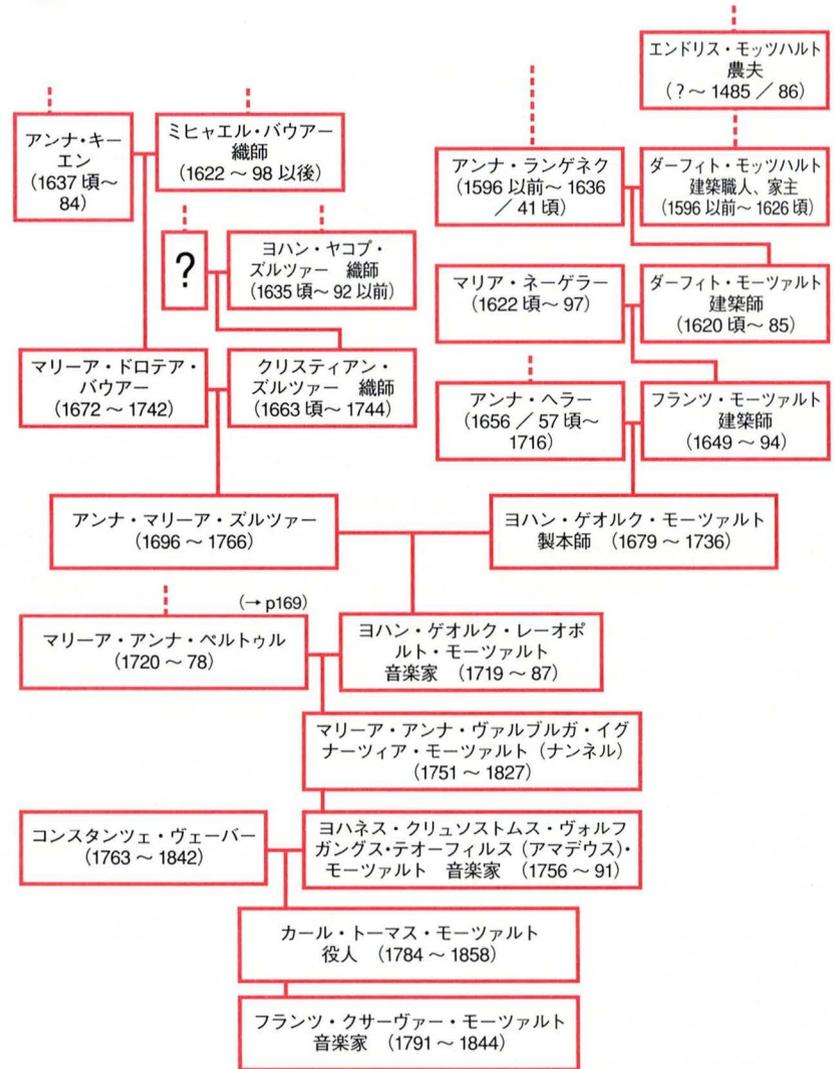
モーツァルトという姓は14世紀まで遡ることができる。ドイツのシュヴァーベン地方に多いが、モーツァルト家の直接の祖先は、ハイムベルクで農夫をしていたエンドリス・モッツハルト (? ~ 1485/86) であるといわれている。モッツハルト Motzhart 家は、エンドリスの孫の時代から移住を重ね、エンドリスの7代後になるダーフィット (1620頃 ~ 85) がアウクスブルクに移住し、ここで代々工匠として名を成すことになるモーツァルト一族の基盤を築いた。このダーフィットがモーツァルトの父レーオポルトの曾祖父にあたり、姓もここからモーツァルト Mozart と綴られるようになる。レーオポルトの曾祖父と祖父フランツ (1649 ~ 94) は建築師、父ヨハン・ゲオルク (1679 ~ 1736) は書籍に美しい装丁をほどこす製本師、また叔父フランツ (1681 ~ 1732) は彫像師であり、一族に音楽家はひとりもおらず、レーオポルトが最初の音楽家である。

💡 直系の子孫は残らず

モーツァルトの父レーオポルトはザルツブルクに出たのをきっかけに一族ではじめて音楽家になり、ザルツブルクとウィーンのモーツァルト家は3代にわたってつづく音楽家一族に変身した。祖先の建築師、製本師、彫像師は、いずれも美的・芸術的感覚が要求される芸術家であり、そうした芸術家としての素質が父から息子に、さらには孫へと受け継がれたのであろう。

モーツァルトの生きながらえたふたりの息子のうち、次男カール・トーマス (1784 ~ 1858) はミラノで役人になるが、4男フランツ・クサーヴァー・モーツァルト (1791 ~ 1844) は音楽家となった。ピアニストとして優れ、声楽と器楽の両ジャンルに佳曲を書いているが、生前も死後も、父の名声に覆われ、最近まで忘れられた存在であった。モーツァルトのふたりの息子はどちらも生涯独身であったため、このふたりの死をもってモーツァルトの直系の血統は絶えてしまったのである。

👤 芸術的な才能はご先祖様からの贈り物



モーツァルトの肖像

🔦 モーツァルトはどんな姿をしていたのか

写真がまだなかったモーツァルトの時代には、油絵や影絵、浮彫や彫刻などの肖像が人びとの実像を伝える手段として用いられていた。モーツァルトの場合も、彼の容姿、容貌をわれわれに伝えてくれるのはそうした肖像である。

今日モーツァルトとして伝えられている肖像は非常に多いが、そのなかにはすでにモーツァルトではないと結論づけられているものや、真偽が定かでない肖像、さらにはクラフト作の有名な油絵のように真正な肖像を基にして後世の画家が描いたものもある。しかし、モーツァルトを直接モデルとして描いた真正な肖像は、群像画も含めて12～13点であるといわれている。これらの肖像には油絵、蠟製浮彫、象牙製細密画、影絵などさまざまな種類があるが、いずれも描かれた頃のモーツァルトの容貌を伝えてくれる貴重な資料となっている。

🔦 真正な肖像画には共通の特徴

真正とされる肖像のなかからとりわけ有名なものを年齢順に見てみよう。最初に描かれたのはロレンツォーニによる油絵で、大礼服を着て誇らしげな顔をした7歳のモーツァルトの容姿を映しだしている。伝ダツラ・ローザの油絵『ヴェローナのモーツァルト』は14歳、作者不詳の油絵『黄金の軍騎士勲章をつけたモーツァルト』は21歳、ランゲによる未完の有名な油絵『ピアノに向かうモーツァルト』とシュトックによる銀尖筆素描は33歳のモーツァルトを描いたもので、これらの肖像を比較すると、年齢によって少しずつ変わっていく容貌とともに、目鼻立ちや顔立ちなど、共通する特徴もみとることができる。

真正とされるモーツァルトの肖像は、どれもが互いにあまり似ていないという印象を語るものも少なくない。だが、画家によって描かれる肖像に、写真のような正確性がないのは当然のことであり、それゆえ、偽の肖像がモーツァルトの肖像と主張され信じられることもありうるのを忘れてはならない。

🔦 モーツァルトの真正な肖像画 (→口絵)



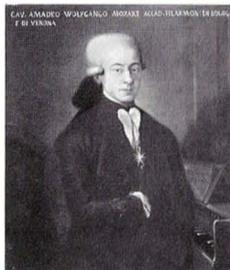
ロレンツォーニ
『大礼服を着たモーツァルト』
(1763年、油彩)



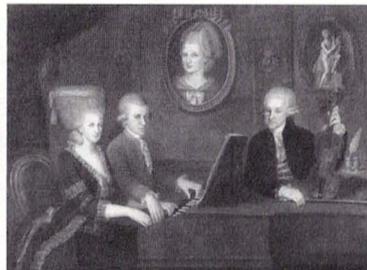
カルモンテル『父子3人の奏楽図』
(1763年、水彩)



伝ダツラ・ローザ
『ヴェローナのモーツァルト』
(1770年、油彩)



→左：作者不詳
『黄金の軍騎士勲章をつけたモーツァルト』
(1777年、油彩)



→右：ダツラ・クローチェ
『モーツァルト一家の肖像』
(1780～81年、油彩)



ランゲ『ピアノに向かうモーツァルト』(未完)
(1789年頃、油彩)



シュトック
『モーツァルト』
(1789年、銀尖筆素描)



クラフトによる肖像画
(1819年、ダツラ・クローチェ『モーツァルト一家の肖像』に基づく油彩)

モーツァルトの家計

💡 3000 グルデンにものぼる借金?!

モーツァルトが晩年、おそらく 1788 年頃から、富裕な商人でフリーメイソンの盟友であったプフベルクをはじめ、友人や知人に借金を重ねたことはよく知られている。亡くなるおよそ 3 週間前には北ドイツ旅行をともにしたりヒノフスキー伯爵がおこした借金返済の裁判の判決がくだり、1,435 グルデン（フロリン）32 クロイツァー（1 グルデンは現在の日本のおよそ 1 万円に相当）の支払いを命じられている。モーツァルトが亡くなったとき、借金は少なくとも 800 グルデン、一説では 3,000 グルデン以上あったという。こうした晩年の多額の借金は、かつては、モーツァルトのウィーンでの人気がしだいに落ち、収入が激減したことによるとされてきた。しかし、現在では、モーツァルトはウィーン時代を通してかなり高額の収入があったことが明らかになっているのだ。

💡 実は高所得者だったモーツァルト

モーツァルトのウィーン時代の年収は記録として残っているものだけを計算しても平均して 1,889 グルデンで、一番少なかった 1786 年でさえ 756 グルデン、もっとも多かった 1791 年には、なんと 3,725 グルデンもあったのだ。さらに実際には記録に残らないレッスン料や演奏会収益、楽譜出版の報酬などもあったことは明らかである。当時のウィーンでは 500 グルデンの年収があれば中産階級の人ひとりが十分に生活でき、患者 2,000 人を収容できるウィーン総合病院の院長の年収が 3,000 グルデンであったことをみれば、モーツァルトは亡くなるまで相当高額の収入を得ていたことが理解できよう。

これほどの収入がありながら多額の借金生活に陥ってしまった原因がどこにあったのか、現在でもはっきりしたことはわからない謎のひとつである。賭け事にお金を使ったとする説もあるが、貴族社会と関わる仕事が多かったために衣装代や交際費に多額のお金が必要であったと考えるのが自然であろう。

モーツァルトの収入

作曲料

1782 年	《後宮からの奪還》ウィーン初演作曲料	425 グルデン
1785 年	《ハイドン四重奏曲》6 曲出版	450 グルデン
1785 年	《後宮からの奪還》再演料	132 グルデン
1786 年	《フィガロの結婚》ウィーン初演作曲料	450 グルデン
1787 年	《ドン・ジョヴァンニ》プラハ初演作曲料	450 グルデン
1787 年	《ドン・ジョヴァンニ》ウィーン初演料	225 グルデン
1790 年	《コシ・ファン・トゥッテ》ウィーン初演作曲料	900 グルデン
1791 年	《ティート帝の慈悲》プラハ初演作曲料	900 グルデン
1791 年	《レクイエム》作曲料前金	225 グルデン

その他の収入の例（記録にある一部）

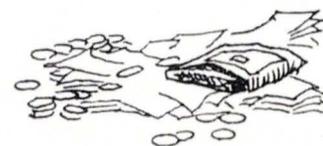
1781 年～	ピアノのレッスン料	月 12 回でひとり 27 グルデン
1781 年	クレメンティとのピアノ競演	200 グルデン
1785 年	ピアノ協奏曲ハ長調（K467）の演奏会	559 グルデン
1788 年～	ウィーンの宮廷作曲家として	年俸 800 グルデン

当時のウィーンの通貨

ドゥカーテン＝金貨
 グルデン（フロリン）＝銀貨
 クロイツァー＝銅貨

1 ドゥカーテン＝4.5 グルデン
 1 グルデン＝60 クロイツァー
 2 グルデン＝1 ターラー
 3 クロイツァー＝1 グロッシュェン

* 1 グルデン＝約 10,000 円



モーツァルトの死因

💡 150種類も考えられたモーツァルトの死因

モーツァルトの晩年の経済困窮の原因とともに、いまだあきらかになっていないのがモーツァルトの死因である。聖シュテファン大聖堂の死者名簿に検死結果として記された死因は「急性粟粒疹熱」である。しかしモーツァルトの急逝は、その死因についてさまざまな臆測を生むこととなった。死後間もない頃から現在に至るまで、提唱された死因の数はなんと150にもなるという。そのなかでもっとも多いのは病死説で、主な説としてはリウマチ熱からくる心不全、あるいはシェーンライン・ヘノッホ（紫斑病）症候群の併発症である腎臓病の悪化による腎不全があげられるが、今日では当時一般的であった瀉血が死を早めたとの説が有力である。そのほか梅毒治療のために服用した水銀中毒説や、死の44日前に食べたトンカツが十分火が通っていなかったために寄生虫に感染したという臆説もあるが、病死説以外でとりわけ有名なのが「毒殺説」であろう。

💡 毒殺説の真相は？

モーツァルト毒殺説は、すでに彼が亡くなった直後からささやかかれ、はやくもその年の大晦日にはベルリンの新聞に「死後、遺体が腫れ上がったことから、毒殺されたのではないかと思われたほどだった」と報じられているのである。その犯人としてもっとも疑われたのがサリエリであることはいまでもない。しかしサリエリのほかにも、モーツァルトが亡くなった翌日、妻に剃刀で大怪我をさせて自殺したフリーメイソン盟友のホーフデーメルがモーツァルトと妻との関係を疑って毒殺したとする説や、フリーメイソン謀殺説まである。しかし、これらの説はいずれも臆測の域をでることはない。

モーツァルトの急逝を惜しむ気持ちがさまざまな死因説を生み出す原因であり、今後も新説珍説が発表される可能性がある。しかし、最後の頃の病状についての記録や証言だけから死因を特定することは今となっては不可能である。

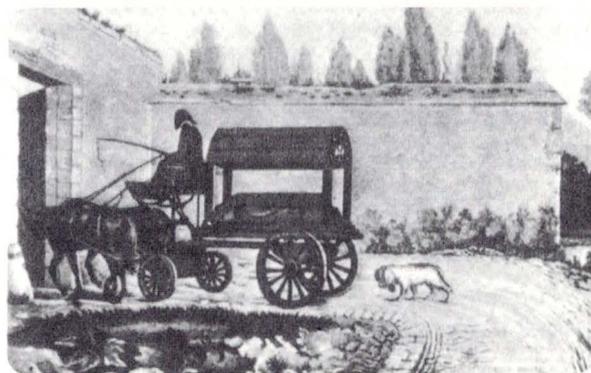
👤 モーツァルトの死に際

彼は私に呼びかけました。「ああ、よかった。ゾフィーがここにいてくれて。今夜はここにいて、ぼくの死ぬのを見てくれなきゃいけないよ」。私はそんな話をやめさせようとしたが、彼は言うのです。「舌の上にはもう死人の味がするんだ。君が残ってくれなかったら、いったい誰が最愛のコンスタンツェの助けになってくれるんだい」。

医者グロセット（クロセット）は随分探して、やっと劇場で見つかりました。けれど芝居が終るまで待ってなければなりません。彼はやってくると、モーツァルトの燃えるような額に冷湿布を処方しました。これは彼に大きなショックを与えました。息を引きとるまで、もう意識は戻らなかったのです。すぐに美術陳列館からミューラーがやってきて、彼の青白い死に顔を石膏に型どりしました。

1825年4月7日 ゾフィー

モーツァルトの最期を看取った義妹ゾフィー・ハイブルは、姉コンスタンツェと再婚相手のニッセンに宛てた手紙のなかで、彼の臨終の様子を詳しく書き綴っている。モーツァルトの死の30年以上ものちに書かれた手紙には、当時の印象が生々しく語られている。



19世紀に描かれた、死者の棺を墓地へ運ぶ馬車の図

モーツァルトのお墓

💡 18世紀の慣例に従ったモーツァルトのお葬式

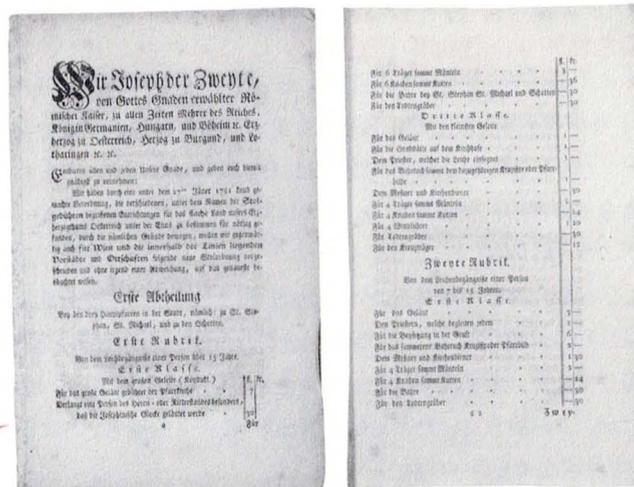
1791年12月5日午前0時55分にこの世を去ったモーツァルトの葬儀は、翌6日午後3時から聖シュテファン大聖堂において奏楽のつかない第3等でおこなわれ、最後の祝福を受けたモーツァルトの遺骸は、おそらくは当日、市門外の聖マルクス墓地に運ばれ、その共同墓穴に翌7日に埋葬された。葬儀に参列した親族や関係者たちは、市門のひとつシュトゥーベントールのところで遺骸を見送り、埋葬は墓堀人だけでおこなわれており、実際の埋葬場所は確定しがたい。そのため、親族や当時の関係者に対して後世から厳しい非難が浴びせられることとなった。確かに、1787年に亡くなった当時の有名な作曲家グルックが個墓なのにモーツァルトが共同墓穴というのは、後世の我々からすれば納得しがたいことではある。しかし、当時のウィーンでは、一般市民の葬儀は埋葬が共同墓穴となる第3等がもっとも多かったし、親族や関係者が墓地まで同行したり、埋葬に立ち会ったりするのは例外的であった。

💡 死後100年後につくられたモーツァルトのお墓

19世紀になるとモーツァルトの墓がないことを悲しむ声が高まり、埋葬場所の調査がおこなわれた。そして、1859年、聖マルクス墓地の、モーツァルトが埋葬されたと推測される場所に記念像が建てられ、ようやくお墓がつけられたのである。この記念像は1891年、没後100年の命日にウィーン中央墓地の一角〈音楽家名誉墓地32a〉に移された。そのため、聖マルクス墓地のお墓には1900年、〈嘆きの天使〉の墓碑が建てられ、現在にいたっている。
(→p135)

ところで、1801年に墓堀人によって墓からとりだされたというモーツァルトのものとしてされる頭蓋骨は、その真偽についての決着をつけるべく、生誕250年を記念して、ザルツブルクのモーツァルト家の墓に眠る遺骨とのDNA鑑定がおこなわれた。その結果は、モーツァルトのものとは断定しがたいというものであった。

👤 第3等の葬儀とは？



皇帝ヨーゼフ2世によるウィーンの葬儀規定（1782年のウィーンの政府刊行物より）

第3等の葬儀（1782年1月25日付葬祭典礼規定）

後世のひとたちには冷たいものに思われた第3等の葬儀、埋葬も、当時の市民にとってはごく普通の扱いのものだった。モーツァルトの葬儀の費用は、ヴァン・スウィーテン男爵が引き受けている。

第3等 最小の葬送者ともなう

- 撞鐘料 1グルデン
- 墓地の墓所使用料 1グルデン
- 遺体を祝別する司祭に 1グルデン
- 柩衣および付属の十字架像または聖堂像使用料 1グルデン
- ミサの侍者および聖堂雇い人に 30クロイツァー
- 棺かつぎ人夫4人に（含外套代） 2グルデン
- 童子4人に（含聖衣代） 24クロイツァー
- カンテラ使用料 1グルデン 20クロイツァー
- 墓堀人に 30クロイツァー
- 十字架奉持者に 12クロイツァー

モーツァルト、ふたつの全集

🔦 最初の包括的な作品全集『旧全集』

ケッヘルによる『モーツァルト全作品主題年代順目録』の刊行から15年を経た1877年、モーツァルトの最初の包括的な批判的校訂版作品全集であるいわゆる『旧モーツァルト全集』の刊行が始められた。当時はまだケッヘルの作品目録に含まれる全626曲中、出版されていたのはおよそ63パーセントという状況であったが、この『旧全集』には、モーツァルトのほとんどすべての作品が収録されることになった。28年の年月をかけて1905年に完結した『旧全集』は、ケッヘルが作品目録の冒頭で試みたジャンル区分にしたがい、全作品を23部門に分類して収録している。各部門ではケッヘル番号順に曲が収録され、順番に番号が付されたが、この番号は、たとえば交響曲第40番ト短調というように、ジャンルによっては現在でも用いられている。

🔦 モーツァルト研究の集大成『新全集』

19世紀末から20世紀にかけてモーツァルト演奏および研究の拠り所となった『旧モーツァルト全集』であったが、新しい資料や新しい曲の発見などによって『ケッヘル作品目録』が改訂を余儀なくされたように、『旧全集』も改訂が必要となった。こうしてモーツァルト生誕200年の前年1955年の誕生日に、いわゆる『新モーツァルト全集』の刊行が開始されたのである。没後200年の1991年に補巻を除く本巻の完結をみた『新全集』は、20世紀の資料研究の成果を踏まえて刊行されてきたもので、補巻には、当時の5線紙の透かし研究の巻や筆跡研究の巻、当時の一次的な記録データを集めた資料集の巻や図像集の巻、さらには現在準備が進められているいわゆる『新ケッヘル』の巻なども含まれている。この『新全集』の一環として『モーツァルト書簡全集』（全7巻）も刊行されている。

長いあいだ使用されてきた『旧全集』に代わって、近年ようやく『新全集』が演奏の基本資料となってきている。

👤 モーツァルト研究の流れ



ニッセン

1828年
『モーツァルト伝』

コンスタンツェの第二の夫ニッセンがモーツァルトの手紙その他の資料をもとに編集。モーツァルト研究最初期の大がかりな伝記として名高い。



ノヴェロ夫妻

1829年
『モーツァルト巡礼』

ロンドンの音楽出版者ノヴェロが、モーツァルトの生地ザルツブルクやウィーンで、妻や息子、姉などの親族やアロイジアなどゆかりのひとたちから思い出話を聞き、日記に書き残した。その一部は1830年代の音楽雑誌に掲載された。



モーツァルテウム

1841年
『大聖堂音楽協会並びにモーツァルテウム』

現在の国際モーツァルテウム財団の前身。合唱を中心とする音楽教育やモーツァルト研究の本拠地となる。



ヤーン

1856～59年
『モーツァルト』全4巻

生誕100年を記念して刊行。モーツァルトの生涯と芸術について資料の徹底的な研究をまとめたもの。後世のモーツァルトに対する崇敬行為の典型的な記念碑となる。



ケッヘル

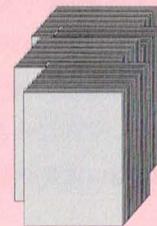
1862年
『モーツァルト全作品主題年代順目録』

当時知られていたモーツァルトの作品626曲に番号をつけて便宜を計ったもの。(一次ページ参照)



1877～1905年『旧モーツァルト全集』

ヤーンやケッヘルの研究をふまえてつくられた全集。『新全集』が刊行されるまでモーツァルトの演奏実践のもっとも重要な拠り所となる。



1955～91年『新モーツァルト全集』

『旧全集』以降の研究成果をとり入れて、130巻(本体)にわたる全集が刊行された。現在ではモーツァルト研究や演奏の基本資料となっている。

ケッヘル番号ノウハウ

💡 モーツァルトの作品を年代順に整理したケッヘル

モーツァルトの作品を示すとき、頭に「K」または「KV」をつけて必ず用いられる番号がある。これが「ケッヘル番号」で、博物学者で熱烈なモーツァルト愛好家であったルートヴィヒ・フォン・ケッヘルが1862年に出版した『モーツァルト全作品主題年代順目録』に収録された曲に付された番号である。オリジナル資料の調査結果をもとに、その時点で確認済の626曲を作曲年代順に番号をつけた（散失または未完の作品、編曲、疑作、偽作は補遺におかれ、K Anh 1のように記載）。『ケッヘル作品目録』は、その曲と確認できる作品や楽章の冒頭楽譜（インシピット）数小節、編成、作曲年月日、自筆譜の所在、初版譜やその他の版、注釈、文献等の情報を網羅している。

💡 ケッヘル番号はタイトルの一部

『ケッヘル作品目録』の刊行後、作曲年代の推定に大きな移動が生じた曲や新発見の曲、さらには偽作と判明した曲もあるなど、多くの訂正が必要となった。その結果1937年のアルフレート・アインシュタイン編『改訂第3版』と、1964年の『改訂第6版』で大幅な番号の訂正がおこなわれた。改訂版では、初版番号を基本とし、作曲年代が移動した作品には初版番号と、初版番号にアルファベットを付した改訂番号の両方を付す二重番号制が採られ（《ハフナー・セレナード》K250は第6版ではK⁶248bの番号をもち、K250(248b)と記される）、初版番号のあいだにおかれた（《ハフナー・セレナード》はK248とK249のあいだ）。新たに加えられた作品には改訂番号のみが与えられ、初版番号のあいだの当該箇所におかれた。しかし、その後も作品の発見や、作曲年代の訂正はつづいており、現在新たな作品目録の作成が試みられている。いずれにせよ、「ケッヘル初版番号」はモーツァルトの作品を確認する上で欠かせない重要な意味をもつ番号なのだ。

👤 ケッヘル初版の目録への訂正

K 1 メヌエット

初版ではモーツァルトの最初の作品とされていたが、現在では後年のものとされるにいたった。一説では1764年のもの。その後これより以前に書かれた作品が追加され（K⁶1a～1d）現在では、K⁶1aが最初の作品とされている。

K18 交響曲変ホ長調

モーツァルトの作品ではなく、アーベルの作品の編曲であることが判明。

K350 《モーツァルトの子守歌》

モーツァルトの作品ではなく、ベルンハルト・フリースの作品だと推定されている。

K626 《レクイエム》

未完ながら最後の作品として（K626）と最後のケッヘル番号がつけられたが、全作品数はこの数をはるかに越えている。



ケッヘル

音楽における構想の独自性、豊かさ、飛躍、激烈さ、旋律の優美さ、親密さ、力、和声の快い響きと斬新さ、完成された劇的性格描写、音楽的構築への深い知識と随所に支配する節度といったものが、永続する名声を要求する権利を作曲家に与えている限り、WA. モーツァルトの名の不朽性について心配する必要はないだろう。

『モーツァルト全作品主題年代順目録』序文より

付属 CD 収録曲・演奏家リスト

CD
1

- 1 交響曲第1番 変ホ長調 K16 より 第2楽章 4:53
ニコラス・ウォード (指揮)、ノーザン室内管弦楽団
 - 2 交響曲第31番 二長調 K297《パリ》より 第3楽章 3:49
バリー・ワーズワース (指揮)、カペラ・イストロポリターナ
 - 3 交響曲第40番 短調 K550 より 第1楽章 7:31
バリー・ワーズワース (指揮)、カペラ・イストロポリターナ
 - 4 交響曲第41番 八長調 K551《ジュピター》より 第4楽章 9:28
バリー・ワーズワース (指揮)、カペラ・イストロポリターナ
 - 5 セレナード 二長調 K320《ポストホルン》より 第6楽章 4:47
マルティン・トゥルノフスキー (指揮)、カペラ・イストロポリターナ
 - 6 セレナード 短調 K388《ナハトムジーク》より 第1楽章 7:54
オスロ・フィルハーモニー・ウィンド・ソロイスト
 - 7 セレナード 長調 K525《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》より 第1楽章 5:51
ヴォルフガング・ソボトカ (指揮)、カペラ・イストロポリターナ
 - 8 ヴァイオリン協奏曲第5番 イ長調 K219《トルコ風》より 第3楽章 9:22
西崎崇子 (ヴァイオリン)、ステューヴン・ガンゼンハウザー (指揮)、カペラ・イストロポリターナ
 - 9 フルートとハーブのための協奏曲 八長調 K299 より 第2楽章 7:32
J. ヴァレク (フルート)、H. ミュレローヴァ (ハーブ)、R. エトリンガー (指揮)、カペラ・イストロポリターナ
 - 10 ピアノ協奏曲 二短調 K466 より 第1楽章 14:08
イエネ・ヤンドー (ピアノ)、アンドラーシュ・リゲティ (指揮)、コントゥス・ハンガリクス
- Total Time 75:15

CD
2

- 1 クラリネット協奏曲 長調 K622 より 第2楽章 7:15
E. オッテンザマー (クラリネット)、J. ヴィルトナー (指揮)、ウィーン・モーツァルト・アカデミー
 - 2 ヴァイオリン・ソナタ 短調 K304 より 第1楽章 6:38
西崎崇子 (ヴァイオリン)、イエネ・ヤンドー (ピアノ)
 - 3 ピアノ・ソナタ 変長調 K333 より 第1楽章 7:30
イエネ・ヤンドー (ピアノ)
 - 4 弦楽四重奏曲 八長調 K465《不協和音》より 第1楽章 10:49
エーデル弦楽四重奏団
 - 5 弦楽五重奏曲 短調 K516 より 第4楽章 10:14
エーデル弦楽四重奏団、ヤーノシュ・フェヘルヴァーリ (ヴィオラ)
 - 6 オペラ《クレータの王イドメネオ》K366 より 序曲 4:46
バリー・ワーズワース (指揮)、カペラ・イストロポリターナ
 - 7 オペラ《フィガロの結婚》K492 より「もう飛ぶまいぞ、この蝶々」 3:56
N. デ・カロリス (バイトン)、P.G. モランディ (指揮)、ハンガリー国立歌劇場管弦楽団
 - 8 オペラ《魔笛》K620 より「地獄の復讐がわが心に煮えかえる」 2:59
ヘレン・クオン (ソプラノ)、M. ハラーラス (指揮)、ブダペスト・ファイロニー管弦楽団
 - 9《戴冠式ミサ》八長調 K317 より《アニユス・デイ》 6:25
J. ヴィルトナー (指揮)、コシツェ・ティーチャーズ・クワイア、カメラータ・カソヴィア
 - 10《レクイエム》二短調 K626 より《ラクリモサ》 3:19
スデニク・コシュラー (指揮)、スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団・合唱団
- Total Time 63:51

主な参考文献

- 『アマデウス—モーツァルトとサリエリ』 海老澤敏ほか著 サントリー株式会社 1987年
- 『音楽の手帖—モーツァルト』 青土社 1981年
- 『超越の響き』 海老澤敏著 小学館 1999年
- 『人間モーツァルト』 海老澤敏ほか編 岩波書店 1991年 (〔モーツァルト〕1)
- 『モーツァルト』 ミシェル・バルティ著 海老澤敏監修 高野優訳 創元社 1999年 (『知の再発見』双書04)
- 『モーツァルト 改訂』 海老澤敏著 音楽之友社 1986年
- 『モーツァルト研究ノート』 海老澤敏著 音楽之友社 1973年 (〔モーツァルト叢書〕1)
- 『モーツァルト事典』 海老澤敏・吉田泰輔監修 東京書籍 1991年
- 『モーツァルト事典』 冬樹社 1982年
- 『モーツァルト書簡全集』 全6巻 海老澤敏・高橋英郎編訳 白水社 1976～2001年
- 『モーツァルト像の軌跡(上)(下)』 海老澤敏著 音楽之友社 1977年 (〔モーツァルト叢書〕9、10)
- 『モーツァルトと女性』 カローラ・ベルモンテ著 海老澤敏・栗原雪代共訳 音楽之友社 1974年 (〔モーツァルト叢書〕4)
- 『モーツァルトの音と言葉』 海老澤敏ほか編 岩波書店 1991年 (〔モーツァルト〕3)
- 『モーツァルトの現在』 海老澤敏ほか編 岩波書店 1991年 (〔モーツァルト〕4)
- 『モーツァルトの生涯』 海老澤敏著 白水社 1984年
- 『モーツァルトの旅』 全5巻 海老澤敏・R. アンガー・ミュラー文 音楽之友社 1991～1992年
- 『モーツァルト—没後200年記念』 海老澤敏ほか著 サントリー株式会社 1991年
- 『モーツァルトを聴く』 海老澤敏著 岩波書店 1983年
- 『モーツァルトI』 音楽之友社 1993年 (作曲家別名曲解説ライブラリー13)
- 『モーツァルトII』 音楽之友社 1994年 (作曲家別名曲解説ライブラリー14)
- 『歴史の中のモーツァルト』 海老澤敏ほか編 岩波書店 1991年 (〔モーツァルト〕2)

編・著者略歴

海老澤 敏 (えびさわ びん)

東京大学文学部美学美術史学科卒業、同大学院修了。現在、日本モーツァルト研究所所長、新国立劇場オペラ研修所所長、日本モーツァルト協会会長、ザルツブルク国際モーツァルトウム財団名誉財団員、同財団モーツァルト研究所所長、ボローニャ王立音楽アカデミー名誉会員、国立音楽大学元学長・理事長・学園長、新国立劇場前理事長。著書に『モーツァルトの生涯』(白水社)、『超越の響き』(小学館)、『モーツァルトを聴く』、『変貌するモーツァルト』(以上岩波書店)、訳書に『モーツァルト書簡全集』(全6巻、共編訳、白水社)、『ルソー全集』(全12巻、音楽論、白水社)など多数。

[本書の監修および、Part 1を執筆]

葉山 真理 (はやま まり)

Mary Colby School 卒業、桑沢デザイン研究所研究科卒業、日本脚本家連盟、日本放送作家協会、日本音楽著作権協会の正会員。第48回大阪フェスティバル井上道義指揮オペラ物語『プリリアント・モーツァルト』脚本を担当。共著『NHK 毎日モーツァルト』(物語「永遠のモーツァルト」)(NHK 出版)。

[本書 Part 2、3を執筆]

渡辺 千栄子 (わたなべ ちえこ)

国立音楽大学音楽学部楽理科卒業、同大学院修了。現在、日本モーツァルト研究所所員、国立音楽大学付属高等学校講師。共著に『モーツァルト全集』(小学館)、『モーツァルト事典』(東京書籍)などがある。

[本書 Part 4、コラム、付録を執筆]



モーツァルトの名曲

2006年11月9日 初版発行

2006年12月20日 第2刷

編著者 海老澤 敏

© Bin EBISAWA.2006

発行者 田村 正隆

発行所 株式会社ナツメ社

東京都千代田区神田神保町1-52 加州ビル2F (〒101-0051)

電話 03(3291)1257(代表) FAX 03(3291)5761

振替 00130-1-58661

制作 ナツメ出版企画株式会社

東京都千代田区神田神保町1-52 加州ビル3F (〒101-0051)

電話 03(3295)3921(代表)

印刷所 東京書籍印刷株式会社

ISBN4-8163-4231-1

Printed in Japan

<定価はカバーに表示してあります>

<落丁・乱丁本はお取り替えます>

本書の一部分または全部を著作権法で定められている範囲を越え、ナツメ出版企画株式会社に無断で複写、複製、転載、データファイル化することを禁じます。